幻想郷と家出男

辻虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想郷と家出男

【Ｎコード】
Ｎ７６６７Ｔ

【作者名】
辻虎

【あらすじ】
家出したら幻想郷。オリ主の話です。

００ー家出男の家出（前書き）

晴輝が幻想郷に入る一ヵ月前のお話です。
東方キャラが出ませんのでよろしくお願いします。

００一家出男の家出

神田春輝は広い屋敷にいた。
和風で庭が広く池には鯉が居る。
「よし、これで大丈夫だな」
着替えやテント、食糧などをカバンに詰める。
「これで後は……」
丸めた紙を広げるとこの屋敷の見取り図が描かれている。
「計画は今日の１２時……」
だがしかしまだ計画の時間まで２時間はある。
とりあえず今は計画に抜かりは無いか見取り図を良く見る。
親父が死んでもう五日目、未だに現実を直視できなかった。
「家出するなら今日しかない……」
そう今日が家出男の最初で最後の家出となる。
壁に貼ってある日本地図を地面に置き畳に腰を下ろす。
「何処に向かうかが問題だな」
仰向けになり天井を見る。
「この部屋ともお別れだな」
机や棚は綺麗にされているが本棚だけは散らかっている。
和菓子や洋菓子の料理本や雑誌である。
「結局どっちも選択出来なかった」
晴輝は和菓子の専門校に通っていたがそれも諦めて家出をするのだ。
母からは家を継げと言われ親父からは好きな道を行けと言われた。
だがどちらも選ばずどちらの選択肢から眼を逸らし、そして背を向けたのだ。
「負け犬」
そう呟くが自分は戦ってすらいない、敵前逃亡とも言える。
ただの弱者だ。

「それでも良いんだ」
そう思って体を起こし時計を眺める。

「もう頃合いだな」
荷物を背負い畳を捲る。
畳の下からは人一人が余裕で通れる通路があった。
神田家の子供が代々この隠し通路から外へ出のだ。この通路は屋敷の外に繋がっている。
「行きますか！」
通路に入り畳を元に戻す。
通路は直線で一分もしないうちに外に出られる。
「良し、出た！」
カバンを背負いつつ、バイクのある場所へ走る。
そしてカバンを置き急いで通路に入り自分の部屋へと戻る。
「ま、間に合った！」
畳の下から這い上がり急いで畳を元に戻す。
息を切らしてその場に倒れる。
「良し、次だ」
立ち上がり部屋を抜け出して忍び足である部屋に移動する。

「着いた」
部屋には仏壇がありある写真と刀が置かれている。
親父の写真と愛刀の『龍炎』だ。
「これさえ持ち出せば」
そう言って仏壇に近づき刀を取ろうと手を伸ばす。
「行けません、九代目！」
そう言うと何人もの薙刀を構えた女性が入ってくる。
メイドの代わり、黒子とも言えるこの神田家を裏で支えてきた人たちだ。
「神田家の九代目当主であるのなら……お解り頂けますね」

そう神田家当主は前当主が死ぬと神田家の長男が自動的に当主となる。
だがしかし今の晴輝にはそんな名前関係など無い。
「残念だが解らねぇ！」
刀を取りそのまま庭に出る。
「さぁ、最後のお稽古だ！」
刀を鞘から抜き鞘を腰に差す。
「かかってきな、相手してやるよ」
「やぁぁぁぁ！」
薙刀を構え突っ込んでくる。
だが薙刀を受け流し相手の手を刀の柄で叩く。
「ッッ！」
相手は手を抑え薙刀を握る手が弱める。
「貰った！」
相手の薙刀を奪い取り刀をしまう。
そのまま後ろを向いて走りだす。
「お待ちください！」
その後ろを数名が追いかけてくる。
晴輝は薙刀を地面に差し、それを踏み台に塀を登る。
「じゃあな」
塀の上を走る姿はまるで忍者の様に見える。
塀から飛び降りてバイクのある場所まで走る。
「相棒、行くぜ」
バイクにキーを差してエンジンが眼を覚ます。
そのままバイクはエンジン音を響かせ闇夜に消えていった。

家出をして一週間がたった。
「まぁ、とりあえず西に向かうか」

そして三週間がたった。

バイクはスピードを上げて疾走するがブレーキが利かない。
「止まってくれぇぇぇぇ！」
バイクはガードレールに衝突して晴輝と共に宙を舞い、海へダイブした。

そして運命の五週間目。
「はぁはぁ」
息を切らし目を覚まさなくなったバイクと共に森の中を彷徨う。
「追手がここまで来たか」
もう駄目だと呟き木に凭れる。
「親父、ゴメン」

日が昇り鳥の囀りが聞こえる。
「ん……あっ？」
晴輝が目を開けると景色が変わっていた。
「ここ、何処だよ？」
辺りを見渡すが森と言う以外は変わっていない。
それが彼の幻想入りであった。

００一家出男の家出（後書き）

感想よろしくです。

０１－森に迷う程度の能力

「はぁはぁはぁはぁ」
右も左も木に囲まれている。たぶん森の中だろう。
心臓はドクンドクンと今にも破裂しそうな勢いだ。
唐突だがここで一言。
「助けてくれ……」
学ランの上は何処かに行方をくらまし、ボロボロのＹシャツには血が少し滲んでいる。
息を整えようとするが上手い事酸素が喉を通らない。
肺に着く前に吐き出してしまう。
俺、神田晴輝（かんだはるき）は家出をした。ほんの二週間前の話だ。家での生活が苦しくなり家を飛び出した。
我が家は戦国時代から続く将軍家の子孫らしい。
そのため日々、剣道や武術を習ってきた。
その所為かちょっとやそっとでは疲れない自信はあったのだがそんな自信も亀裂の入ったダムの如く崩壊した。
あれはいわゆるチートキャラだろう。
「アレー、いないぞー」
きた！奴だ。
金髪に赤いリボンをした幼女が周りを見渡している。
彼女が俺を追い回している張本人だ。
「うーん、いないぞー」
幼女はまるで鬼ごっこをしている様な無邪気な顔である。
「さぁ、如何したものか」
晴輝は息を殺しそっと腰の刀に手を着ける。
「……」
だが刀から手を離す。
いくら相手が強いからと言って刀はマズイ。

誤って彼女を傷つけかねない。
（ここは……）
晴輝は大きく息を吸い、吐く。これを何度も続ける。
そうして最後に息を大きく吸い、幼女に向って走り出した。
「お、いた」
幼女はこっちを向き、邪悪な笑みを向けていって、
「いただきます！」
そう言って向かってきた。
彼女の両手には黒いオーラのモノが纏っていた。
（成功するかわからないがこの一撃にかける！）
そうして彼女にぶつかりそうになったその時！
パァァンと彼女の目の前で両手を勢いよ良く合わせた。猫だまし
である。
「おわっ！」
彼女は予想以上に驚き尻餅をついた。
彼女の上をジャンプし、そのまま森の中を走った。

01 ― 森に迷う程度の能力（後書き）

感想よろしくお願いします。

02 ― 暗闇に潜む妖怪

「何とか逃げ切った」
金髪の幼女から逃げ切る事に成功した神田は木に体重を預けていた。
神田は理解していた。ここは日本ではない、と。
さっきの金髪幼女は確かに日本語を使用していたが殺気を感じた。
それも尋常じゃないぐらいのものだ。
五日ぐらい前だろうか、目が覚めると辺りは変化していた。
ジメジメとした空気が辺りを包み込みキノコが無駄に大量生産されていた。
「うぇ……気持ち悪い」
この森からはさっさと抜け出したいのだがさっきの金髪の幼女が邪魔をしてくる。
（とりあえずテントの張ってある場所まで戻る事にしよう。）
十分程度歩き青いテントを張ってある所まで戻ってきた。
「ふぅ、落ち着いた」
テントの中に入り腰を下ろそうとするが連続で走った所為か脚が鉛の様に重いため尻を打つような形の座り方になってしまった。
「食料はあと持って数日、早く人のいる場所に出ないとな……」
鞄の中には飴玉とカンパンと水だけだ。携帯は壊れてしまい何の役にも立たない。
「さてと、如何したものか……」
「うまそーだなー」
「ッッ！」
聞き覚えのある声に驚き腰に差している刀を握る。
飴玉を凝視しているのはさっきまで追いかけてきた金髪幼女だ。
「飴玉がほしいのか？」
とりあえずそう言うと彼女は無邪気な顔でコクリと頷き口を開け

た。
小さく開く口に飴玉を放り込むと満面な笑みを浮かべた。
(何だ……悪い奴じゃないのか)
安心した。体の力は一気に緊張感と恐怖が抜けていき、今は安心している。
「そう言えば何で逃げてたんだ?」
幼女は飴玉を口の中で転がしながら質問をしてきた。
「ちょっと君の事が怖かったから……」
彼女と会ったのは四日前である。いきなり腹を引っ掻かれそれで今は大量出血状態である。
「そーなのかー」
別にどうでもよさそうな相槌を返してきた。
「そう言えばお前の名前は?」
飴玉を右の頬に入れてそう言ってきた。
「神田晴輝、君は?」
ゴクンと何かを飲みこんだ音がしそして彼女は答えた。
「ルーミア!」
無邪気な子供の笑みを浮かべ元気良く答えた。
「ルーミアって言うんだ、あと飴玉は飲みこまないほうがいいぞ」
そういってまた飴玉の包みを解き飴玉をルーミアの口に放り込む。
飴玉をとても気に入ったらしく顔がとても幸せそうだ。
「ルーミア、この森には誰か住んでないの?」
そういうとルーミアは飴玉をまた飲みこむ。
「あっちの方に普通の魔法使いか人形の方の魔法使いがいるよ」
彼女はテントの入り口を指した。
それを聞くとテントからルーミアを出しテントを片づける。
テントを鞄にしまって歩き出す。
軽く誰かに手を握られる。
「私も行っていいか?」
ルーミアが興味津々な顔をして訪ねてくる。

「ああ、いいぜ。旅はみちずれってよく言うし」
ルーミアが両腕を横に伸ばし、テトテトと駆けていく。
それに付いていくのであった。

02 ― 暗闇に潜む妖怪（後書き）

感想よろしくです。

０３ー普通の魔法使い

歩いて二十分ほど経過しある家と辿り着いた。
太陽は真上を向いているので昼時だ。
「霧雨……魔法店？」
何かしらの売店だろうか。
「こんな山奥に……何で」
ルーミアは途中で寝てしまい背負っている。
日本にもありそうな普通の家だが少しだけ壁からキノコが生えてる。
とりあえず家の玄関に立ちトントンとドアを叩く。
だが返事は無い。
「留守かな……？」
（まぁ少し経てば帰ってくるかもしれない）
そう言って家の近くの木にルーミアを下ろす。

丁度その同時刻。
「ふむふむ、なるほど」
箒に跨り彼女は宙を飛ぶ。
「パチュリーの所の本はやっぱり面白いな、少し怒ってかもしれないがまぁ良いか」
彼女も女なのに乙女心を理解できないのは何故だろうか。
「まぁ、今回は少ない方だし怒ってないと思うぜ」
白い風呂敷は大量に本が入っている。
「それでも少し重いな、誰か助手にして手伝わせるか……」
彼女は本を風呂敷の中に戻し箒を強く握る。
「アリスは……先週怒らせたし、霊夢は……金を取られるぜ」
自分の手足の様に動きなおかつ自分に忠実な奴。
「まぁ、そんな奴は幻想郷にはいないか」

そう言うと彼女は高度を落としていく。
「おっ、アレは……」
彼女の目には彼女自身の家の前に誰かいる事に気づく。
「お客か！」
そう言って自分の家目掛けてスピードを上げる。

木に下ろしたルーミアはすぅすぅと可愛らしい寝息をして寝ている。
「バカだな、俺」
彼女は最初から友好的だったのかもしれない。彼女が最初に会った時に攻撃したのはカバンの飴が欲しかったのかもしれない。そうじゃないとしても彼女は二回目には攻撃してこなかった。
「人を見た目で判断するなんて……」
親父がいたら叩かれていたかもしれない。
「おっと、ここには親父はいなかった」
でも元の世界に帰ってもいない。
「如何すれば良いんだ……親父」
そう言って刀を強く握る。
「……い」
「ん？」
その瞬間、何かが聞こえた。
「……ゃーーーい」
また何かが聞こえる。
「何だ人の声か？」
木から離れて辺りを見回すが誰もいない。
「いらっしゃーーーい！」
視線を上に動かす。
「えっ！？」
自分よりやや年下の少女が俺目掛けて飛んできた。
魔女の様な服を着てルーミアと同じ金髪で色々と説明したいが目の前の非科学的な現象に驚いている。

「何で箒で空飛んでんの――――！」
箒の先端が鳩尾にクリティカルヒットする。
勢いのあまり空中でトリプルアクセルを繰り出しそのまま頭から地面へ落ちた。
「おおっ、凄い！」
ルーミアは眼を覚まし神田の見事なトリプルアクセルに拍手を送る。
「げほっげぼっ！」
着地さえ失敗してなければ金メダルは取れるだろうトリプルアクセルを繰り出した神田選手は盛大に噎せていた。
「霧雨魔法店へいらっしゃい、私はここの店の主」
箒から降りて彼女は地面に立つ。
「霧雨魔理沙だぜ」
それを聞き終わると神田の意識と視界は暗闇へと沈んでいった。

０３ 普通の魔法使い（後書き）

感想をよろしくおねがいします。

０４ー普通の人間の素性（前書き）

今回はちょっとだけシリアスなう。

０４ー普通の人間の素性

「ん、あ？」
眼が覚めると知らない天井が目の前に現れた。
「ここは……痛っ」
上半身は服を着ていない。代わりに包帯が胸の辺りに巻き付いている。
「ええっと……」
記憶が曖昧だった。立ち上がり窓から外を見るともう太陽が沈みかけている。
「おおっ神田！」
振り返るとルーミアが食器を運んできた。
「眼を覚ましたか」
その後ろから自分よりやや年下の少女が入ってくる。
「えっとルーミア、この人は？」
「普通の魔法使いだ」
そう言ってルーミアは神田に駆けていく。
「おいおい、さっき自己紹介したのに忘れたのかよ」
さっきと言っても数時間も前だし、それに気絶していて記憶も曖昧になっているのだから仕方がない。
「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ」
そう言うと彼女はルーミアの持ってきた食器を神田に渡す。
「あの……これは？」
食器を覗くとキノコが入った液体がある。
「キノコのスープだ、口に合うと嬉しいぜ」
香りは良いがこのキノコ何処かで見覚えがある。たしかこの家に生えていたような……気のせいか。
スープを飲み終えると魔理沙は椅子に腰を掛ける。
「アンタは神田晴輝で良いんだよな、ルーミアから聞いたぞ」

ルーミアは俺の座っているベットの上で正座をしている。
「アンタに質問したいんだが良いか」
「ああ、良いよ」
「質問その一、アンタは何処から来たのか。
質問その二、何しにここに来たのか、
そして質問その三、アンタの詳しい素性が知りたい」
彼女は真剣だった。
「俺は神田晴輝、森で迷ってたら多分この世界に来たんだと思う」
「思う？」
「五日ぐらい前に気が付いたら周りの雰囲気が変わってたんだよ」
「五日もこの森にいたのか」
「ああ、そしてルーミアと出会ったんだ」
魔理沙は依然として表情は変わらない。
「そーなのかー」
ルーミアにはもう少し緊張感を持ってほしい。
「そうしてルーミアに教えてもらったんだ、この家があるって」
本人は依然と無邪気な笑みを変えない。本当に緊張感を持ってほしい。
「俺は十九歳、ただの普通の家出男だ」
魔理沙は強張った顔を緩める。
「まぁ、ここまでは予想通りだな、じゃあ」
そうしてある物を取りだしてまた顔が強張る。
「これはどう説明するんだ」
そう俺が護身用として身に着けていた刀だ。
「……」
「これは本物、それもかなりの名刀……いや妖刀か」
「……妖刀『龍炎』、刀身は蒼く美しいが何万と言う人間がこの刀に血を吸われたんだ」
我が家に伝わる名刀でもあり妖刀、そして……
「俺の親父の形見だ」

「……！」

親父は変わった人だった。一年中和服で外出も和服、変わり者と言われ続けた。でも最高の親父だった。何時も笑顔で接してくれて俺が悪い事をしても一発頭を殴ってこう言う。

『犯した罪の重みを感じる事が大事だ』と。

「親父は一月前にポックリ旅だったよ」

「お袋はこの刀が目的で親父に近づいてきた、お袋はこの刀を売って大金を得るつもりだったらしい。その前にこの刀を俺が持って家出をしてそれで現在に至る」

「まぁ、信じるか信じないかは霧雨さん次第だよ」

魔理沙は俺の顔を上げた。

「ま、まあ有りそうな話だな」

神田はポケットからまだ使っていない綺麗なハンカチを取りだした。

「な、何だよ」

「とりあえず、これで顔拭いてください」

魔理沙は少し涙を流していた。

「な、泣いて何かないぜ、これはその……」

強情な人だなと内心思いつつも神田はハンカチを手渡す。

「あ、ありがと」

少し照れながらも魔理沙はハンカチを受け取り涙を拭う。

「よし、アンタ」

「はい、何ですか」

俺は隣にいるルーミアを起こそうとする。多分難しい話だから寝てしまったんだろう。

「私の助手にならないか？」

「えっ？」

この時、魔法使いと人間の助手のコンビが誕生した。

０４ー普通の人間の素性（後書き）

感想よろしくおねがいします。

０５ー魔法使いの助手

「ふわぁぁ……」
眼を擦りテントから出る。
近くにある川から水を汲みあげテントまで運ぶ。
「よし」
カンパンの缶をコップ代わりに使い水を飲む。
テントは三人なら余裕で眠るスペースはある。
魔理沙から聞いた話ではここは幻想郷、人間はいるが妖怪や神様もいるらしい。
テントに何故いるかと言うと魔理沙も年頃の女性ですし、ルーミアは魔理沙家の中だ。
「とりあえずは着替えだな」
そう言ってＹシャツのボタンを外す。
「……」
包帯を外し終わると鳩尾の所を触る。
「昨日まで痛かったのに嘘みたいだ」
もう痛みは無い。
「これも魔法なのかな」
そうだとすれば魔理沙には感謝しなければ。
「ん――――」
テントの外から魔理沙の声がする。
「ああ、おはようございます」
魔理沙は大きく背伸びをし、箒を持つ。
「ああ、おはよ」
「ルーミアは？」
「まだベット、書き置きは残したから大丈夫だぜ」
そう言って箒に跨る。
「いくぞ晴輝」

そう言って神田を手招きする。
「えっと、何処へ？」
「この幻想郷は広いからな、お前の脚じゃあ多分６０？が限界だろう、だから良い物を貰いに」
「わかりました」
「あ、その晴輝。敬語とかさん付けは止めてくれ、後堅苦しいから魔理沙でいいよ」
魔理沙はそう言って頬を掻く。
「わかった」
神田は近づき箒に乗る。
「と言うか当てはあるのか？」
「ああ、ある」
自信に満ちた声で返事を返す。
「行くぜ！」
そう言って箒は宙を浮き上へ上昇する。
「おお、高い高い」
あっという間に森の木の高さを超える。
「綺麗だな、幻想郷って」
目の前には緑が広がっている。
「晴輝は元の世界には帰りたくないのか？」
「別に良い、ここに自分の骨埋めるのも悪くはない」
「そ、そうか……安心したぜ」
「えっ何か言った？」
「えっ、いや、そろそろ行くぜ」
そう言って箒は前へと前進し始める。
風は心地良く森の中より空気が澄んでいる。
「あ、そう言えば」
「どうした晴輝？」
「魔理沙に感謝しなきゃなって」
「如何してだ？」

「俺を助手として雇ってくれた事や治療してくれた事だよ」
「べ、別に良いんだぜ」
魔理沙の顔が少し赤くなった。
「ありがとな魔理沙」
「……！」
魔理沙の顔がトマトの様に真っ赤になった。
「ぶ、ぶっ飛ばすから喋ると舌噛むぞ」
「あ、ちょ、まっ」
その瞬間凄い勢いで箒が加速を始め神田は魔理沙の腰に腕をまわす。
「……！！」
その時またスピードが上がる。
１０分後、目的地の上空へと到着した。
「ここは？」
「妖怪の山だぜ」

妖怪の山から少女がカメラ越しで２人を覗いていた。
「あややや、アレは魔理沙さんと誰でしょうか」
彼女は背中の羽を広げ飛ぶ態勢へと移る。
「スクープが飛んできましたか」

０５ー魔法使いの助手（後書き）

感想よろしくお願いします。

０６ 芥川龍之介の河童（前書き）

毎回午前7時に登校しますのであしからず。

０６ 芥川龍之介の河童

妖怪の山に着地して三十分が経った。
「お願いだ、にとり。それ貸してくれ！」
魔理沙がにとりと言う彼女は機械を弄っていた。
とても見覚えがあるが何故これがこんな所にあるのだろう。
「だめ、これは紫から預かったんだから」
そう言って機械を弄る。
「あの、これって」
「ああ、これはバイクって言って紫って奴がどっかから持ってきた……」
そう魔理沙の言うとおりバイクだ。魔法がある世界なのだから今さら何が起きても驚かない自信があった。
だが今は違う。
「これ、俺のバイクだけど……」
「はい？」
にとりがこっちを睨みつけた。
「あの……どちら様で？」
「ああ、紹介が遅れたぜ。コイツは神田春輝、私の助手だよ」
にとりが工具を持ちながら近づいてきてジロジロと見る。
「じゃあ証拠は？」
ポケットからバイクのキーを取りだしバイクの鍵穴に差し込み鍵を捻る。
ブゥゥゥンとエンジン音を鳴らしバイクが震えだす。
「何とか大丈夫みたいだな」
このバイクは一緒に家出をした大切な仲間である。
「海にダイブした時はダメかと思ったけど」
家出をしてる際にバイクのブレーキが壊れそのまま海へとダイブしたのだ。そのおかげでバイクがダメになってしまった。

「おお、動いた！君、これで少し走ってくれない？」
眼を覚ましたバイクに興味津々のにとりはバイクの後ろに乗り神田にヘルメットを投げる。
「良いですよ」
ヘルメットを被りバイクに乗る。
「魔理沙もちょっと行ってくる」
「……ああ、私はちょっと用があるから」
魔理沙は少し不機嫌そうな顔をして手を振る。

「出て来いよ、文」
にとりの家の後ろから人が出てくる。
「あやや、気づかれましたか」
気配を消していたのに気付かれてしまうとは腐っても魔法使いと言う訳ですか。
「今、完全に失礼な事を思っただろう」
「わかりましたか？」
魔理沙は笑顔のまま右手を強く握りしめる。
「良いでしょう」
「この射命丸文、逃げも隠れもしません」
鴉天狗、この妖怪の山に住んでいる妖怪の一つであり、幻想郷最速である。
「幻想郷最速の名は私が貰うから安心しな」
「あやや、人間が天狗に敵うと思ってるなんて、１００年早いですよ」
文は翼を広げ、魔理沙は箒に跨る。
「いくぜ！」
「手加減してあげますから本気で来なさい！」
２人は宙に浮き加速を始める。

バイクの調子は好調で風を切る。

「おお、これは想像以上の速さ」
後ろのにとりも満足している。
「これにとりさんが改良したんですか？」
「まぁ、エンジンを電気エンジンに取り換えてとりあえず馬力は1，5ぐらいは上げたし後とりあえず後ろからブースターも取り付けたし、後は光学迷彩しか付けてないけど」
「いやそこまで行ったら魔改造レベルですよ」
「後、出来たら飛ばしたいな」
これ以上するとバイクではなくなると言いたかったが本人は楽しんでいるので口を塞ぐ。
「にとりさん」
「何？」
「バイク直してくれてありがとうございます」
「ぁ、いや、紫に頼まれただけだし、別に自分も好きで弄ってたし……」
にとりの声はだんだん小さくなっていく、そう言えば魔理沙もこんな反応を見せていたような？
「と、とりあえず別に良いよ。それよりそのバイクの黒いボタンを押してみて」
そう言われて見てみると速度計の隣に黒と赤のボタンがある。
「押しますよ」
キュィィィンと言う謎の音がバイクの後方から聞こえる。
「？」
その2秒後、バイクの速度計はある数字を出す。
１３０？。
「ぎゃあああああああああ！」
あまりの速さに一瞬気を失いそうになる。
「に、にとりさぁぁぁん！これは何ですかぁぁぁぁ！」
「加速装置」
簡単な解答ありがとうございます。

バイクは山を駆け抜けていった。

「あやや、さっきの少年の声が聞こえましたが、あなたの彼氏さんは大丈夫なんですか？」

「彼氏じゃない、助手だぜ」

魔理沙は懐から何かしらの六角形の何かを取りだす。

「遂に出しましたか八卦炉」

「恋符マスタースパァァァァァァァァァク！」

八卦炉という六角形の物体から太いレーザーが放たれる。

「どんなに火力があっても当たらなければ意味はないですよ」

放たれたレーザーをかわし手に持ってるカメラのシャッターを切る。

「あやや、別に大丈夫ですよ、写真は私が記事にして幻想郷全体に発信しますので」

「それを食い止めてんだよ、お前なら捏造するだろ！」

「失礼な、別に『驚き霧雨魔理沙に恋人か！？』とか『恋する乙女霧雨魔理沙！相手は人間か！？』とか考えてませんから」

「考えてないのならメモするな！」

「普通の記事なら良いですか？」

「まぁ、普通ならな」

魔理沙に背を向け自分の家に向かって一直線に進む。

文はカメラを取り出して撮った画像を見つめる。

（彼にはまた後日、取材を受けてもらう必要性がありますね）

「ったく、文の奴、変な記事書いたら許さないぜ」

春輝とにとりはまだ帰ってこない。

「……」

あの時、にとりが晴輝に抱きついた時、一瞬だが心が痛んだ。

何か切ない様な悲しい様な感情が渦を巻いた。

「た、ただいま、魔理沙」

「魔理沙、ただいま」
疲れ切った晴輝と満足そうなにとりが返ってきた。
「お、お帰りだぜ」
そのままバイクのスタンドを上げ地面に突っ伏した。
「如何したんだ晴輝!?」
「ちょっと時速１３０?の世界を冒険してきただけさ」
にとりがけらけらと笑う。
「晴輝」
「な、何ですかにとりさん」
「何時でもここに来てね、歓迎するから」
そう言ってにとりは手を差し出す。
「あ、ありがとうございます」
晴輝がにとりの手を触った瞬間、ズキッと魔理沙の心が痛んだ事を２人は知らない。

０６ー芥川龍之介の河童（後書き）

感想よろしくお願いします。

「さぁ、次回は紅魔館（外）のメンバーだぜ☆」ｂｙ霧雨魔理沙

07 ― 紅魔館（前書き）

ついに来たぜ弾幕ごっこ。

07－紅魔館

晴輝は大量の荷物を背負いルーミアと共に湖を目指しバイクを走らせる。
３０分ほど前の事だ。
『五日間で幻想郷を覚えるんだぜ』
そう言われてテントを回収し、五日かけて幻想郷の場所を覚える旅に出た。
とりあえずは紅魔館、博麗神社、人間の里、永遠亭となっている。
ついでに永遠亭からは薬を買うように頼まれたわけである。
とりあえず今は湖の近くにある紅魔館を目指している。
「だけど旅ってのは良いもんだな」
元の世界ではあの母親から逃げてただけだった。でも今は違う、自分の新しい居場所がある。友人がいる。そう思えるだけで嬉しかった。
「ルーミアも紅魔館ってのはどういう所なんだ？」
「んー……デッカイお城！」
簡単な解答をありがとうございます。
「どんな人が住んでるんだ？」
「メイドと引き籠りと小悪魔と吸血鬼の姉妹と美鈴（めーりん）！」
訳が解らない。メイドは理解できるが小悪魔と引き籠りと吸血鬼の姉妹？それに美鈴だけ名前だし。
ルーミアと話していると湖が見えてきた。
「おっ、そろそろか」
大きな湖は太陽の光を弾き光沢を得ている。
バイクを止めるとエンジン音を静まった。
「綺麗な湖だな」
「アイツいるかな？」
「アイツって誰だ？」

「？！」
意味が全く分からない。？とは名前だろうか？
「まあ、進んで見るか」
再びバイクはエンジン音を響かせ走りだす。

バイクを走らせ１５分くらいだろうか。とても大きな屋敷の前に辿り着いた。
「近くで見るとまたデカイもんだな」
そう感心していると近くで何か音が聞こえてくる。
「おっ、この音は」
ルーミアはバイクを降りて音のした方に走りだす。
「あ、ルーミア走ると倒けるぞ……ってお前も飛べるんかい！」

「強いな、チルノ」
「ふふん、アタイは最強だもん！」
「でもアタイの技で凍らしたあげる」
チルノと言う蒼髪の少女は上昇し両手を前に出す。
「雪符ダイヤモンドブリザード！」
大量の氷柱が雨のように降り注いだ。
それをチャイナ服を着た赤髪の女性はギリギリの距離で避けたり、攻撃を手で受け流していく。
「チルノ、美鈴！」
その二人の間にルーミアが入って行く。
「お、ルーミア久しぶり！」
「ルーミア、またアタイと弾幕ごっこしない？」
その後ろから晴輝がバイクを押してやって来る。
「ルーミア飛ぶの速いってば！」
「ルーミア、アレは何？」
「いきなりアレ呼ばわりか」
晴輝を見たチルノは指を指し美鈴と言う女性は何やら攻撃の態勢

に入ってる。
「誰ですか、アナタは？」
かなり警戒されているようで何かオーラを出している。
「あ、えっと霧雨魔理沙の助手の神田晴輝って言います、ちょっと幻想郷の建物とか場所とか覚えるために来ました」
「魔理沙さんの助手ですか……」
とりあえず納得して貰えたがまだ攻撃の構えを止めない。
「ちょっと、アタイは仲間はずれなの！？」
空気を読め？。（チルノ）
「えっと、チルノちゃん？」
「最強であるアタイを無視するとはいい度胸だね」
「あ、いや今は美鈴さんと話をしているから……」
「アタイと弾幕ごっこしよ！」
話を噛みあわせてくれ？よ。（チルノ）
「まぁ、『弾幕ごっこ』ってのは知らないけど良いぜ」
まぁ、所詮は子供の遊びだろうし大丈夫だろうと安請け合いしてしまったがこの後晴輝はこの世界のルールを知ったのだった。

０７ー紅魔館（後書き）

感想よろしくです。
「次回は弾幕ごっこ！」　ｂｙチルノ
「そーなのかー」　ｂｙルーミア
「まぁ、昨夜さんもいないし、ド派手にやりますか」ｂｙ中国（美鈴）

08 ー弾幕ごっこ【チルノ&美鈴】

「じゃあ始めるよ」
そう言ってチルノはポケットからカードを取りだす。
「降参したら負けでスペルカードは二枚まで、場所はこの紅魔館の周りで良い？」
スペルカードって何だ？と疑問に思ったが別に無くても大丈夫そうなので口には出さなかった。
「ああ、良いよ。どうせなら美鈴さんもやりますか？」
「え、私ですか？」
「多いほうが楽しいですし」
「わかりました」
美鈴はチルノに近づき攻撃の構えになる。
「ルーミア、ゲーム開始の合図よろしく」
「わかった」
美鈴がそう言うとルーミアは右手を上げる。
本当にこの三人は仲がいいのだと心からそう思う。
「それじゃあ、スタート！」
ルーミアは上げた手を振り下げる。
一瞬だった。
目の前に美鈴が現れる。
「なっ！？」
「貰った！」
力を込めた左手が晴輝の腹部に向かって飛んでくる。
だがその一撃を紙一重でかわし地面を後ろに強く蹴り距離を取る。
力の入った拳はブンと言うまるで金棒を勢いよく振った様な轟音を鼓膜に響かせる。
（今が当たっていたら多分アバラの骨を何本か折れてた！）
そう思いつつ周りを美鈴を注視する。

「アレ……チルノが居ない？」
ふと気がついたがチルノは何処にも居ない。
「いただき！」
目の前に何かが落ちてくる。
前髪の数本が切れて地面に落ちる。
「ほらね、やっぱアタイは最強だもん」
チルノだった、それも綺麗なガラスの様な剣を持っている。
「氷符ソードブリザード」
剣（つるぎ）は冷気を纏い地面は凍りついている。
急いでその場を離れバイクに置いてきた刀を拾う。
「つ、次はこっちから行かせてもらうぜ」
脚は異常なほど震えていた。
もし一歩間違えれば確実に命を落としていただろう。
これはお遊びであって殺し合いではないとわかっていたとしても今のには正直腰が抜けた。
「これは遊び、これは遊び、これは遊び」
そう言って心を無理やり落ち着かせようとする。
「ていやぁ！」
美鈴は追撃の手を休めるどころか少しずつスピードが上がって行く。
「くっ！」
刀は鞘から抜かずただ正拳突きを鞘で受け流している。
「アタイに任せて！」
飛ぶ事が出来るチルノは上から攻撃して美鈴は陸から攻撃して相手の気を自分にそらす戦法。
「凍符パーフェクトフリーズ！」
「ッッ！」
今度の攻撃は攻撃範囲が広い所為か避ける事が出来ず光の球体に直撃した。
「ふー、中々強かったですよ晴輝さん」

「アタイの最初の一発をかわした事は褒めてあげる」
春輝は見事にカッチコチに凍らされている。
「あ、晴輝さんって人間手でした！」
「そうだぞ～、美鈴はドジたなぁ」
ルーミアが氷漬けにされた春輝を叩いている。
「そうじゃなくて早く助けないと死んじゃうって！」
「アタイの氷は中々解けないからだいじょーぶ！」
えへんと胸を張って鼻が高そうな顔をしているチルノに美鈴は頭を抱え込む。
「あ、でも大丈夫っぽいぞー」
「え！？」
春輝の持っている刀から蒼い炎が出て、そしてやがてその炎は春輝全体を覆いそして
「はぁはぁ、死ぬかと思った！」
チルノの氷を全て融かした。
「チルノ、マジで死ぬかと思ったぞ」
「凄い凄い、アタイの氷をこんなに早く解かしちゃうなんて！」
「えっと、春輝さんって人間ですよね？」
「まぁ外見はね、色々とあるんだよ」
そう言うと第二ラウンドが始まるがまた晴輝が氷漬けにされたのは言うまでもなかった。

０８ー弾幕ごっこ【チルノ&美鈴】（後書き）

感想よろしくお願いします。

「アレ、晴輝のスペック高くね？」ｂｙうｐ主

09 ― 恋する人形使い（前書き）

やりたかったな？話記念。

09 ―恋する人形使い

魔法の森の魔理沙魔法店からあまり離れていない洋館にもう一人の魔法使いが住んでいる。
アリス・マーガトロイド。
「紅茶が入ったわ」
紅茶を客人に振る舞う。
「おお、ありがとなアリス」
客人は霧雨魔理沙である。
「如何したの、あなたがここに来るなんて？」
アリスは椅子に座り右手で髪を弄る。
「実はな、アリスに相談があって……」
魔理沙の顔は下を向き声はどんどんと小さくなっていく。
「あら、あの件だったら別に良いわよ、別に気にしてないから！」
アリスの顔は笑っていたがそのセリフには怒気の様な物も交じっていた。
以前アリスの大切にしていた魔理沙ちゃん人形（四分の一スケールを）を壊してしまったのだ。
「アレは確かに悪かったと思うけど……ちょっと引いたと言うか何と言うか？」
「あら人が何作ろうと勝手じゃないかしら？」
またも笑顔を見せるがセリフにもさっき同等の怒気が混ぜられていた。
「まぁ、私が壊したのは事実だが……」
椅子に座ったままの魔理沙はどんどん小さくなっていく様に見える。
アリスは小さなため息を吐くと再度髪を弄り始めた。
「まぁ、いいわ。それで相談とは何かしら？」
「実はアリス……こ、恋ってした事あるか？」

時が止まった様に感じた。アリスは一時停止した様に硬直をして動かず、魔理沙は顔を真っ赤にして両手の人差し指同士をくっ付けたり話したりしている。

「え、ちょっと待って。今、何て言ったの？」

眼をパチクリとさせたアリスが机から身を乗り出し魔理沙の肩を掴む。

「いやだから……恋って」

「相手は誰なの、アイツか紅魔館の引き籠りか！」

魔理沙の肩を前後に激しく揺らし問い詰めるアリスの顔は真剣だった。

「違う、私は恋なんかしてないぜ！」

そう聞くとアリスは我に返り椅子に座りコホンと咳をする。

「悪かったわ、少し取り乱したわ」

「ならいいんだぜ」

「それじゃあ、私は帰るぜ」

それから数分後、歩行が覚束ない魔理沙を見送りアリスはドアを閉めた。

「魔理沙ったら全く……」

彼女が誰に恋をしているのかその真相がどうしても気になってしまう。

「誰であろうと私は……」

自分の部屋に行き魔理沙ちゃん人形（等身大）に抱き着き顔を擦り付ける。

０９ー恋する人形使い（後書き）

感想よろしくおねがいします。

「次回はついに来たぜ博麗神社！」ｂｙうｐ主

１０－博麗神社

太陽は沈みかけて夕暮れの赤が顔を染める。
チルノや美鈴と弾幕ごっこをしたおかげで服は氷の融けた水と大量に掻いた汗で服は濡れてしまっている。
ルーミアは紅魔館に残り弾幕ごっこをするそうで一人で博麗神社に足を運ぶのであった。
「それにしても濡れた服って気持ちが悪い」
今日は紅魔館の近くでテントを張ろうと思ったが美鈴が『よ、夜の紅魔館の近くは危ないんですよ。屋敷の中の方が危険ですよ！』と追い払われ次の目的地であった博麗神社に急いでいる。
「そうだ、にとりさんの着けてくれた加速装置が……」
バイクの速度計の隣には黒と赤のボタンが付いており黒のボタンが加速装置である。
ついでに赤のボタンは光学迷彩で五分間は効果が持続するらしい。
「ポチっとな」
ボタンを押すとバイクの後方からキュィィィンと言う音が聞こえる。
そしてバイクは信じられないスピードで疾走する。
「ヒャッホォォォォ！」
晴輝は声を甲高く上げてバイクの前輪を上げ夕暮れの草原を走行する。

「案外早く着いたな」
目的地の博麗神社に着いたが火は沈み辺りは真っ暗だ。
「この階段何段あるんだろう？」
神社の階段は自分の身長の何倍もあり気が遠くなりそうだった。
「まぁ神社に来たんだしお賽銭ぐらいは入れとかなきゃな」
ヘルメットを脱いでバイクのキーを抜く。

「まぁ早く着くだろう」

何て思っていた十分前の俺に安易な考えを持つなと言っておきたかった。

「はぁはぁ、何段あるんだよ、この階段！」

息を切らし階段に座り込み上を見上げる。

あと少しなのだが体が重くて登る気すら起きない。

「まぁ、あと少しだ」

そう言って疲れ切った体に鞭を打ち脚を動かす。

「着いたぁぁぁぁぁ！」

最終的には階段をよじ登り、服が汚れてしまった。

「と、とりあえず立とう」

脚に力を入れようとするが限界が近いのか脚が言う事を聞いてくれない。

「ここまでか」

眼が自然に閉じる。

「参拝客にしては来る時間帯が遅いわね」

突然聞こえる声に反応し眼を開ける。

「如何したのかしら行き倒れ？」

目の前にいたのは巫女だった。

少し露出度の高い巫女服を着て腕を組み俺の前に立っていた。

「あ、自分は霧雨魔理沙の助手の神田晴輝って言います」

「魔理沙の？いいわ。立てる？」

「何とか」

脚に力を入れて立ち上がる。

「おっと！」

だが脚は重く体が揺らぐ。

「アナタ大丈夫なの？」

流石に弾幕ごっこが効いたのか体の疲労はピークに達していた。

「ちょっと色々とありまして」
「そう、自己紹介が遅れたわ。私は博麗霊夢（はくれいれいむ）。霊夢でいいわ、あと敬語も無理して使わなくていいから」

「あー、生き返る」
俺は博麗神社を拠点に残りの人間の里と永遠亭を目指す事になった。
「湯加減は如何？晴輝さん」
「良い具合だよ、あと『さん』は要らないから」
湯船に浸かると今日溜まった疲労が消えていく。

「ふぅ、良い湯加減だったよ」
「それは良かったわ」
風呂からあがって何時もの学ラン姿に戻り夜空を見上げる。
「如何したの？」
夕食を運んできてくれた霊夢は一足早く食事に手を出している。
「いや、ここの人は皆優しいんだなって」
「そうでもないわよ、吸血鬼の２人とかは特にね」
「吸血鬼？」
紅魔館に行く際に聞いた単語の中に『吸血鬼』はあった。
「血とか吸うのか？」
「吸うわよ、下手だけど」
吸血鬼なのに吸血が苦手ってどうなんだろうか？
「まぁ、そんな事より早く食べちゃって」
霊夢の笑顔はとても優しく微笑むが何か裏があるようにも思えたのだった。

１０ー博麗神社（後書き）

感想よろしくです。

「萃香は次回よ、まぁあの人も出るかもね」ｂｙ博麗霊夢

11－幻想郷探索2日目

「ん？」
博麗神社で一夜を過ごした晴輝は布団で寝ていた、ハズだったが…
……
「アレ？」
何故か布団を取られていた。
そして何故か部屋の隅に布団がある。
「如何いう状況？」
部屋の隅に移動した布団に近づき布団を拾う。
「なっ！？」
布団の移動現象は布団の中から出てきた。
全裸で2本の角の生えた少女が寒そうに体を縮ませ丸まっている。
「晴輝、朝ご飯がで…き……た」
スライド式のドアを開き霊夢がこちらを見て硬直した。
それもその筈、この絵柄を見て誰もがこう思うだろう。
『晴輝が少女を襲っている』
「萃香に何してんのよぉぉぉ！」
腋巫女の飛び膝蹴りが顔面に命中し、そのままゴロゴロと転がって行く姿はまるでタイヤの様だった。

「……と言う訳で俺は何もしていないので……痛い痛い痛い痛いいいいいいいいいい！」
蹴られたその直後、コブラネックツイストやヘッドロック、サソリ固めを喰らう。弁解の言葉を中々理解してもらえない。
「アンタ、神聖な神社で何て破廉恥な事をしてくれてんのよ！」
このセリフはもう3回目だが回数を重ねていく毎に怒気がどんどん増していく。
「ふあぁぁぁぁっ」

さっきの子が伸びをして大きな欠伸をする。
「霊夢、おはよう？」
「『おはよう？』じゃないわよ、なんで疑問形！？」
サソリ固めを終えて次はバックドロップの態勢に移る。
「アンタ、何で俺の布団の中で寝てんだ！？」
腰を掴まれたままの晴輝は手を外そうともがくが外れない。
そのままバックドロップが決まり頭を強打した晴輝は畳の上をのた打ち回る。
「あれ、霊夢の布団じゃなかったのか？」
「ちがうわ萃香、アレは彼の布団、と言うか何で服着てないのよ」
萃香と言う彼女は服を着て腕を組み考える。
「紹介が遅れたわ、彼女は伊吹萃香、まぁ見ての通りの鬼よ」
鬼は初見何ですがと思いつつも萃香に近づき角を見る。
「俺は神田春輝、魔理沙の助手をやっているよ、まぁ、よろしく」
晴輝は萃香と握手をするため手を差し出す。
「ハル、よろしく」
そう言って萃香は晴輝の手を握る。
その瞬間だ。
メキッと言う音が手から聞こえてくる。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁあ！」
「言い忘れてたけど萃香は怪力の持ち主だからね」
それを先に言って欲しかった。

朝の9時くらいだろうか、萃香と共にバイクで妖怪の山に登っていた。
前回は空から入ったので山道の案内役として萃香と同行している。
「萃香、こっちで良いのか？」
「こっちだぞ」
ひょうたんの中に入った無色透明の液体を飲んでいる萃香は少々顔が赤い。

「如何した、何か顔が赤い……酒臭い！」
鼻を刺すアルコールの臭いに鼻を手で塞ぐ。
「如何した？」
「アルコール苦手なんだよ」
そう言って酒の入ったヒョウタンを奪い蓋をする。
ひょうたんには『酒』と大きく書かれている。
「ああ、何すんだよ」
萃香は顔を膨らませて少し機嫌を悪くする。
「酒は帰ってからにしてくれ」
「帰さないのなら……うりゃうりぁ」
萃香は両手で晴輝の腋を擽り始めた。
「あはははははっ！ちょ……待って！」
笑い声は山全体に響いた。
その笑い声が鴉を呼ぶとも知らずに。

にとりの住む家の近くまで来た。
萃香はひょうたんを抱えてぐっすりと眠っている。
「にとりさん、来ましたよ」
だが返事は帰ってこない、人の気配はするが肝心の人が出て来ない。
「にとりさん、晴輝です」
「あ、は、晴輝！？ちょ、ちょっと待って今行くから」
そう言うと家の中から何かが倒れる音や割れる音、『ひゅい』と言う奇声まで聞こえる。
「あはは、ゴメンね、とりあえず入って入って」
そう言って中に入ると先客がいた。
犬耳の綺麗な白い髪の同い年ぐらいの少女が将棋盤に向かって真剣な表情を見せている。
「あ。お邪魔だったかな」
「大丈夫、直に終わるから」

そう言うとにとりは将棋盤に向かい腕を組む。
どうやらにとりの方が劣勢の様だ。
将棋は親父が生前の頃に良くやらされたものだ。
下手なのに何度も立ち向かって来てそう言う所が親父の良い所だった。意地を張った子供の様にダルマの様に転んでは立ちあがり転んでは立ちあがり、まるで昔の自分達を見ている様な感覚だ。
「これでどうだ！」
にとりが駒を動かす。
「あ、それだと」
「え？」
相手はわずかに出来た死角を突きにとりの陣に潜入する。
「ひゅい！？」
そしてわずか3分で王を取られた。
「負けちゃいましたか」
にとりはしょぼんと落ち込んでいる。
「そう言えばアナタは？」
白髪犬耳の少女はこっちに振り向く。
「俺は神田春輝、霧雨魔理沙の助手をやっている」
良く見ると彼女には尻尾まである。
「あ、文様が言っていた……」
彼女は何かを考えている。
「あの私は犬走椛（いぬばしりもみじ）って言います」
（ああ、何か犬みたいで撫でたくなるな）
尻尾を左右に振って何と言うか愛らしい。
犬とか猫を見てしまうとついつい遊んでやりたくなるのは人間の性（さが）だろうか。
「あの、あまりじっと見ないでください、照れますから……」
「あ、ゴメン、つい」
何か2人の周りをピンク色の空気が漂う。
この謎のピンクめいた空気ににとりは納得いかない様だった。

「そう言えば晴輝は如何してここに来たの？」
「ああ、いや特に理由は無いかだけどにとりさんがまた来いって言ってたし前はバイクだけ貰って帰ったからお礼をとここに来たんだよ」
「あ、いや、別に良いんだよ！うん、そうだバイク見てくるから２人で将棋でもしてて！」
そう言うとにとりは工具箱を一式を持って外に出て行った。

「ああ、びっくりした」
工具を持ちバイクに近づきぐっすりと眠っている萃香を退ける。
そうしてエンジンをばらし始める。
（格好良いな、晴輝）
乙女モードに入った女性は大抵は恋に一筋であると紅魔館のメイド長は『文々。新聞』で言っていた。
自分がそのモードに入ってしまったのかと思うとその時バカにしていた自分が恥ずかしくなった。
「好きな人とか居るのかな？」
好きな人に対して思うのが大体はこの言葉だ。
恋愛は嫉妬と独占欲が混じっているのよと紫が『文々。新聞』で紫が言っていた。
そうだ、さっき２人に対して思ったのが嫉妬である。
「はぁ」
彼女のため息の理由は誰も知らない。勿論原因である晴輝も知らない。
ただ彼女は秘めた思いを明かさず機械を弄るのだった。

「王手！」
「ああ、やられました」
現在１３勝７敗、まだまだ絶好調である晴輝は５連勝を成し遂げている。

「次は負けません！」
そう言って駒を並べる。
「じゃあ、次はお互いに賭けをしないか？」
「賭け……ですか？」
「敗者が勝者の言う事を聞くって事で」
「面白そうですね」
「とりあえず、妖怪の山の案内してくれないかな？」
「良いですよ、私が勝ったら……」
首を捻り考えている。
「まぁ、時間は沢山あるから戦いながらでも」
「はい」
そう言って神田は歩の駒を一つ前進させるのであった。

11ー幻想郷探索2日目　（後書き）

「うp主と」
「ナレーターが送る」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
「どうもうp主です」
「どうもナレーターです。そしてうp主さん死んでください」
「嫌だよ！」

「今回は晴輝・ルーミア・魔理沙の三人です」
「基本的には
晴輝　お人よし、高スペック、フラグ建築士
ルーミア　マイペース
魔理沙　ツンデレ
となっています」
「わかりやすいですね、そしてうp主さんピチューンしてください」
「何故に！？」
「「感想よろしくです」」

12 ― 恋する図書館（前書き）

最近は忙しくなってきたので毎日投稿が難しくなってしまいます。
ごめんなさい。
時間は何時もと変わりないです。

１２ 恋する図書館

紅魔館の門番の仕事は侵入者を追い払う文字通り門前払いをする事なのだが……

「すぅ……すぅ……」

紅美鈴は門番としては機能しておらず毎日の様に居眠りをしている。

居眠りが既に日課であった。

紅魔館上空に箒に跨った魔女がいる。

霧雨魔理沙である。

晴輝が妖怪の山で将棋をしている時と同時刻であった。

「こうなったら」

魔理沙はそのまま高度を下げて紅魔館へと侵入した。

紅魔館内はとても広い、だが何度も来ている魔理沙には行き場所が限られているのでそんな事は関係ない。

「パチュリー、遊びに来たぞ」

幻想郷一、本が多い場所それがこの図書館である。

何千何万もの本がここにありそしてここの主がパチュリー・ノーレッジ通称『ムキュー』である。

「はぁ、また来たの？前回盗って行った本を帰して貰っていないのだけど」

「また今度返すから、待ってくれ」

と言っても今回が初めてではない。

魔理沙の家にはこれまで借りパクった本が２００冊を突破しているだろう。

「今回は本じゃないぜ」

「じゃあ何よ、まさか恋愛相談？」

パチュリーは紅茶の入ったティーカップを口へ運ぶ。
「ああ、その通りだぜ」
魔理沙は少し顔を赤くして言った。
「ああ、そうなの……って、え!?」
パチュリーは一度は適当な相づちを打ったが魔理沙の意外な一言に驚いた。
「ま、まさか恋愛に全く持って無関心そうで鈍感なアナタが恋ですって!?」
「失礼な私だって女なんだぜ」
「相手は誰!もしかしてあの森の人形遣い!?それともあの紅白腋巫女!?」
紅白腋巫女とはたぶん霊夢の事を指しているのだろう。
「いや、それは教えられないぜ」
そう言って魔理沙は椅子に座る。
(誰か調べる必要があるわね)
そう彼女もアリスと同じである。
目の前の魔理沙に恋をしている。
本人は何も知らず本を読んでいた。
なにも解らずに。

12ー恋する図書館（後書き）

「うp主と」
「ナレーターが送る」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
「どうもうp主です」
「どうもナレーターです。そしてうp主さん星になってください」
「何！俺を嫌いなの？」
「はい」
「ショボーン」
「今回はにとり・美鈴・チルノです
にとり　少しだけ嫉妬深い　純情
美鈴　普通　以外に照れ屋
チルノ　？　？　？
となってまーす（ショボーン）」
「チルノだけ？が三つも有りますね？うp主さん」
「次回もよろしくお願いします……」

１３ 一 鴉天狗

将棋盤の上では結果がついた。
３０分の激戦は晴輝が勝利を収めたのであった。
「ここは？」
案内させられてきたのは『文々。新聞』と言う幻想郷の新聞屋である。
「文様、連れてきましたよ」
中に入ると本やら写真が落ちている。
魔理沙の家と互角ぐらいだろう。
「あやや、スクープが飛んできましたよ」
部屋の奥から翼の生えた少女が歩いてきた。
鴉の様な黒い羽はとても綺麗だった。
「まぁ、散らかっていますがどうぞ上がってください」
そう言って部屋に上がる。
「私は射命丸文（しゃめいまるあや）と言います、『文々。新聞』の記者をやっています。
椛はアシスタントみたいなモノですかね」
「俺は神田春輝、霧雨魔理沙の助手をしてる」
文はカメラとメモ帳を持って来る。
「インタビューと写真良いですか？」
「えっとそれは記事に載せたり……」
「勿論します」
即答だった。まぁここまで来たのだし友好関係が最初から悪くなるのは避けたい。
「お手柔らかに」
返事はイエスだ。まぁ、初対面の人に捏造とかはされないと思うから大丈夫だろう。
「ではアナタの年齢と好きなモノは？」
「歳は１９、好きなモノは和菓子全般」

「魔理沙さんとの関係は？」
「自分は恩人と思ってる」
「魔理沙さんの事どう思っています？」
さっきまでの雰囲気がガラリと変わった。推測だが文の知りたかった情報はここからなのかもしれない。
「良い人だと思っているよ」
「他には？」
ペンをマイクみたいに近づけてくる文の眼は何か輝いている。
何処の世界でも女性と言うのは人の色恋沙汰が好きなのだと確信した。
「まぁ、ちょっと男勝りな面があるけど可愛いし、頼りにしてる」
「ではでは他の人は？」
「他の人？」
「ルーミアに河童、氷妖精、紅魔館の門番、腋巫女、２本角の鬼、そこにいる椛とかの事ですよ」
これまで会って来た人たちの特徴や職業にピッタリと当てはまっている。
「なるほど、全てお見通しと言う訳だ」
文はニコリとルーミア顔負けの邪悪な笑みを浮かべる。
「さぁ、白状して貰いますよ」
観念した。ここまで調べられているのだからもうお手上げとしか言いようがない。
「ルーミアやチルノ、にとりさん、萃香は妹感覚かな、何か危なっかしそうで大人しいから」
「それでそれで次は？」
「美鈴さんは美人だし、霊夢は優しいし」
「霊夢の場合は裏がありますけどね」
「えっ、何か言いましたか？」
「いえいえ続けてください」
何か小声で呟いた様な気がする。

「椛は本人の前で言うと恥ずかしいけど可愛いし……」
椛は少し顔を赤くして下を向いている。
「ほうほう、それは興味深いですね」
「文も皆と同じくらい可愛いけどな」
「あやっ!?」
文はペンを落として慌てふためく。
「あやや、別に私の感想は良いのですよ、私はアナタと他者の関係をですね……」
「事実だから問題は無い」
顔を赤くして手帳を落とす。
「そ、それでは私はネタを探してきます。ゆっくりしていってね！」
文は何も持たず部屋を飛び出し翼を広げて飛んで行ってしまった。

「ふふっ、あんなに慌てた文様は始めてみました」
「と言うか何でここの皆は褒めたりお礼を言ったりすると照れるんだ？」
「ここの皆さんは女性が多いので可愛いなんてあまり言われてないですから耐性が無いのでしょう」
2人で並んで歩き、にとりの家へと戻る。
太陽は真上より少しずれている。午後2時くらいだろうか。
「そろそろ、次に行かないと」
次は人間の里へ向かい藤原妹紅（ふじわらのもこう）と言う女性と合流する事になっている。
「行っちゃうんですか？」
そんな捨てられた子犬の様な眼で見ないでくれと顔を逸らす。
「大丈夫また来るから」
そう言って椛の頭の上に手を置き頭を撫でる。
椛は晴輝の手を受け入れて撫でられる。
「その時はまた将棋しましょう」
そう言って2人はにとりの家まで並んで帰るのであった。

１３ー鴉天狗（後書き）

「フハハハハ！我輩うｐ主と」
「ナレーターが送る」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
「ゼハハハハハ！ついにもこたんが降臨なさるだよ」
「そうですねそれで黒ひ……うｐ主さん」
「どうした、ゼハハハハハ」
「キャラ紹介の方を……（何コイツ、コワい）」
「今回は霊夢と萃香だぜ☆
霊夢　多少凶暴　ツンデ霊夢
萃香　ロリータ　妹っぽい
でありますよ軍曹！」
「そ、それではまた次回」

１４ 人間の里

にとりと椛と別れて下山している。
萃香は人間の里に入ると面倒になるらしいので自分で望んで残った。
「おーい、晴輝ぃぃぃぃ」
何処かで自分を呼ぶ声がするので晴輝はバイクを止めて周りを見渡す。
空を見上げると金髪幼女が宙を飛んでいた。
「お、ルーミア」
紅魔館に残ったルーミアが帰ってきた。
「さっき凄い勢いで変なのが飛んで来たんだ」
「変なの？」
「確かあややとか言ってたよ」
たぶん文だろう、と言うかどれだけ飛んで行ったのだろうか。
ルーミアはそのまま降りて来てバイクの後ろに乗る。
「紅魔館は楽しかったか？」
「うん！」
無邪気に笑うルーミアはとても可愛い。
だが少し大食いの所があるために食費が凄い事になっている。
「じゃあ次は人間の里に向かうか」
バイクに付いている加速装置を使うため速度計のとなりボタンを見る。
「あれ？」
加速装置の黒とステルス迷彩の赤の他に白と青がある。
「何だろう、これ」
警戒しつつも白いボタンを押す。
『ああ、聞こえる？』
そうするとバイクの後方から声が聞こえて来る。

バイクの後方にはパトカーとかに付いていそうな無線機が付いている。
「えっと、にとりさん？」
『ああ、大丈夫っぽいね』
無線機をルーミアに取ってもらい会話を続ける。
「これって無線機ですか？」
『うん、何時でも使っていいから』
何故取り付けたかは置いといてもう一つの疑問に移る。
「質問何ですけどこの青いボタンは何ですか？」
『それも押してみたらわかるよ』
そう言われてボタンを押す。
そうすると速度計のパネルが変わり何かが表示された。
画面には河城にとりと出ている欄が赤く点滅している。
「これは？」
『それは無線機の相手を選択するパネルだよ、こっちから使う時は使用者の欄が光るからね』
河童の技術力と言うのを舐めていたかもしれない。
まさか無線機を取り扱うだけではなく短時間でタッチパネルすら作れるとは……
「じゃあ、ありがたく使わせてもらうよ」
『後呼びの通信機が二つ入ってるから。それじゃあ、何時でも連絡待ってるからね』
そう言ってパネルの河城にとりの欄の点滅が消えた。
「誰からだー？」
「にとりさんっていう河童の人」
バイクの黒のボタンを押して人間の里へと急ぐのであった。

「着いたか」
時刻は夕方の六時くらいだろう。
太陽が少しだけ沈みかけている。

「それじゃあ行きますか」
バイクから降りてバイクを押していく。
ルーミアは何時もの様にぐっすりと眠っている。
偶に会う人達の視線はバイクに向けられていた。
(まぁ、この世界ではバイクは珍しいからな)
「ちょっと、君!」
「は、はぁい!」
いきなり呼びかけられて少し声が裏返る。
「ちょっと人を探しているんだが知らないか?」
話しかけてきたのは白い髪の二十歳前後の女性だった。
「えっと、どんな人ですか?」
「綺麗な白銀の髪に紅い眼、裸Yシャツが似合いそうな女の子なんだが……」
最後の裸Yシャツは趣味なんだろうか。
「えっと名前は?」
「藤原妹紅と言う」
聞き覚えがある、今自分も探そうとしていた人物だ
「えっと……アナタの名前は?」
「上白沢慧音(かみしらさわけいね)だ、よろしく頼む」
晴輝は笑顔に笑顔で返すが心のどこかでこの人は危ないと感じていた。

１４ー人間の里（後書き）

ナレーター「残念ですがもこたんは次回です」
うｐ主「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！」
ナ「感想よろしくお願いします」

15 ― 藤原妹紅

いなばて　慧音さんと共に人間の里で妹紅さんを探す。
「それじゃあ、慧音さんは先生なんですか？」
「まあ、そう言う事になるのかな」
世間話をしながらゆっくりと探す。
慧音さんはここで寺子屋を開いているらしい。
「君は魔理沙の所で助手をしていると言ったけど本当はどうなんだ？」
「どういう意味ですか？」
「他にしたい事とかは無いのか？」
そう言われるといくつか思い浮かぶ。
「和菓子屋を開きたかったんですよ」
「それは凄いな、でも何で開きたいんだ？」
「昔っから追い駆けてたと言いますか……まぁ子供の夢みたいなモノですよ」
和菓子作りは得意中の得意だ。
特に羊羹と饅頭には自信がある。
「今度作ってくれないか？」
「良いですよ、近いうちに」
そう言って話していると慧音さんは立ち止まる。
「居る」
周りを見渡して目を閉じる。
「妹紅、お客さんよ」
そう言うと物陰から人が出てくる。
「慧音、もう怒ってないよな」
出てきた女性は白銀の髪に紅い眼をしている。
何故か額が赤くなっている。
「もう怒ってないわ、アナタのお客よ」

「どうも神田春輝です」
「私は藤原妹紅だ。敬語は使わなくて良いぞ」
幻想郷の人々は年上なのに敬語を使わなくて良いと言う人が多い。
「それじゃあ、妹紅、永遠亭まで連れてってほしいんだけど」
「ああ、お安い御用だ」
ルーミアを起こしてバイクに乗る。
「それじゃあ慧音さんまた今度にでも」
「ああ、よろしく頼むよ」

「慧音と何話してたんだ？」
「今度美味しい物を奢る約束」
「なんだそりゃ？」
バイクは南にただひたすら突き進む。
バイクの三人乗りはとても難しい、サイドカーが欲しいぐらいだ。
「仕方ない、私に付いて来い」
そう言って妹紅はバイクから飛び降りる。
「ちょっ！」
だが妹紅は地面には着かず宙を浮いている。
背中からは炎の翼の様なモノがある。
幻想郷の住人は大抵が空を飛ぶ事が可能である。
「私に付いて来い」
そう言うと妹紅はスピードを上げて飛んで行く。
「ルーミア、捕まっとけよ」
「はーい」
速度計にある黒いボタンを押して加速装置を起動させる。

一日で何回も使った加速装置は音を上げて仕方なくバイクを押して行く事になった。
とりあえず永遠亭への難所である『迷いの竹林』に着いただけでも良しとしよう。

「あの魔法使いの助手になって何日になるんだ？」
「今日で五日になる」
と言っても最近は会っていない、魔理沙も魔理沙なりで忙しいみたいだ。
「ん？」
何かが近付いてくる。
「気付いたのか？」
「まぁ、そこそこ」
並みの人間ではわからない程度の気配だ、驚かれても仕方がない。
「すばしっこいな」
気配は尋常じゃない速さで移動している。
ルーミアも気付いたのか辺りを見渡している。
「幻想郷の詐欺師の登場だ」
三人ともバイクから降りて気配を探る。

「ふふ、面白いのが来た」
兎は望遠鏡を使って三人を覗く。

15 ―藤原妹紅（後書き）

ナ「第一章終りまであと少しですよ」
主「もこたぁぁぁぁぁぁぁぁん！」
ナ「大丈夫ですよまだ出てきていないキャラも出てきますから」
主「ＭＯ・ＫＯ・Ｕ！」
ナ（ダメだコイツ……）

16 ー龍の威圧

こちらには戦闘の意は無い。
だがそう言って何とかなっていたら苦労はしない。
「相手は何が目的なんだ？」
「アイツは腹黒で有名だからわからない」
「そーなのかー」
ルーミアには緊張感を持って貰いたい。
あれ、デジャブ？
「妹紅、何とかなんないのか？」
「なってたら構えてないさ」
それもそうだと思い刀を構えるが……
「あれ？」
腰に差していた刀が無い。
「これは高く売れそうだね」
刀はウサ耳少女が握っていた。
「てゐ……お前か」
「……」
因幡てゐ、それが彼女の名前だ。
てゐは握った刀をジロジロと見たり刀を抜いたりする。
「それを返してくれないか」
晴輝は真剣な表情で言う。
「うーん、そうだね君の身ぐるみと交換でどうだい？」
「てゐ、冗談が過ぎるぞ！」
あまりにも不平等な取引である。相手の物は盗品で元は自分の物だと言うのに。
だが顔色一つ変えずに晴輝はてゐを睨む。
「もう一度言うぞ、刀を返せ」
「だから身ぐるみと交換で……」

晴輝はため息を吐き再度てゐを睨む。
「カタナヲカエセ！」
その瞬間、てゐの配下のウサギたちが何かを感じ取り一気に逃げ出していく。
まるで風が吹いた様に竹が揺れる。
「へぇ？」
てゐは力なくその場で腰を着く。
「ッ！」
妹紅は感じ取った。
晴輝からあふれ出すほどの怒気と殺気、人間から出る殺気はこれほどではない。
「お、おい、どうしたんだよ」
普段の眼の色ではなかった。眼の色は『龍炎』と同じく蒼く美しい、だが本来は黒だ。
「おい！」
妹紅が叫ぶと眼の色は元の黒へと戻る。
「ん、如何した？」
晴輝はまるで今の自分の行動を解らず。
てゐの方は腰を抜かして立てない。
「刀、返してもらうぞ」
てゐから刀を取り返し腰に差す。
「今、コイツ何をした」
てゐは訳が解らずに立ちあがろうとするが脚に力が出ない。
「大丈夫か？」
晴輝はてゐに手を差し出すとてゐは警戒しながらもその手を握る。
「名前は？」
「因幡……てゐ」
「……」
妹紅は今の晴輝の殺気に何か引っかかっていた。

そのまま竹林を歩き続けていると日は沈み辺りが暗くなる。
てゐには晴輝達と共に永遠亭の道案内に付き合って貰っている。
「ここが永遠亭か」
まるで時代劇に出てきそうな古風溢れる家だ。
家の形は歴史の教科書に出てきた写真に似ている。
「とりあえずは……」
家を出る際に魔理沙から頼まれた薬品リストを取りだす。
「てゐ、この薬って頼めば貰えるかな？」
「その前に気をつけた方が良いぞ」
妹紅は晴輝に耳打ちする。
「ここにいるのは普通の人間じゃないからな」

16 龍の威圧（後書き）

うp主からの大事なお知らせ
「あ、やべぇ話のストックが尽きたなう」
と言う事で次回は月曜日延期となります。
ごめんなさい。

17 ― 犬猿の仲

八意永琳、それが幻想郷で有名な医者らしい。
とても優しいが薬の為には弟子さえも実験体にしてしまうと聞いた。
「どんな人だろう」
期待を胸に永遠亭に脚を踏み入れた。
ザクッと言う音が足元から聞こえてくる。
「ん？」
足元には竹が刺さっていた。
竹を抜くと先端が尖っている、竹槍であった。
体中から汗が溢れる。
竹が地面に刺さって間もない間に次の竹槍が飛んでくる。
「ギャァァァァァア！」
竹槍をギリギリで避けるが何本か掠っていた。
「いやぁぁぁぁぁぁあ！」
晴輝の断末魔と共に他の誰かの断末魔も聞こえてくる。
声の方は竹槍が飛んでくる方向から聞こえる。

「師しょー、勘弁してください！」
彼女が師匠と言う女性。
それが八意永琳である。
「大丈夫、うどんげ、別に死にはしないわよ、ちょっと人間辞めて貰うだけだから」
その弟子は今竹槍の雨を受けているのは鈴仙・優曇華・因幡。
「それが嫌なんです！」
永琳は弓矢を構え狙いを定める。
「てゐ☆」
矢はうどんげ目掛けて放たれる。

「おわっ、危ねぇ」
目の前をブレザー姿の謎のウサ耳少女が過る。
「何だ……今の？」
視線の先で何かが光った様に見えた。
「……？」
腹部に何か違和感を感じる。
腹部を見るとYシャツが赤く染まっている。
視界には腹部に矢の様な物が刺さっていた。
「あ……れ？」
視界がぐらりと揺らぎ体から力が無くなっていく。
次第には仰向けに倒れて四肢の感覚さえもが薄くなっていく。
（何だろう、何で俺は倒れてんだ？）
意味が解らずにそのまま目蓋が自然と閉じる。

「あ……れ？」
見知らぬ顔が二つとてゐ、そしてルーミアがいる。
「ここは？」
状況が理解できずにいる。
何故、こんな事になっているのか。
そしてこの2人は誰か？
「本当にすみません！」
頭を下げたのはブレザーのウサ耳だ。
「わたしは鈴仙・優曇華・因幡でこの方が私の師である」
「八意永琳と言うわ、よろしく」
赤と青の服の女性は頭を下げて挨拶する。
「鈴仙さんに永琳さんですか、自分は神田晴輝って言います」
その後何故こうなったかと言うとうどんげに放った矢の一本が俺の腹部に命中してそれで倒れた俺を二日間も看病してくれたのだ。
「神田、大丈夫か？」

ルーミアは少し眼の下に隈を作っていた。
「俺は大丈夫だから少し寝な」
そう言うとルーミアは眠りに着いた。
「そう言えば妹紅は……」

外では2人の女性が戦っていた。
「もこぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「かぐやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
妹紅と黒髪の女性だ。
黒髪の方は着物に身を包んでいる。
名前は蓬莱山輝夜と言う。
「ああ見えて仲良いのよ、あの2人」
戦っている2人を見て永琳がそう呟く。
「あそこまで全力でぶつかるのにはお互いを理解してないと出来ないわよ」
うどんげも腕を組み観戦していた。
2人の弾幕は夜の永遠亭を明るくしていた。

17 ― 犬猿の仲（後書き）

ナ「私、思ったんですが」
主（若本さんボイス）「どうしたんだぁ、フグタ君」
ナ「全部のキャラ出してたら切りがないですよ」
主「大丈夫だお空ちゃんとかお燐ちゃんもちゃーんと出すからして、安心しろベズィータよ」
ナ「私は会社員でもないしサイヤ人の王子でもないです」
「「感想よろしくお願いします」」

18 ー巫女の企み

幻想郷を探索してもう五日が経った。
今は世話になった博麗神社の掃除をしている。
「朝から御苦労さまね」
霊夢が外へ出てきた。
「お世話になったお礼を兼ねてね」
「良い心掛けね」
霊夢に箒を渡して自分は台所へ行った。
今回の件のお礼に料理を振る舞うのだ。
とは言っても別に料理は得意と言うほどでもない。
以前にも言ったが和菓子は自信はあるがそれ以外には殆ど自信なんてない。
「まぁ、とりあえず失敗しない物でも……」

３０分が経ち料理が出来上がった。
「「頂きます」」
霊夢、ルーミア、萃香が手を合わせる。
「普通ね……」
「上手いぞ」
「そーなのかー」
霊夢からは辛口のコメントを頂き、萃香からは褒められルーミアに至っては褒めてるのか貶しているかわからない。
焼き魚と味噌汁、白米と言う日本人の基本的な朝食はそう言う評価しか受けられなかった。
「ねぇ、アナタ、この神社で働かない？」
「えっ？」
霊夢のいきなりの言葉に驚いた。
昨日、夜遅くに帰ってきた晴輝とルーミアに灸を据えた鬼は今日

になって神社の勧誘をしてきた。
「でも魔理沙に悪いし……」
けがの治療や助手として拾ってくれた件もある、それに魔理沙に対して失礼だ。こっちが面白そうだからと言ってこっちに移ったら彼女は傷つくだろう。
「良いのよ、アナタは魔理沙に扱き使われるのと神社で働くのとどっちが良いの」
「悪いけど魔理沙の所の方が良い」
「そう……」
霊夢そう言ってお茶をズズズと啜る。
少し悲しげな表情を見せたのは気のせいだと晴輝は思った。

「晴輝、久しぶりだな」
約束の時間に魔理沙が迎えにきた。
会うのは五日ぶりだが色々と大変な目に遭ったのでとても懐かしく感じてしまう。
「あ、そうだ。これ」
そう言って晴輝は魔理沙にトランシーバーの様な物を投げ渡す。
「にとりが作ってくれた無線機だよ、それがあれば連絡が出来るから」
にとり製のトランシーバーを受け取った魔理沙は少し不機嫌そうだった。
「にとりの所にも行ったのか？」
「ああ、行ったけど……どうした？」
「……別に」
鈍感家出男には複雑な乙女心は解らないのであった。
「なるほどね……」
霊夢は2人の様子を腰に手を当てて見ていた。
「魔理沙、ちょっと話があるんだけど」
「何だぜ？」

そう言って2人は神社の方に行った。

「魔理沙、この請求書は如何するの？」
「うっ、何の事だぜ」
魔理沙は眼を逸らす。
「謎の宴会の代金が3つ、謎の修理代が2つ、私には身に覚えが無いのだけど」
請求書を突き付けられて何も言えなくなってしまう。
「アンタの助手を私にくれるのなら考えても良いわよ」
「なっ！」
「良く働くし気が利くし、魔理沙には勿体無いわ」
「なら手っ取り早くこれで決めようぜ」
そう言ってポケットから八卦炉を取りだす。

「何してんだろう、あの2人」
これまで異変という大事件を解決してきたのがあの2人とは思わなかった。
まだ自分より年下だし手足も細い。
魔法が使えると言っても威力がどれだけなのか解らない。
「魔法……」
両手の手のひらには包帯が巻かれている。
包帯は自分がしたものだ。
「さっさとケリを着けないとな」
両手を強く握り空を見上げる。
「何だあれ……？」
ピンクの球体や黄色の光柱が見えた。
次の瞬間。
神社の裏から爆発音が響いてくる。
「何だ！？」
光と轟音の元へ駆けだした。

18 ―巫女の企み（後書き）

ナ「皆さんお待ちかね久々の」
主「うp主と」
ナ「ナレーターが送る」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
主「皆さん、すいません、色々と取り乱してしまいました」
ナ「そうですよ、あと少しでＭ１３４ガトリング機関銃を放つところでしたよ」
主「確実に死んじゃうよ！」
ナ「今回は犬走椛、射命丸文、藤原妹紅、慧音とパチュリーとアリスです」
主「椛　恥ずかしがり屋
文　攻めに弱いタイプ
もこたん　以外に純情
慧音　もこたん一筋
パチュリー　魔理沙しか見えてない
アリス　魔理沙ぁぁぁぁぁぁ！
となってます」
ナ「と言うか何故引き籠りと人形使いをあとに回したんですか？」
主「まぁ主人公の敵として扱われるからね」
ナ「ふーんそうですか」
主「まぁ逆に咲夜さんやパチュリーがハーレムに入る話を考えてるんだけどね」
ナ「長続きしないと思いますよ」
「「感想待ってます！」」

19 ― 弾幕ごっこ【霊夢対魔理沙】

何かが空中を舞って光球を放ったり避けたりの攻防戦が行われていた。
空を飛んでいるのは魔理沙と霊夢だ。
「魔理沙、弾幕はパワーじゃないの？」
本来の魔理沙は高火力と派手な技で決めているが今回は違う。
無数の細いレーザーが霊夢に向かって襲いかかっている。
（掛かったな霊夢、これはお前を誘導する攻撃。実際は動けなくなった所をマスタースパークでトドメを刺す作戦だぜ）
「とか思っているでしょう」
（なっ！）
霊夢は細いレーザーをギリギリでかわして魔理沙に接近する。
「なら、恋符マスタースパーク！」
八卦炉を前に構えて極太のレーザーを放つ。
だが霊夢は正面からのレーザーを避けようとせずにお札を投げてくる。
お札はマススパークを避けて魔理沙を左右から攻撃する。
「くっ！」
当たると覚悟した魔理沙だったがお札は魔理沙を掠めた程度だった。
「霊夢、残念だったが当たってないぜ」
だが霊夢は目の前には居なかった。
周囲を見渡すが人影などない。
「何処だ！」
「ここよ」
上を見上げると霊夢がお札を手にとって構えていた。
「霊符っ！」
「夢想封印！」

お札は魔理沙目掛けて飛んで行く。
（やられる！）
そう思い魔理沙は眼を閉じて防御の構えを取る。
だが攻撃は当たらずにお札がひらひらと落ちていく。
お札はまるで鋭い刃物で斬られた様な切り口をしている。
「魔理沙、アンタの助手も中々やるじゃない」
魔理沙は辺りを見るが晴輝の姿など無かった。
「下よ、下」
そう言われて魔理沙は下を見ると晴輝が刀を鞘に納めているのが見える。
「ありえねぇ……」
地上からは高さが何mもある、飛べない晴輝ではまず攻撃をする事すら儘ならない。
そんな晴輝が攻撃できるとしたらたった一つだ。
斬撃波である。
だがそんな攻撃は普通の人間では出来ない。
それに不確定な動きの小さな札に当てるなど人間の業ではないのだ。
「アイツは何者なんだぜ」
魔理沙がそう言うのも無理は無い。
晴輝は人間と言う分類から外れているのだから。

「なんじゃ、あ奴は妾と主（ぬし）の違いにも気付かんのか」
蒼い髪の女性は刀を鞘に戻す。
「全く、あの程度の攻撃も避け切れんとはお主の主（あるじ）はダメダメじゃのう」
学ラン姿の彼女は蒼い髪に蒼い眼をしていた。
胸がとてもあるその女性は眼を瞑る。
そうすると体が光り髪の色と眼の色が黒になった。
胸も萎み体も少し大きくなった。

はぁはぁと息を荒らげているのは晴輝だった。
彼女は晴輝へと姿を変えたのだ。
「マジでヤバいな」
そう言ってその場で仰向けに倒れ空を見上げた。
手からは多数の切り傷の様な物があり血は包帯に滲んでいた。

19 ―弾幕ごっこ【霊夢対魔理沙】（後書き）

すいません小説のデータが飛んでしまったので
次回は未定となってしまいました。
本当にすいませんでした。
一週間以内には書き直しますので……
マジですいませんでした。

20ー魔女の集会

博霊神社での戦いから一日たったある晩。
「……」
魔理沙はパチュリーから借りた（返す予定はない）魔道書を読み漁っていた。
中身は意味不明の言葉が並べられていて普通の人間では解らなかった。
「人間が能力を使う方法」
それが調べている項目だ。
魔理沙には晴輝がなぜあの時斬劇波を打ち出せたのか。その事について調べていた。
「謎だぜ」
能力も霊力も持たない人間が何らかの方法で力を得るにはたった一つしか見当たらない。
能力の授与である。
「だけど全然解らないぜ」
晴輝はまだ幻想郷に来て間もないのにそんな都合よく能力など得られないはず。
「だとすると……」
魔理沙にはたった一つだけ怪しく思う物があった。
晴輝の父の形見の妖刀だ。
あれに何らかの能力があったとすれば話は早い。
「だとすると誰に協力して貰うか……」
「私達が手伝うわ」
魔理沙が振り返るとそこにはアリスとパチュリーがいた。
「如何したんだ2人とも？」
「話は大抵読みとったわ、私もアリスも協力させて欲しいのよ」
そう言ってパチュリーとアリスは手を差し出す。

「「私達に任せて」」

2人は心の奥底の怒りと嫉妬の魔獣を抑えつけて魔理沙に言ったのだった。

２０ー魔女の集会（後書き）

主「うｐ主と」
ナ「ナレーターが送る」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
主「皆さん、すいません、データがポンしてしまってすいませんでした」
ナ「うｐ主さんの頭のネジもポンしてるから大丈夫ですよ」
主「さりげに酷いな」
ナ「今回は永遠亭のメンバーです」
主「えーりん　かぐや＆うどんげＬＯＶＥ
うどんげ　師匠に慕ってる
てゐ　悪戯ウサギ
かぐや　ゲーマー　引き籠り
となってます」
ナ「引き籠りってうｐ主の事なんじゃ……」
主「ちがうよ！」
「「感想よろしくお願いします」」

21ー紅魔館潜入編

「それって不法侵入なんじゃ……」
「大丈夫、毎回これだぜ」
助手としての初仕事の日が来た。助手になって10日目の記念日に紅魔館に本を借りに行くらしい。
まずは晴輝が美鈴を突破して、紅魔館に侵入、そして図書館で本を借りると言う作戦である。
「普通に借りに行けば早い様な気がする」
「何だか最近は気前良く貸してくれないんだぜ」
借りパクしてたらさりゃ貸してくれないと思う。
「とりあえず決行は今日の夕方で」
そう無理に押し切られて晴輝は何も言えなかった。

日が沈み始め、改良したバイクをメンテする。
馬力は1・7倍、最高時速は135?を叩きだした。
にとりとの協同での改良は上手く行ったのだ。
「紅魔館に着いたけど如何すればいいの?」
「あの門番と戦ってくればいい」
簡単に言うなよ、オイ。
「武器は使ってもい良いぞ、体力だけは残しといた方が良いからな」
刀を腰に差して門に向って歩き出す。
「楽しそうじゃのう、奴との弾幕ごっこは……」
晴輝は小声で呟き、眼の色を蒼くさせた。

「すぅ……すぅ……」
門番という仕事は門を見張り侵入者の撃退が仕事である。
だがこの門番(めいりん)は門番としては機能していないみたいだ。
「良い顔で寝ておるのう」

（疲れてるんじゃない？）
「主、ここまで妾と繋がるとはな」
（まぁ、こっちも侵略されっぱなしは気に入らないんでね）
「主も奴と同じじゃのう、流石は親子と言うべきか」
（とりあえず起こすか）
「ああ、そうじゃな」
そう言って晴輝の眼は元の黒へと戻る。
「美鈴さん、起きてください」
口調も元に戻った晴輝は美鈴を左右に揺らす。
「むにゃむにゃ……中国じゃ……ない」
安らかに眠って貰おうと思い美鈴をスルーしようと考えた。
「だめじゃ、妾が楽しめてない」
そう言って晴輝は口調を変え眼を蒼く染める。
「こうなったら必殺技じゃ」
蒼眼の晴輝は美鈴の鼻を指で摘み自分の顔を美鈴の顔へと近づける。
（待て待て！今何しようとした！）
「何って息を止めて起こす作戦じゃが……」
（何故に口で口を塞ぐ必要性がある！）
「いやぁ、寝込みを襲うのは男の本能と言うし……」
（違うわ！そんな全国の男は欲求不満みたいな言い方すんな！）
そんな一人コントを繰り出している晴輝を冷たぁぃ眼で見ている女性が1名いた。
魔理沙である。
笑みを浮かべて見守っていたが眼には光が無く、木々で休んでいた妖精やら鴉が飛んで行く。
「何やってるんだぜ」
次第に赤と紫のオーラを放出しだす。
赤は怒りを紫は嫉妬を意味していると思う。
「ふぇ……」

美鈴は騒ぎ（主に魔理沙の殺気）に気付き目を覚ます。
「えっと……顔が近いんですが」
「ちっ、あと少しで面白い事になるはずじゃったのに」
（面白半分で人で遊ぶな！）
美鈴から離れて眼の色を黒に戻す。
「す、すみません！これには色々と事情が……」
「どんな事情ですか？」
顔をほんのり赤く染めた美鈴は背伸びをする。
「あの、美鈴さんの寝顔が可愛かったからつい近くに言って覗きたいなって……」
とっさに思った事を口から出しその場を誤魔化そうとする。
内心では失敗したぁと落ち込む晴輝だったが……
「か、可愛い！？」
（おお、口説いたのぉ）
成功した。
「私は可愛くないですよ、居眠りはするし咲夜さんには叱られてばっかだし……」
「いやいや、十分に美人ですって！」
そんな会話を遠くから聞いていた魔理沙の瞳からは光が消えて赤と紫のオーラが途轍もなく湧き出ていた。
握っていた八卦炉からはバキッと言う音がした。
「何やら悪寒が」
（本妻が怒っておるぞ）
美鈴と晴輝はお互いに軽く深呼吸をして心を落ち着かせる。
「実は今日は晴輝としてではなく魔理沙の助手として来ました」
美鈴は真っ赤にしていた顔を元の健康的な肌色に戻し真剣な顔になる。
「そうですか」
美鈴の方も理解していた。
今回は晴輝は客人でも訪問者でもない。

美鈴の敵である。
「来なさい」
刀を抜き左目を閉じる。
「行きます！」
美鈴めがけて走りだした。

21 ― 紅魔館潜入編（後書き）

流石は紅魔館の門番、仕事はするんですね。
感想よろしくお願いします。

22 ― 紅魔館突撃編

戦いが始まって10分位だろうか。
戦況は晴輝の劣勢。
相手は格闘技に長けているので中々攻撃が出来ない。
『龍炎』は弾き飛ばされて今は素手で戦っている。
美鈴相手に手刀では流石に無理がある。
相手は中国拳法の使い手、遊ばれているも同然である。
これではあまりにも情けない。
「手加減なんてしなくて良いですよ」
「それでは……」
軽い挑発は美鈴の何かに火を着けた。
晴輝の腹部に拳がめり込む。
「ぐふっ！」
そのまま後方に飛ばされて木に背中をぶつける。
さっきまでの攻撃はギリギリ見える程度だったが今度の一撃は違う。
見えなかったのだ。
肉眼では捉えきれない素早さの一撃は腹部と共にアバラの数本を折った。
「げほ……げほっ」
血反吐を吐き地面に伏せてしまいそうになる。
今の一撃、美鈴は少し手を抜いた。
本気の一撃だったら体の骨は全て砕けるだろう。
「帰ってくれないでしょうか？」
美鈴は少し悲しげな表情を見せて晴輝にそう言う。
「まだ……まだ」
立っていられるのは殆ど気力のおかげである。
「美鈴さんの中国拳法ってこの程度ですか……」

美鈴の眉がピクッと動く。
「がっかりです、この程度だとは」
美鈴はポケットから何かしらのカードを取りだした。
スペルカード。この幻想郷で弾幕ごっこ等に使われる切り札。
「なら、見せて挙げます」
スペルカードが光り、そして消滅した。
「気符、地龍天龍脚！」
加速を着けた美鈴がそのまま片足を突きだして飛んできた。
勢い良く飛んできた美鈴に対して晴輝は右手を前に出す。
（これなら当たらない！）
美鈴は本気で晴輝に蹴りなど入れない。
入れてしまったら彼は昇天してしまう。
ギリギリ当たらない様に計算されている。
「フフフッ」
晴輝の眼つきが変わった。
眼の色も変わり髪の色も変わる。
だがその色は蒼じゃない、まるで燃え盛る様な炎の色。
深紅である。
赤髪の晴輝はポケットから何かを取りだす。
「さぁ。祭りの始まりよ」
カードらしき物体の角から火が出る。
火はカードを覆い灰と化した。
「火竜（ひりゅう）『クリムゾン・ブラッド』」
地面が怪しく赤く光りだし、魔方陣が出現する。
魔方陣が消えると地面から紅く鋭く尖った巨大な棘が現れる。
「なっ！」
そのまま美鈴は出てきたに棘に頭をぶつけて倒れる。
赤髪の晴輝は眼を閉じた。
髪と眼の色が元の黒に戻りそのまま木に体重を任せる。
「晴輝！」

魔理沙が木陰から出てきた。
「マジで強いわ、無理だわ、ボス級だわ」
そこまで感想を述べられるのなら大丈夫だろうと思い魔理沙は永遠亭の薬を飲ませる。
「如何だ？」
「少しだけ……楽になった」
（ったく、パチュリーの作戦も今回は頂けないぜ）
この死闘はパチュリーが仕込んだ物なのだ。
昨夜の話である。
『まずは彼を瀕死まで追い詰めないとね』
『ちょっと待てパチュリー！それは流石にやり過ぎだ』
『賛成。魔理沙は知りたくないの？彼の正体を』
『アリス、これはヤバいって』
『大丈夫よ、殺しはしないわ』
今回の作戦は晴輝の本性を暴く為の物である。
「如何した魔理沙、思いつめた顔なんかして」
「い、いや何でもないぜ」
魔理沙の肩を借りて紅魔館の門を開き中に入る。
紅い右目と蒼い左目をした晴輝が笑みを見せたのは魔理沙は知らない。

22 ― 紅魔館突撃編（後書き）

主人公の秘密もあと少しで明かされます。
感想よろしく願いします。
次回は二日後です。

23 ― 紅魔館のパッ……メイド長

門番を突破した晴輝達は紅魔館内部に潜入したんだが。
「ったく、何時になったら俺は休めるんだろうか」
紅魔館のメイドさんとばったり遭遇してしまい魔理沙とは離れ離れになった。
現在は紅魔館にあった大きな部屋に身を潜めている。
何やら奥の方には玉座らしきものがある。
「この部屋は何だろうか」
出入り口の扉がギィィと音を立てて開く。
「っ！」
息を殺してドアの方を向く。
だが少し開いたドアには人影などなかった。
「アナタね、魔理沙の助手と言うのは」
「なっ！」
後ろからの声に驚き振りかえった晴輝はそのまま突き飛ばされた。
「はぁ、中国は何をやっていたのかしら」
銀髪の女性は腰に手を当ててため息をつく。
「中国？」
「紅魔館（ここ）の門番よ」
晴輝はとっさに美鈴の事だろうと気が付く。
「中々手ごわかったですよ、美鈴さんは」
（ここは妾に代われ）
心の奥から声が聞こえた。
「いや、大丈夫だもうお前等2人とは変わらない」
（無理しないで、ここは蒼（あお）に代わって）
「うるせぇ、紅（あか）は黙ってろ」
「何を一人で言い合っているの？」
眼と髪の色が蒼に変わる。

「なぁに別に何もないぞ」
蒼い晴輝は銀髪の女性に近づき体をジロジロと見る。
「何？」
「妾は晴輝、名前は？」
「十六夜咲夜（いざよいさくや）」
蒼い晴輝はフッと小馬鹿にした笑いをしてこう呟いた。
「偽乳」
咲夜からピキィと何かが割れた音とブチッと言う何かが切れた音が聞こえた。
「パッド、飾り物、見栄とも言った方が良いのかのぉ」
咲夜の眼が赤く光り、手には沢山のナイフを出す。
「―――――す」
「何じゃ、聞こえんぞ」
蒼い晴輝は咲夜の口元に耳を近づける。
「殺す！」
蒼い晴輝はニタァと邪悪と言うレベルをはるかに超した悪意１００％笑みを見せる。
「かかってこい、パッド長！」
何か大きな力が咲夜の中で爆発して部屋の中の花瓶や窓ガラス、カーテン他諸々を吹き飛ばした。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
辛うじて部屋から飛び立て来たのは普段の晴輝だ。
「蒼、テメェそれが言いたかっただけじゃないだろうな！」
（バレたか）
後ろから無数のナイフと怒りと狂気に身を任せた咲夜が襲いかかってくる。
（これを使えば良い）
晴輝の眼の前に光る細長い棒が現れた。
棒を握ると先端からは紅い三角形の刃が現れる。
「槍？」
槍を握ると手が勝手に後ろを向き棒を回転させる。
回転した槍はナイフの大半を弾き飛ばす。
「おお、すげぇ」
（ついでにこれもおまけじゃ）
ポケットから白い球が落ちる。
（煙幕じゃっ！）
目くらましの道具だが正気と冷静さが欠けている相手には抜群の武器だ。
白い煙が辺りを包み込む。
「ドコダぁぁぁぁぁぁあアァァァァァァ！」
白い煙の中で紅い眼が動くのが見える。
「怒りと狂気とパッドから何かしらのパワーを借りてここまで暴走しておるのじゃろうな」
「我はパッドは関係ないと思う」
「俺もそう思う」
晴輝は窓から飛び出て今は2人に手を貸してもらっている。
彼が蒼と紅と呼んでいた謎の声の持ち主。
蒼髪と蒼眼の晴輝と赤髪と赤眼の晴輝だ。
「まさかお前等2人とも女だったとはな」
「そんな事よりお主も覚悟を決めんといかんぞ」

「私たちが目覚めたと言う事は近々奴も出るのだから」

23 ― 紅魔館のパッ……メイド長（後書き）

題名の途中で何処からかナイフが……

感想よろしくお願いします。

２４ー紅魔館の図書館

「ここが図書館……」
魔理沙とは図書館内で合流する事になっている為一足早く図書館に入っていた。
（妾に燃えるゴミの山にしか見えんのだが）
（我にもそう思う）
紅と蒼は好戦的であるため勉学には全く興味が無い。
今では2人ともこうして話しかけてくる。
「まぁ、それまで隠れますか」
そう言って本棚に登り天井を見る。
「なぁ、お前等で倒せるのかアイツは？」
（（むりだな））
「そんなきっぱり言うなって」
まぁ無理もない。
奴はそれほど強いのだ。
「なぁマジでヤバかったらその時は……」
「お兄ちゃん、何やってるの？」
いきなり誰かに話しかけられたので辺りを見渡す。
「ここだよここ」
後ろにいた。
全く何も感じ取れなかった。
金髪に紅い眼の幼女だ、背中には翼の様な物があった。
金髪が多いなぁと晴輝は思った。
「えっと、自分の将来に悩んでた」
「ふーん」
金髪の幼女は晴輝の隣に座って刀を見る。
「ねぇねぇお兄ちゃんは誰？」
「俺は魔理沙の助手してるんだ。名前は晴輝」

「私はフランドール・スカーレット」
スカーレットと言う名前には聞き覚えがあった。
この紅魔館の主であるレミリア・スカーレット。
と言う事は彼女は主の妹と言うところだろう。
「ねぇ、フランちゃんは俺に何か用？」
「えっとね、実は……」
フランは変な形状の武器を持った。
「ネェ、遊ンデ」
全身に鳥肌が立つ。
無邪気に笑っていたフランから殺気が溢れだす。
（逃げるぞ！）
本棚から隣の本棚へと飛ぶ。
「神槍」
下には槍投げの構えをした少女が見えた。
「『スピア・ザ・グングニル』！」
眼と髪を真っ赤に染めた晴輝が槍を出現させて構える。
「龍槍」
（頼むぞ、紅）
「……『怒りを表す槍』」
今考え付いたのか頭を悩ませたせいか技名が遅れた。
紅い炎を纏った槍を投げると次は眼を蒼く染めて刀を握る。
「龍刀『蒼炎（そうえん）』！」
刀を抜き斬撃波を飛ばす。
飛んできた槍は二つの攻撃により軌道を逸らしそのまま天井を貫いた。
そのまま本棚に背中から着地する。
「う、動かない方がいいですよ」
立ちあがり元の姿へと戻った晴輝に分厚い本を持った女性が背後から近づく。
「がっ！」

首に強い衝撃が走り気を失ってしまう。

２４ー紅魔館の図書館（後書き）

技名が中二病センス？……わざとですよ。
感想よろしくお願いします。
それと活動報告に大切な事が書いてますので読んでください。

25－紅魔館尋問編

「晴輝、かかってこい！」
（アレ、親父？）
目の前に黒髪に剣道着を着た親父がいた。
竹刀の他に木製の棒を持っていた。
「親父、行くぜぇ！」
向かいには歳は１５歳になってまだ日の浅い晴輝だ。
親父と同じ格好をした晴輝は竹刀を考えもなく振る。
「はっ！」
晴輝の竹刀は宙に浮き、親父の竹刀が視界に入る。
「見切った！」
棒を手に取り竹刀の攻撃を防ぐ。
（バカ、それは！）
「甘いな」
だが親父は空から落ちてきた竹刀を手に取りそのまま晴輝の脇腹に叩き付けた。
「また負けたぁぁ！」
そのまま床に仰向けに倒れて体で大の字を表す。
「これで５１１勝目だな」
３年ほど前からこの戦いは続けられてきた。
「なぁ、親父何でこんな事をするんだ？」
「時がきたら……俺が１０００勝する前にお前が俺に勝てたら言ってやるよ」
「ぜってぇ勝って聞き出してやんよ」
だが９９８戦９９８敗で晴輝と親父の戦いは幕を閉じた。
親父は決着を着ける前に旅だったのだ。
布団に入り顔に白い布を被せた人がいる。
「まだ……まだ決着が着いてねぇぞ」

頬から透明な雫が落ちた。
雫は勢いを強くしていく。
眼から何かが大量にこぼれ落ちる。
「泣いてはいけません、アナタは今日から九代目なのです。それが人前で泣くなど」
「泣いてんじゃねぇ……怒ってんだ」
「何故？」
「約束も守れない親父に怒ってんだよ」
立ち上がり眼を擦る。
「俺は何をすればいい」
「はっ！」
そしてこの二日後に『龍炎』が売られる事が解った。
（そして現在に至る……か）
晴輝は眼を閉じると闇の中に吸い込まれた様な感覚に襲われた。
「……あ？」
次に眼を開けると見知らぬ女性達に囲まれていた。
椅子と共に縛られているため身動きが取れない。
「起きたわね」
薄い紫の髪をした女性は本を閉じて話しかける。
「アナタは何者かしら？」
「魔理沙の助手と言ったら理解してくれるか？」
「それは知ってる、名前よ。な・ま・え」
「人に名前を聞く時は自分からと言う事を知らないのか？」
頬を誰かに叩かれる。
勢いが強すぎる為に椅子ごと地面に伏せた。
「アナタはまだ自分の立場を解っていないのかしら」
槍を投げてきた幼女だ。
コウモリの翼を持ったし幼女が手の平で叩いたのだ。
「レミィ、彼にも一理あるわ。私はパチュリー・ノーレッジ」
「私はレミリア・スカーレット」

椅子を立てると赤髪の女性と金髪の幼女が近付いてくる。
「お怪我は無いですか？」
赤髪の女性は叩かれた頬にハンカチを当てる。
「お兄ちゃん凄いね、お姉さまのグングニル避けたんだよ」
金髪の幼女は晴輝の周りをグルグルと回る。
「こっちは小悪魔、私の手伝いをしてくれるわ。そっちはフラン、レミィの妹よ」
パチュリーはそう言うと立ち上がる。
「本題に戻るわ、アナタの名前は？」
「神田晴輝、人間だ」
「アナタの事は大抵は『文々。新聞』で知ってるわ」
なら聞くなよと内心思いながらもパチュリーの話を聞く。
「アナタ、人間？」
「今は人間、でも徐々に変わってきた」
「それではアナタは人間を止めて何になるのかしら？」
レミリアがパチュリーの座っていた椅子に腰を下ろした。
「そうだな」
天井を見上げて再度彼女達の方に視線を向ける。
「少し前の話をしようではないか」
眼を青く光らせて晴輝は言った。

25 ― 紅魔館尋問編 （後書き）

感想よろしくお願いします。

26 神田家裏二代目当主達

「妾の名前は神田蒼（かんだそう）」
「私は神田紅（かんだこう）」
眼を黒から蒼、紅へと色を変えて話す。
「妾達は五百年ほどに一度は死んでいる身なのじゃ」
「ですが竜神と言うお方に助けられて今は竜神として生きているのです」
眼の色を紅、蒼と交互に入れ替えながら話しを続ける。
「だった？」
不意にレミリアが口を開く。
「当主とは基本は男子、つまり女であった妾達は権利が無かったのじゃ」
「ですから私達は3人は山奥で暮らしていました」
「3人と言う事は他に誰が居るのかしら」
またも2人の話にレミリアが首を突っ込む。
「三女の蒼、次女の紅、そして長女の黒（こく）」
晴輝に戻り話は再開した。
「この長女が厄介でな、人間にとても恨みを持ってる」
「それは何故かしら？」
次はパチュリーが聞いてきた。
「目の前で父親を殺されたそうだ」
辺りに静けさが広がる。
「そして、次の3週間後の夜にそいつが復活する」
全員に衝撃が走る。
「如何して黙ってたんだぜ」
本棚の後ろから魔理沙が飛び出してくる。
「やっぱり今回の件は魔理沙が犯人か」
「な、何の事だぜ？」

「おかしいと思ったよ、魔理沙は俺が強いのかを知らないのにいきなり戦闘に参加させたり相手が超本気で殺そうと襲いかかってきたり」
咲夜の場合は怒りに身を任せていたような気がするが忘れよう。
「そんな事よりその黒が目覚めると如何なるの？」
「……」
晴輝は黙り込んだ。
「黙秘、そう受け取っていいのね」
レミリアはグングニルと呼ぶ槍を晴輝に向ける。
「おい、レミリア何してるんだぜ！」
「毒を撒く蟲が目の前に居るのよ、私は害虫に餌をやるほどお人好しじゃないのよ」
「待ってくれませんか」
眼を紅くした晴輝が抗議した。
今は紅である。
「絶対に私達が止めるので待ってくれませんか？」
「私も協力するぜ」
魔理沙は手を胸に当ててそう言った。
レミリアはグングニルを落とす。
「そうね、咲いた花をそこで潰すのも悪くは無いわね」
残酷だな、オイ。
「私も異論は無いわ」
パチュリーも理解してくれたらしい。
「とりあえず、縄を解いてくれないか？」
だが晴輝の要望は叶えて貰えなかった。

26 ― 神田家裏二代目当主達（後書き）

「シリアス抜けたぜ！」
「良かったですね、で何で久々に私たちは出たんですか？うｐ主さん」
「実は感想欄にハーレムは何人になるんですかと言う質問に答えようと思ったんだ」
「で、実質何人ですか？」
「ぶっちゃけると１７人」
「ちょっとぶっちゃけ過ぎですね」
「詳しくはまた今度って言う事で」
「「感想よろしくお願いします」」

27 ― 魔法使いの助手として

すでに月が真上にあった。
晴輝達は大量の本を持ちながらテントへと戻ってきた。
「晴輝ーーー」
ルーミアがテントから出てきた。
「遅くなったな」
晴輝はルーミアを抱きとめる。
その様子を魔理沙は納得のいかない様な顔をしている。
「本当に仲良いんだな」
「まぁ、ここへ来ての初めての友達だしな」
本を魔理沙の家へと運び入れる。
「それじゃあ、俺は」
晴輝はテントへと戻ろうとする。
「いや、でも今日は冷えるぜ」
確かに最近は肌寒く感じる事がある。
「またルーミアと一緒に寝てやってくれ、アイツは俺と一緒にテントで寝る必要は無いんだから」
さすがに年頃の男女が同じ屋根の下で寝るのは抵抗がある。
ルーミアも偶にだがテントで寝る事がある。
「それじゃあ、階は別々にして……」
「魔理沙、別に気遣う必要は無いぞ。毛布1枚あればぐっすりだ」
晴輝は嘘を吐いた。
実際はフカフカのベットで寝たいと言う欲もある。
「むさい男と同じ家で寝るのは嫌だろ、俺は慣れてるから気にすんなって」
「……」
そう言ってテントに戻る晴輝を魔理沙はただ見つめているだけだった。

（良かったのか？）
テントで毛布に包まり寒さに耐えながら寝ようとする晴輝に蒼が声を掛けた。
「何がだよ」
（無理しよって、今回の件で体も心もボロボロなのにこんなとこで寝ていても体力なんぞ回復せんぞ）
（蒼の言うとおりです）
「紅まで」
（それに本当は正妻と寝たかったのじゃろ？色々と楽しみたかったんじゃろ？）
「俺は魔理沙の助手だ、魔理沙だって俺を男としてじゃなくて助手として見てる、それにアイツを傷つけたくなんかない」
（殊勝な心がけじゃのう）
（だからあの時に日を間違えて言ったんですか？）
「……意味が解らねぇ」
（黒が目覚めるのは３週間後ではなく２０日後です）
「同じだろ、別に」
（何がしたいのか妾には理解できん）
「……この綺麗な幻想郷や人々を苦しめたくないんだ」
晴輝は握り拳を作り腕を上へあげる。
「刺し違えても俺はここを守りたい」
覚悟は出来ている。
だがそれで良いのかと内心では不安であった。
「魔女の弟子って言う滅多にない経験だけで俺は十分だ」
眼を閉じると一気に睡魔に襲われた。

27 ー魔法使いの助手として（後書き）

前回の続き
「ハーレムは巨乳枠から
門番
勇儀
お空
うどんげ
早苗
にしようと思っている」
「アレ、でも早苗さんって美乳枠じゃありませんでしたっけ？」
「そこは作者の妄想と言う事で」
「「感想よろしくお願いします」」

28 ― 魔女との日常

（あ……れ？）

晴輝は不思議に思った。

普段なら寒くて布団に包まりたくなるのに何故か温かい。

「……」

眼を開けると金髪の少女が腰にガッチリとしがみ付いていた。

「またかルーミア」

「っく、何が好きで俺なんかと……」

晴輝は金髪の少女の頭を優しく撫でる。

「ありがとな、おかげで今日は気持ちよく目覚められた」

髪を撫でていると何故か頭から煙が出ている事に気が付く。

「アレ……どうしたルー…ミ……ア？」

晴輝の隣を見るともう一人金髪の少女が寝ている。

赤いリボンがポイントの可愛らしい少女。

ルーミアである。

「って事はこっちは……」

良く見ればルーミアより髪が長く体格も少し大きい。

キノコ柄のパジャマを着ているので思い当たる節は一つしかない。

「魔理沙……さん？」

さん付けで呼んでしまった。

「あは、あはははは」

魔理沙は赤くした顔を上げると眼にうるうるとさせて涙を溜めて、

「とうっ！」

魔理沙は一目散に逃げていった。

「えっと、その何で口を聞いてくれねぇの？」

「……」

朝食を取りながら魔理沙に話しかける。

今朝のアレで魔理沙は口を固く閉ざしたままだ。
「俺、なんか悪いことしたかな？」
「……」
え、俺が悪いの？と思いつつも味噌汁を飲む。

「とりあえず、にとりさんの所に行ってくる」
「待て、私も行くぜ」
久々に会話が成立した。
「いや、でも時間かかるぞ、将棋とかバイクのメンテとかするから」
「行くぜ」
そう押し切られてしまった。
バイクに乗りルーミアがその後ろに乗る。
「……ルーミア、偶には変わってくれないか？」
「ダメ、ここは特等席」
「って言うか魔理沙は飛んで……何でもないです」
魔理沙に睨まれて口ごもってしまう。
ルーミアを膝に乗せて魔理沙か晴輝の後ろに乗る事になった。
「三人乗りは危険なんだけどな……」
バイクは妖怪の山へ向かって走りだした。

「にとりさーん」
バイクを押しながらにとりの家の前まで来た。
にとりは相変わらず機械を弄っている。
「晴輝、それと魔理沙、ルーミア」
晴輝の顔を見たときのにとりは笑顔だったが他の2人を見た時にその笑顔が薄くなって行った。
「ごめん、今日もバイクとか弄りたいんだけど」
「良いよ、工具はここに有るから」
工具箱を受け取りバイクを弄る。
「魔理沙達は何で来たのかな？暇でしょ帰っても良いよ」

「にとりこそ言う様になったな、子供が色気づいても晴輝には分からないぜ」
2人の間で火花がぶつかり合っている。
「そーなのかー」
ルーミアは影に入って晴輝を観察していた。

「2人とも派手に戦ってんなぁ」
火花をチラつかせていた2人は弾幕ごっこ（めっさ本気）をしている。
「と言うか何で戦ってんだ？」
気づけ主人公。
「あや？晴輝さんではありませんか」
後ろを振り向くと文と椛が立っていた。
「オッス」
「晴輝さん久しぶりです」
「椛、久しぶり」
「「ッ！」」
ここにも敵がと魔理沙とにとりは振り向く。
「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！
恋心『ダブルスパーク』！」
「水符『ウォーターカーペット』！」
2人が息を合わせスペルカードを使う。
「えっ！？」
「あやや、残念ですが」
文は手持ちのカメラのシャッターを切る。
「にとり製のカメラの事を忘れたんですか？」
攻撃はまるで無かったかのように消えてしまう。
「ちっ、我ながら自分の機械、正常に機能してますね」
「いきなり攻撃を仕掛けるな」
魔理沙とにとりは降りてきた。

「あやや、魔法使いとその助手が揃いましたか。取材させて貰っても良いでしょうか」
「ダメだぜ」
「あの晴輝さん良ければ将棋の相手になってくれませんか？」
「ちょっと待ってくれれば出来るぞ」
「今回も賭け付きでお願いします」
「如何いう賭けか興味がありますね」
「私もだぜ」
「恐縮ながら私も」
魔理沙、にとり、文の3人が問い詰めてきた。
「ふ、普通の事だから心配すんな」
「椛は何お願いするんですか？」
「ちょっと恥ずかしい……です」
（頭を撫でて貰う何て言えない）
その言葉に何やら顔を赤くした魔理沙が晴輝の肩をガッチリと掴んだ。
「な、何をお願いするんだ！」
俺に聞くな。
「どうせ椛の事ですから頭を撫でてとかでしょう」
「……！」
椛は顔を真っ赤にした。
「図星か」
にとりはやれやれと首を振る。
「どっかの白黒は卑猥な妄想をしていたようですが」
「おい、天狗。表出ろ」
「もう表ですが」
魔理沙と文は互いの武器を持って上昇する。
そしてまた弾幕戦が始まった。
ルーミアはそんな騒ぎの中ぐっすりと眠っていた。

28 ー魔女との日常（後書き）

前々回と前回の続き
「貧乳枠は　文
　椛
　妖夢
　霊夢
　魔理沙
　もこたん
です」
「あれ、でも文ってあったような……」
「我輩はD以上を巨乳と認知しているのだよ」
「ファイヤー」
「ぎゃあああ！体が燃えて、お札とか陰陽玉が飛んできて最後にマスタースパークがぁぁぁぁぁ！」
「感想よろしくお願いします」

29 ― 九代目の少女

晴輝達は妖怪の山を下っていた。
何故かにとり、文、椛まで着いて来た。
「何で皆着いて来たんだぜ？」
「あやや、私は新聞のネタを探しに来ただけですよ」
「私は文様と同行しているだけです」
「私はバイクがちゃんと使えているかを見ているだけ」
皆、筋は通っているが……
「バイクで五人は無理だろう」
バイクにはサイドカーを取りつけたがそれでも最大三人だ。
サイドカーにはにとりと椛が晴輝の後ろにルーミアがそして魔理沙は膝の上に乗っている。
文は翼を広げて隣を飛んでいる。
「これが両手に花束ですね」
「文も乗りたいのか？」
晴輝がそう尋ねると文は二回頷く。
「じゃあ誰が降りるか……」
「文様、代わります」
そう言うと椛はサイドカーで立ち上がり宙へ浮く。
「そうですか、それでは」
文は後ろのルーミアをサイドカーへと移動させて後ろに乗る。
ルーミアは両頬を膨らまして機嫌を悪くした。
「中々の乗り心地ですね」
「後ろで立つな、バランスが取れない」
文は座ると晴輝の腰に手を回して体を固定する。
「中々の居心地ですね」
しっかりと抱きついてくるので背中に胸が当たる。
「文、当たっているんだが」

他の四人に聞こえない様に小声でそう言うと
「気にしないでください、当てているだけですから」
耳元でそう呟かれて晴輝は顔を少し赤くする。
「晴輝、顔が赤いぞー？」
ルーミアがこっちを見て頬を膨らませている。
まだ機嫌を直していなかった。
「そ、そんな事より皆は捕まってろよ！」
バイクの加速装置を使いバイクを走らせる。

人間の里まで来た。
「なぁ、こんな物何に使うんだぜ？」
「あやや、小豆に小麦、砂糖もに様々な調理器具」
「ちょっと、慧音さんと約束したんだよ、今度和菓子を作ってほしいって」
「そーなのかー」
その材料集めである。
手軽で誰でも好きな饅頭でも作ろうと思っている。
「その時は皆にも奢るよ」
「それは楽しみですね」
「楽しみに待ってます」
六人で町を歩いていると魔理沙が何処かへと歩いて行く。
「魔理沙？」
後を着いて行くと永遠亭の様な和風の家に辿り着いた。
「阿求いるか？」
勝手に家に入り込む魔理沙を追いかけて家に入ると紫色の短髪の少女がいた。
「魔理沙、どうしたんですか？」
魔理沙が阿求と呼ぶ少女は机の前で巻物の様な物を書いている。
「病気なんだから寝てたいた方が良いぜ」
「気にせずに、どうせ短い命ですから。そう言えば後ろの方達は？」

そう言って少女は俺達の方を向く。
「鴉天狗に白狼天狗、人喰い妖怪に河童と……彼は？」
晴輝の方を見て彼女が首を傾げる。
「私の助手の晴輝だぜ」
「碑田阿求、よろしくお願いします」
「よろしく」
彼女は少し顔色が悪い。
「それより寝てた方が良いぜ」
「大丈夫です、それより転生の準備を……」
ゴホッゴホッと咳きこみ彼女の顔が青くなって行くのがわかった。
「今日は忙しいので帰ってくれませんか？」
「ああ、また今度、見舞いに来るぜ」
魔理沙は阿求に手を振り晴輝達は阿求の家を後にしたのだ。

「なぁ、阿求の言ってた短い命って何だ？」
「ああ、彼女はもう長く持たないのですよ」
文が言った言葉に疑問を持った。
「長く持たないって事は……死ぬってことか？」
「まぁ、そうですが大丈夫です」
「椛、大丈夫ってどういう事だ？」
「碑田家は三十年ほどの寿命しかないですが転生を行っています。
それで今の彼女は九代目です」
晴輝は少し納得のいかない顔をしていた。
（あの顔は……）

29 ― 九代目の少女（後書き）

ロリ
阿求
萃香
レミリア
フランドール
ルーミア
にとり

の総勢十七人がハーレム入りします。
皆さんの要望があれば受け付けます。
感想お願いします。

30ースキマ妖怪

バイクの六人乗りをしながらも博霊神社へ来た。
魔理沙が霊夢に用があるらしい。
「階段は相変わらず高いな」
文、魔理沙、にとりは自慢の飛行能力で石段に関係なく神社へ辿り着いた。
「ルーミアはダウンか」
最近気づいた事だがルーミアは日の光が苦手らしく日向では元気が無い。
「椛、先に行ってて良いぞ。俺は慣れてるから」
「いえ、でも」
晴輝はルーミアを背負い少量の荷物と共に石段を上り始める。
子ども一人を背負っていてもこの石段を上るのはキツイ。
「せ、せめて荷物だけでも」
「わ、悪い。頼む」
椛は荷物を持って晴輝を後ろから押す。
「先に行ってれば良いぞ」
「大丈夫です、慣れてますから」
多分、俺のまねだろう。
「そーなのかー」
元気のないルーミアは弱弱しいが手でしっかりと晴輝に掴まっていた。
その三人の姿はまるで子連れの夫婦の様に見える。
「納得いかないぜ」
「魔理沙に同意」
「椛を弄る時の為に写真を一枚」
三人は石段の上で晴輝達を見つめていた。
「マスタースパークを撃ちたいぜ」

八卦炉を構えた魔理沙をにとりと文が止めに入る。

「ああ、やっと着いた」
石段の上まで着くと汗でシャツが肌に付く。
「ルーミア、大丈夫か？」
「……だいじょーぶ」
元気の無い声がする。
「皆、待っててくれたの……か？」
何故か皆ジト目でこっちを睨む。
「どったの？」
「気にしないでください」
文はカメラを弄りながらそう言った。
「別に何もないよ」
「気にしたら負けだぜ」
そう言いつつも博霊神社に入って行った。

「やっぱりアンタが彼を連れて来たんでしょう」
「そうね、そうかもしれないわ」
神社の裏の霊夢の家で誰か二人が言い合っていた。
一人はこの神社の主の博霊霊夢だがもう一人が分からない。
良く見ると変な切れ目から上半身だけが出ている。
「よぉ、紫」
紫と言う女性は何かの切れ目から出てきた。
「魔理沙、にとり、文と椛、それと誰？」
優しく微笑む彼女は霊夢の口を押さえた。
「俺は神田晴輝、魔理沙の助手してる」
「私は八雲紫（やくもゆかり）、妖怪よ」
紫と言う名前に何かが引っかかる。

何処かで聞いた様なと首を傾げる。
「晴輝、あんたもしかしたら帰れるかもしれないわよ」
霊夢は紫の手を無理やり外し、言った。
「帰れるって？」
「元の世界よ」
その言葉で皆動かなくなった。
勿論晴輝も例外ではなかった。

３０ースキマ妖怪（後書き）

感想お願いします。

31－幻想入りの原因

静寂が晴輝達を包み込んだ。
「それどういう事だぜ！」
魔理沙が不意に紫に尋ねた。
「さて何処から話しましょうか」
「いいから教えてくれ、如何いう事なんだ！」
「アレは一月前かしら、貴方があの乗り物で走ってるのを偶々見かけたわ、それで興味があって後を追いかけたら貴方は追い詰められていた。その時に永琳の薬を使って貴方を眠らせここに連れてきたの」
「俺のバイクはアンタが持って来てくれたのか？」
「ええ」
今の話なら辻褄が合う。
「それでどうしたいの？」
「何がだ？」
「元の世界へ戻りたいの？」
またも辺りが静かになる。
誰か喋ってくれと思うとルーミアが元気のない声でそーなのかーと言うだけだった。
「あっちに戻っても逃亡生活だ、それにこっちの世界で守んなきゃいけないものも出来た」
そう言って魔理沙やルーミア、文、椛、霊夢を見る。
「俺はここに残りたい」
「そう」
そう言うと紫は謎の切れ目を出現させる。
「困ったことがあったら何時でも来なさい。私はマヨヒガと言う所へ行けば会えるわよ」
そう言うと紫は謎の切れ目の中へ入って行った。

「スキマ妖怪ねぇ」
その後、神社で昼食を取った。
スキマ妖怪、スキマと言われる切れ目を出し、切れ目での出入りが可能となる。
「……」
朝の事を思い出していた。
「なぁ、結界てのがこの幻想郷にあるんだろ」
「ええ、そうよ」
「霊夢も使えるのか？」
そうねと面倒な顔をして答える。
「俺にも使えるか？」

31－幻想入りの原因（後書き）

主「めっちゃ久々の」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
魔「今回はナレーターを交代して私、霧雨魔理沙がお送りするぜ」
主「これが始まって丁度一ヶ月ですか。長かった」
魔「まぁ、まだちゃんとお話のレールどころかタグのほのぼのをしてないけどな」
主「……」

魔「今回は阿求、小町、四季だぜ」
主「阿求　静か　奥手
小町　さぼり好き
四季　案外晴輝に気がある？」
魔「これ以上ヒロインを増やしたらマスパ撃つぜ」
主「我が野望の為なら構わんさ……ってマジで撃つなぁぁぁぁ！」

32 ― 最後の代（前書き）

またもシリアス
そして阿求√

32 ― 最後の代

「おや？貴方は」
「おっす」
碑田家へと訪れた。
「病気とやらは大丈夫なのか？」
阿求は机に向かい何かを書いていた。
「全然大丈夫じゃありませんよ、如何したんですか？」
「ちょっと慧音さんに用があって会ったら頼まれたんだ」
「少し阿求を見て来てくれないかってな」
俺に頼みごとをした本人が来た。
「慧音さん」
阿求は何か申し訳ない様な顔をしていた。
「帰ってくれませんかまだ転生の準備で忙しいですから」
「五日間」
不意に晴輝の発した単語に阿求は振り向いた。
「それがアンタに残されている時間だろ」
「……」
「如何いう事だ？」
慧音は晴輝の言葉の意味を理解しなかった。
少し考えれば分かるはずだ。彼女の今の病状を知っている彼女なら。
「転生を行うためにはかなりの時間と猶予を必要にする……でしたよね慧音さん」
「ああ、それが如何した」
「たぶん、阿求、アンタはまだ転生の準備が出来てないんだろ」
「……」
阿求はただ下を向き口を固く閉ざしていた。
そんな彼女に晴輝は追い打ちをかける。

「多分、間に合わないからその巻物に色々と書いてんだろ」
「違う」
「五日じゃあ何処まで書けるかわからない。だから夜通しで」
「違う」
「アンタは五日間と言う残された時間を使って……」
「「違う！」」
大声を上げた彼女と別にもう一つの声が重なる。
慧音が前に立つ。
彼女がもう一つの声の持ち主である。
「残念だが晴輝、君の推理は間違っている」
「永琳さんの薬でも寿命は伸ばせない。出来るとしたら妹紅と輝夜さんの不老不死」
「違う、彼女の転生の準備はもう終わる！」
「だが何かしらの理由があってその選択肢を捨て死を選んだ」
「ちがぁぁぁぁぁぁぁぁう！」
大声を轟かせ慧音は突進してくる。
そのまま晴輝は押し倒される。
「何故そう思う！証拠はあるのか！」
彼女の髪は変色し頭から角を生やし尻尾まで生やしていた。
これが慧音のもう一つの姿である。
「証拠はある、慧音さんの慌てぶりで確信へと変わったけどな」
慧音は力を無くしてそのまま倒れ込む。
「もう話しましょう、私達より彼の方が上です」
阿求が両手を上げる。多分、降参の合図だろう。
「一月前、私は病気になりました、ですが体には異常は無く平然と暮らしていました。ですが東華ほどたったある日、四季映姫（しきえいき）・ユマザナドゥ様が私に言いました」
阿求は悲しげな顔で空を見上げる。
「貴方には猶予がありません、早く転生の準備を、と」
「その人は誰なんだ？」

「そうですね、貴方の世界で言う閻魔大王ですかね」
閻魔、まぁ細かな詮索は後にしよう。
「んで転生の準備は間に合わなかったわけだ」
阿求は無理に笑顔を作り頷く。
「だけどここでは死んでも会えるんだろ、なら別に……」
「ダメ何です」
阿求は笑顔で答えた。
その笑顔からは彼女の必死さと苦しみと悲しみが混じっているのではないかと思った
。
「死んだら閻魔様の所で手伝いに行く事になっています、これまで転生に何度も協力させていただきましたから。それに」
「それに？」
「阿求は……人間として生きたいです」
彼女のこの言葉を晴輝はこう捉えた。
「生きたいんだな」
阿求は頷く。
そんな彼女にハンカチを渡す。
「まったくこれじゃあ俺が泣かしたみたいじゃねぇか」
彼女の瞳から零れ出しているモノを見ると罪悪感に包まれる。
「なぁ、生きたいんなら手を貸すぜ」
「人間の貴方に何が出来るんですか？」
「外の人間をなめんな、不可能を可能とする、それが俺らの世界の言葉だ！」

32 ― 最後の代（後書き）

主「主と」
霊夢「キャラクターがお送りする」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
霊夢「と言ってももう大抵言ったし、これだと次回のネタバレよ」
主「いるじゃないですか、蒼と紅が」
霊夢「読者はたぶん誰それって顔してるわよ、近々消しましょう」
主「……はい」

主「蒼　人柄よし
紅　挑発家」
霊夢「感想、待ってるわね」

33 ―カウントダウン

石段を全力で上り博霊神社へ行く。
「霊夢、これでどうだ」
神社の前で掃除をしている霊夢に小包を手渡す。
「まぁ、美味しければね」
小包を開けると白くて丸い物が三つ入っている。
「形は……合格、さて味は」
小包の中身を手に取り口に運ぶ。
「んんーー、このお饅頭美味しいぃぃ！」
手で頬を触り饅頭を吟味する。
「本当にこれアナタが作ったの？」
「朝一番の作りたて」
饅頭を包みなおすと懐からお札を二、三枚出す。
「いい、これを張るだけで結界が出来るけど脆いから気をつけてね」
「ああ、使わせてもらうぜ」
振り返り石段を素早く降りて行く。
「結界用の札なんて何に使うのかしら？」
霊夢は首を傾げながらも箒を鳥居に置く。
「お茶と一緒に食べよ♪」
そう言って彼女は今日一日の巫女の仕事を放り投げた。

「とりあえずは一つ、そんじゃあ次！」
迷いの竹林へとバイクを走らせる。
「晴輝」
空から誰かが降りてくる。
「妹紅」
炎の翼を消してサイドカーに乗る。

「話は慧音から聞いた、私も一つ噛ませてもらうぞ」
「ああ、時間が無いから急ぐぞ！」
加速装置を起動させてバイクを走らせる。

「永琳さん！」
「てゐから聞いたわ、正しい容量を守って使ってね」
永琳は薬を投げ渡す。
「頑張ってね」
「はい！」
バイクを回転させて再び走りだす。
「ししょー、晴輝さんに何渡したんですか？」
「回復錠Ｓよ」
「はい？」
「それよりうどんげ、この薬飲んでみて」
「いやいやいや、何で料理の味見みたいな感覚で得体のしれない薬品を飲まなきゃいけないんですか！と言うかその紫色の液体にはトラウマしかありません！」
うどんげは１８０℃体を回転させて走りだす。
「逃げても無駄よ」
その後、うどんげの悲鳴が１日中聞こえたそうだ。

「これで準備は出来た」
お札や薬、そして蒼と紅の武器を一カ所に集める。
（如何したのじゃ、晴輝）
（晴輝さん）
久々に紅と蒼が出てくる。
「力を貸してくれないか」
（何のじゃ？）

「神田家の能力ってのを」

33 ―カウントダウン（後書き）

霊夢「回復錠Sについてかたりたいのだけど」
主「で、出来心です」
霊夢「歯を食いしばりなさい！」

霊夢「感想よろしくお願いします」

３４ 嵐の前日

カウントダウンの数字が０になった。
阿求のいえへ来た。
「阿求、大丈夫だ安心しろ」
阿求は酷く痩せていた。
欠けた月が真上へ出ようとしている。
ついに今日、彼女が死ぬ日だ。
「死なさない、あのバカの二の舞には」
「そう言えば何で私の寿命が五日だとわかったんですか？」
阿求は問いかけてきた。
もうすでに虫の息で眼を開けているのが精いっぱいなのに。
「ちょっとな、前に見本を見たんだ、人が死ぬ五日前の顔を」
敷布団だけを敷いて部屋の真ん中にに札を貼る。
「そうだ、これ」
小包を阿求に渡す。
「これ、俺が作った団子、これが終わったら一緒に食べようぜ」
小包には団子と袋に入った氷があった。
「まったく、貴方はこんな時でも」
阿求は微笑む。
「それじゃあ、始めますか！」
何時になく真剣な顔で晴輝は両手を勢いよく合わせる。

「まったく、死に抗うとは……」
「如何します？」
赤い服の女性と緑髪の女性が鏡を見ていた。
「こちらも閻魔としての本職を果たさなければいけません」
「それではあたいが先に行ってきます」

「ええ」
先に赤髪の少女が大きい鎌を持って先立つ。
「彼は……」
緑髪の少女は鏡に映る晴輝を見て呟く。
「黒ですね」

３４ー嵐の前日（後書き）

にとり「かっぱ巻きはある？」
主「始まってますよ、にとりさん」
にとり「どうも河城にとりです」
主「どうも主です」
にとり「何かフラグ建ってるね」
主「そうですね」
にとり「かっぱ巻きはある？」
主「またそこへ戻るんですか！」
「「感想よろしくお願いします」」

35－TIME　IS　MONEY

「ゴハッ！」
晴輝は口から血を吐きだす。
「もう止めてください！」
阿求は敷布団の上に寝ていた。
阿求の体の動きを封じているので彼女は声だけで晴輝を止めてようとしている。
「大……丈夫」
手を勢い良く合わせる。
「ゴホッ！」
口からまたも血が出る。それだけではなく勢い良く叩いた手からも幾つもの切り傷みたいな物がある。
「まだまだぁぁぁぁ！」
晴輝の能力は『魂を身に宿す程度の能力』と『肉体を創り直す程度の能力』。
だがこれは本来、人が行う業じゃない。
蒼、紅のそしてもう一人が使える竜の力。
肉体が耐えきれずにあちこちが壊れても仕方が無い。
「はぁ、はぁ」
限界なんてもうすでに超えていた。
ハッキリ言ってもう止めたいぐらいだ。
「まだまたぁぁぁ！」
手を叩くのを止めない。
何故、見知ったばかりの人を助けるのか。理由は無い。ただ助けたい。
「それだけだぁぁぁ！」
ただひたすら両手を合わせる。
「おや、頑張ってんね」

そこに赤い髪の女性がやってきた。
「小町……さん」
「どちら……様で？」
「小野塚小町、死神やってんだけどアンタは？」
持っている大鎌で晴輝を指す。
「神田晴輝、死神って事はヤマザナドゥさんとやらの使いかな？」
「察しが良いねぇ、とりあえず……動かないでおくれよ」
鎌を構える小町だがこっちは手が空いてない。
「残念だけど小町さんの相手は俺じゃない」
その時、戸を突き破り誰かが入ってきた。
「普通の魔法使いだぜ」
魔理沙だ。
魔理沙は八卦炉を構えて息を大きく吸う。
「恋符『マスタースパーク』！」
晴輝は伏せると同時に八卦炉からレーザーが放たれた。
「魔理沙、悪いけどよろしく」
「助手の願いを叶えるのも私の仕事だからな」
小町は外へと吹き飛ばされたが間一髪、大鎌で攻撃を防いだ。
「それじゃあ、あたいも本気で行こうか」
二人は宙に上がりスペルカードを取り出す。

「大丈夫か」
「あ、は、はい」
阿求と晴輝の顔の距離はそう離れてはなく、お互いの息が互いの頬に当たっていた。
「顔が赤いけどもしかして（体力が）ヤバいのか！」
「は、はい（顔が近くて）！」
晴輝は辛うじて噛み合った会話から彼女のいろんな意味のＳＯＳ信号を違う意味で危険だと思った。

「あと、一回！」
十回目の合掌の時にそれは起こった。
彼女の体から白い球体が出てくる。
「やった！」
血反吐を吐き、口を腕で拭う晴輝は目の前の状況に喜ぶ。
球体に優しく触れて自分の胸にそっと当てる。
「……」
心を落ち着かせて球体を自分の体に押し込んだ。
球体は晴輝の体へ入ると晴輝の右目が紫色に変化する。
（あの、これは？）
心から声が響く。
「阿求、聞こえるか」
声の持ち主は阿求だが阿求の口は微動だしない。
「阿求、お前は今、俺の体内に居る」
（はい）
傍からは独り言を言ってる様に見えるが阿求と交信をしている。
「それじゃあ、次だ」

35－TIME　IS　MONEY（後書き）

文「あやや、阿求さんはどうなるのですかねぇ？」
主「まだわかりません」
文「それでは主さんの若き日の黒歴史の話でも……」
主「やめてぇぇぇぇ！」
「「感想お願いします」」

36 ― 生か死か

晴輝は眼を瞑り座禅をしていた。
阿求の体は光りを纏っている。
「……」
晴輝は眼を閉じて集中していた。
「おや、もう終盤回かい？」
「……！」
魔理沙と戦っているはずの小町がこっちへ帰ってきた。
「魔理沙は？」
「ちょっと、寝て貰ってるよ」
小町は魔理沙を片手で持ちあげている。
「お前さん、血塗れじゃないか」
「気にしないでくれ、もうすぐ終わる」
魔理沙を置いて小町もその場に座る。
「何でその娘に固執するんだ？苦しいなら止めればいい」
やっぱり死神には敵わない。
「やっぱり、分かる？」
これまで一回で血塗れになる合掌を十回したのだ。
「休まないとその娘よりアンタが死ぬよ」
「……」
「別に死んだって会えないわけじゃない、ただ幽霊になるだけだよ」
「阿求は生きたいって言ったんだ、だから生かす。生きてる死んでるは問題じゃない、コイツが生きたいって言ったから生かすだけだ」
「……そうかい」
小町は鎌を取り立ち上がる。
「今すぐ止めな、そうしたら助けてやる」
晴輝も立ち上がり設置していた槍と刀を取る。
「残念だけど、諦めなさい、貴方には降伏しかない」

小町の後ろから緑髪の少女が出てくる。
（四季映姫様）
心から阿求の声が耳に響く。
「アンタが閻魔様か？」
「四季映姫・ヤマザナドゥです」
「アンタが閻魔さんねぇ～、イメージと違う」
「おや？貴方のイメージでは私は如何なっていたんでしょう？」
四季映姫は一歩、また一歩と近づいて来る。
「男でちょっと怖そうかと思ったけどこんな可愛いのが閻魔様とは思わなかった、勿論死神もね」
四季映姫は足を止める。
「か、可愛いですか、貴方も中々面白い冗談を言いますね」
「いや本音だけど……」
「あはは、四季様、顔真っ赤ですよ」
「う、五月蠅い……って貴方も顔が赤いですよ」
「あ、あはは、いやこれは夕日の所為です」
「夕日はとっく前に沈んでるが」
「「……」」
二人は少し黙り込む。
「……マスター」
「魔理沙、起きてるんだったら会話に参加して来いよ、そして八卦炉をこっちに向けるな」
魔理沙は片手に持った八卦炉を晴輝に向けていた。
「だって起きたら二人が口説かれていたんだぜ、流石に起き辛いと言うか」
魔理沙は立ち上がり阿求本体の頬を突いている。
「口説いてない、率直な感想たぞ」
「そ、そんな事より私達の目的は貴方達の妨害です！人は時が来ると死ぬのが道理です、道理に逆らうなどもっての他！」
「そうだ、四季様の言うとおりだ」

「悪いけど、俺には道理なんて知ったこっちゃない」
小町と四季映姫の間を通って外へ出る。
「俺は神様の決めた世界の掟なんて関係ない」
月が消え視線の先からオレンジの光が出る。
「ただ、困ってる奴の為に手を差し出す。それだけだ」
上る太陽を背景に晴輝は三人の方を向く。
「……」
「……」
「……はっ！」
顔を赤く染めた三人の中で四季映姫だけが我に戻る。
「そ、そうですか、交渉決裂と言う訳ですね、小町！」
「……は、ハイ！」
小町も我に返る。
「貴方の幻想に私達はつき合っていられません。さぁ、さっさと碑田阿求の魂を……」
「悪いけど俺の勝ちだ」
晴輝が阿求の体の方へ指を指す。
「……？」
三人が振り返るとそこには少女が立っている。
「碑田……阿求？」
「悪いな、今までの会話は時間稼ぎだ」
「……っ！貴方は！」
小町と四季映姫はこちらを向き身構える。
「大丈夫だ、二人とも可愛いって言ったのは本当だ」
二人は顔をまたも赤くする。
「ま、また貴方は」
「あと、それと魔理沙」
「な、何だぜ」
「悪いけど、永琳さん呼んでくれないか」
晴輝の来ているＹシャツはすでに血で滲んで気付かないが晴輝に

は多数の切り傷がある。
「永琳さんから貰った薬は一時的に傷を塞ぐもの何だ、だから……
……傷口が開いて……今は……すげぇ出血してんだ」
晴輝の指先から赤色の雫が落ちる。
雫が落ちる間隔は次第に早くなり、晴輝の顔が青ざめてくる。
「あー何か眠たいな」
晴輝は足をふらつかせ、今にも倒れそうだった。
「ちょっと寝たいから……少し休ませ……」
そのまま倒れようとする体を誰かが支えてくれる。
「慧……音さん?ごめん、眼が霞んでわからねぇ」
「晴輝、君は良くやった、良く……」
何かが頬に当たる。温かい雫が頬を伝う。
「まったく、君もバカだな、妹紅みたいだ」
「あはは、慧音さんだなこの声は」
「今回の礼がしたい、寝ても良いがちゃんと起きてくれよ」
そのまま晴輝は満足そうな顔で眼を閉じた。
「さぁ、阿求、魔理沙、晴輝を運ぶぞ」
「はい!」
「まかせろ!」
阿求と魔理沙は慧音に着いて行った。
「如何します?四季様」
「とりあえず、私達も着いて行きましょう」
彼女達の戦いの結末を見た太陽は顔を出した。
朝日が晴輝の顔を照らしす。
「まったく、死にそうなのに満足な顔をして」

36ー生か死か（後書き）

魔理沙「……」
主「……」
魔理沙「何で正座させてるかわかってんだろうな」
主「いえ、全く……出来れば八卦炉をしまってくれ……いえしまってください」
魔理沙「何でヒロインを増やしたんだぜ？ぜ？」
主「あの……すいません」
魔理沙「マスタースパーク！」

～主終了のお知らせ～

魔理沙「感想よろしく頼むぜ」

37 ― 治療ミス

見知らぬ天井でまたも眼が覚めた。
「ここは、永遠亭か？」
体を起こすと阿求、ルーミア、魔理沙が俺の周りに集まっていた。
「起きたんですか？」
ドアを開けて入ってきたのはうどんげだった。
「うどんげさん、俺って何日寝てたんだ？」
「丸三日、その間もこの三人の他に慧音さんや妹紅、小町さんに四季映姫様も来てたわ」
ドアを閉めて入ってきたうどんげは包帯と塗り薬を持ってきた。
「腕を出してください」
そう言われ腕を出すと両腕とも包帯に巻かれていた。
包帯を取ると傷だらけの腕が姿を現す。
「この傷は副作用です、薬は数時間は空けて飲むって書いてましたけど」
「あは、あははは」
三十分に一個のペースで飲んでました何て言えない。
「まぁ、それより。これを」
そう言って手紙を手渡す。
「これは？」
「四季映姫様が貴方に」
そう言って手紙を開く。
「読めねぇ」
手紙には字が書いていたがあまりにも達筆過ぎて読めない。
「えっとですね『拝啓、神田晴輝様へ
今回の件に関しては二週間後の宴会の際にしっかりと説教させていただきます』って書いてます」
「宴会？」

「博霊神社で行われる宴会です、丁度満月の日にやります」
満月の夜、その言葉に何かが刺さる。
「そう、ですか」
「元気ないですね、どうしました？」
「あ、その四季映姫さんの説教って長いのかなぁって思って」
今の事を気取られない様に話をずらす。
「あと、今さらだけど敬語とか別に良いですよ、気にしないで」
「それじゃあ、私もうどんげって読んでください」
そう言って会話を弾ませていると阿求が眼を覚ます。
「は、晴輝さん！」
阿求が晴輝に跳びつく。
「大丈夫ですか！？動けますか！？」
「大丈夫だから落ち着いて」
阿求の頭を撫でると阿求は我に返る。
「ありがどうございます、助けてくれて」
阿求は頭を下げる。
「後十年の人生、ゆっくりと暮らしていきます」
阿求は笑いながらそう言った。
そんな悲しい事を言わせる為に寿命を延ばしたわけではない。
「阿求、実は言いたい事があるんだ」
「何ですか？」
「実はあの治療の時にミスしたんだ」
「えっ？」
「お前の家の人間の寿命が短いって知って聞いてな」
頭を掻きながら阿求に話し続ける。
「お前の寿命を延ばしたんだ」
「……っ！」
「普通の人間みたいに暮らせるように寿命を六十年ほど」
「それって」
「でも、余計なお節介だったか？」

阿求は下を向き体を震わせる。
うどんげは魔理沙とルーミアを引きずって外へ出て行った。
「い、今からでも元に戻せる……」
阿求は晴輝に抱き付いた。
「私、転生を行うと何時も記憶とか忘れちゃうんです、友達の名前も顔も好きな人との思い出も、でも、これで、やっと……救われました。好きな人と長くずっと一緒に居られるので」
体を震わせて阿求は晴輝を強く抱きしめる。
「好きな人と上手く行くと良いな」
「……はい」
阿求は必死に泣くのを堪えている。たぶん情けない所を見せたくないのだろう。
「俺、今耳悪いんだ、眼もハッキリとは見えない、だから」
阿求を強く抱きしめる。
「泣いて良いんだ」
それを聞いた阿求は声を上げて泣きだした。
阿求をしっかりと強く抱きしめる。

晴輝と阿求の部屋の前で数人がドアに凭れていた。
「まったく無理させやがって」
「魔理沙、眼が赤いぞ」
「そう言うもこたんだって赤いぞ」
「慧音さんも赤いですよ」
「うどんげも赤いぞー」
「わ、私のは何故か狂気の赤眼がうっかり発動しちゃって」
その泣き声は迷いの竹林に響いたそうだ。

37 ― 治療ミス（後書き）

文「とりあえずは阿求編は終了しましたが次は何ですか？」
主「次は幻想郷のキャラクターや晴輝の中の黒のお話ですよ」
文「と言う事はお山のガンキャノンとか出るんですか？」
主「ガンキャノンどころか人形使い、鬼もでるぜ」
文「あや？何故かいきなり暗く、ああ、御柱が太陽の光を遮って……」

～主と文終了のお知らせ～

感想よろしくお願いします。

38 ― 春の終わりに凍る蛙

以前と比べすっかりと暑くなった。
あの阿求の一件で魔理沙に丸一日叱られた。
あの時に使用した永琳印の薬の副作用として出来た傷は永琳さんに治してもらった。
今日はとりあえず非番と言う事でバイク弄りの為に妖怪の山へ登っていたのだが……
「やっぱりアタイったら最強ね」
チルノに捕まったのだ。
「その所為で俺はいい歳して迷子だ」
山道でいきなり弾幕ごっこを開始したチルノの攻撃を避けつつもバイクを走らせたらこの様だ。
「ったく、奇襲は無しにしてくれ。こっちもこっちの用事があるから」
バイクを押しながらも何とか目印になる所を探していた。
「おっ」
何かに反応したチルノは宙に浮き瞬く間に飛んで行ってしまう。
「おい、待てよ」
晴輝もバイクに乗りチルノの後を追う。
チルノを追い越さない様にゆっくりと走らせていると嗅覚が懐かしい香りに反応する。
「水の匂い、川か？」
「やっぱり」
チルノはスピードを上げて飛んで行ってしまう。
「あ、ちょっと待て！」
負けじとバイクの加速装置を起動させてチルノの飛んだ方角を目指しバイクを走らせる

「ったく、何処に行ったんだ?」
方角もチルノも見失う。
太陽に方角を教えて貰おうと思ったが残念な事に今は昼。太陽は真上を向いていた。
「遭難」
等と言う言葉が脳裏を過る。
飲み水も食料も持ち合わせていない今の状況では最悪の二文字である。
「仕方ない」
刀と槍を地面に差す。
「出て来い、蒼、紅」
そう言って蒼と紅の姿が目の前に現れる。
「まぁ、話は分かってるぞ」
「私達に何か探してほしいんでしょ」
「話が早くて助かる」
二人はガラスの様な翼を広げ一気に空高く飛んで行った。
二人は時間の経たない内に帰ってきた。
「ここを直進した所に大きな湖と建物がありました」
「それじゃあ行くか」
バイクを再び走らせ、教えられた方角へ進む。

バイクは大きな湖の前に辿り着いたのだが。
「何だこれ」
すぐ近くに巨大な氷があった。
「チルノの仕業だと思うが……って何か凍ってる!」
氷の中に誰かいる事に気付いた。
「待ってろよ、すぐに助けてやるから」
槍と刀を前に突き出す。

二つの武器からは蒼い炎と紅い炎が噴き出る。
氷は融けていきどんどん小さくなっていく。
「おい、大丈夫か！」
中から人を救出するが体温は下がっていて弱り切っている。
「今すぐに助けてやるから」
近くの建物は湖の上を通った方が早いが残念ながら人間である俺には無理な話だ。
「紅！」
紅を出現させて少女を渡す。
「その子をあの建物まで！」
紅は湖を突っ切りそのまま飛んで行った。
「俺も早く……ん？」
目の前にヘンテコな帽子が落ちていた。
帽子の両端には目玉の様な物が着いている。
目玉と言っても模造品で帽子自体も可愛らしい物だ。
「あの子のか」
帽子を拾い建物に向かって進む。
「大丈夫かな」
帽子を頭に被りバイクを走らせた。

38 ― 春の終わりに凍る蛙（後書き）

主「感想よろしくお願いします、活動報告に大切な知らせがあるので読んでください」

39 ― 怒りに任せた御柱

湖の周りを走り着いたのは神社であった。
「博霊神社、ってわけじゃあ無いな」
神社と言う点は同じだが規模が違う。
博霊神社よりも大きく立派で周りに大きな柱がある。
「ん……？」
神社の方から人が出てくる。
赤い服、背中にはしめ縄の様な物を装備している。
「すいません、こっちの方に俺の知り合いが……」
気軽に話しかけただけだ。挑発なんかしていない。
だが彼女から感じられる感情は禍々しくも分かり易い。
『殺意』と『怒り』である。
「アンタが諏訪子を……」
だが彼女からあふれ出す殺気は異常だ。
紅魔館のフランに後れを取らない。
「お、俺はただ彼女の……」
弁解の言葉は彼女の耳には入っていない。
次の瞬間、晴輝は目を疑った。
何かが晴輝の真横を通り過ぎた。
振り返ると六角形の何かが地面を抉っている。
「売られた喧嘩は買うわ、いくらかしら」
一歩、一歩と彼女がこっちに向かって来る。
「そうね、腕一本なんて生温いわ」
彼女の周りに柱が浮く。
「アンタの命、それで……許す！」
柱は物凄い勢いでこっちに向かって飛んでくる。
「クソッ！」
刀を抜き飛んでくる物体に刃を向ける。

柱を避けて刀を振る。柱はそのまま後方へと飛んで行った。
「まずは一本」
確実に斬ったと思い次の攻撃に意識を集中させる。
「残念ね」
彼女はにやりと笑い、何かを見つめている。
「……っ！？」
背中に強い衝撃が走る。
少し首を曲げて後ろを向くと彼女の武器である柱が背中を押している。
そのまま柱と共に彼女の方へ飛んで行く。
「マジかよ」
斬ったと思った柱には傷跡しかなく一刀両断などしていなかった。
「さぁ、苦痛を味わいなさい」
目の前の彼女は己の身長の倍はある柱を持ちあげて待ち構えていた。
「喰らいな！」
彼女は躊躇なく柱を構えた。まるで野球のバットを持ったように。
「おいおい、こんな速さだったら確実に」
そのまま彼女は柱を振り晴輝を柱諸共打った。
晴輝の意識は強い衝撃に耐えきれず黒く深い闇へと落ちて行った。
そのまま重力に逆らわず地面へ頭から落ちていく。
「……」
だが頭部が地面に触れる事は無かった。
まるで時が止まったかの様に晴輝は空中に浮いていた。
彼女は晴輝に指を指し言った。
「……アンタ、誰だ」
彼女の目の前に居るのは晴輝である。
だが違和感があった。
瞳孔が開き髪も数？ほど伸びている。
眼をカッと開きただ笑いながら彼女を見つめていた。

「……さぁ？僕は誰でしょう？」
「あの鴉が言ってた魔法使いの助手、神田……だったかしらね」
「正解、神田晴輝、それが彼の名前、でも僕は違う。僕は黒、誕生してから５４４年、戦国の世からの戦好き。ただの暴れ者。貴方は？その柱は？」
「私は山の神の八坂神奈子これは私の武器の御柱」
「そう」
さぁ、始めよう本当の戦を。
「……っ！」
耳元で聞こえた雑音に八坂は慌てて耳を塞ぐ。
「何だ、今の声は！」
殺気と闇が混ざり合った声。
ザーザーとジャミングのある声に神奈子は喉元にナイフを突き付けられた様な緊張感が迸る。
「大丈夫かな？」
晴輝は体を縦に半回転させて地面に立つ。
「そんなんじゃ、私と戦、出来ないよ？」
耳からゆっくり手を離し身構える。
「ルールは簡単、先に死んだら負け、生き残ったら勝ち」
そう言ってポケットからカードを取り出す。
「スペルカード。戦符『戦国日ノ丸１４６７』」
晴輝の背後から無数の黒い球体が出る。
「それでは、始めよう」
無数の弾幕が神奈子に向かって飛んで行った。

39 ― 怒りに任せた御柱（後書き）

パチュリー「主は殺し……基、黙らせたから今のうちに」
アリス「まったくもう十話近く出てないじゃない」
パチュリー「私は近々出るらしいわ」
アリス「良いわね、引き籠ってるだけで出番が回ってくるなんて」
パチュリー「主人公を殺すために数日も人形作りに没頭している貴方何て永遠に出番が来ない事を祈るわ」
アリス「良いわよ、やったげる。試験中『ゴリ……』」
主「ネタばれるからやめてぇぇぇぇぇぇぇ！」

感想よろしくお願いします。

４０ 一戦いは合掌とともに

「神祭『エクスパンデッド・オンバシラ』！」
神奈子はスペルカードをかざしてそう言い放つ。
無数の光を無駄な動きを見せずかわしていく。
「何だ、神様って言ってもこの程度なのか」
ポケットからスペルカードを取り出す。
「黒竜」
両手を神奈子に向けてスペルカードを握りつぶす。
「『竜の尾』」
両手から黒い光線が一直線に飛ぶ。
神奈子は素早くかわして背後から御柱を投げる。
「……」
晴輝は三枚目のスペルカードを握る。
「龍斧『憎しみと恨みの暴君』」
晴輝の周りに無数の斧の形をした物体が現れる。
物体は回転を始め神奈子に向かって飛ぶ。
神奈子は御柱で応戦するも数が多いためかそれとも斧が早いのか
攻撃を見切れていない。
数発は神奈子に被弾する。
「たっく、お前は妖怪か？人間か？」
「さぁ、どっちでしょう？」
巨大な斧を出現させた晴輝は左で軽々と斧を持ちあげる。
「残念だが僕の勝ちだ」
「……」
神奈子は悔しそうな表情で眼を瞑る。
斧はそのまま振り下げられると思ったが違った。
晴輝の右手が左手を強く握っている。その為に攻撃は中途半端な
所で消えてしまう。

「まったく、別に良いじゃないかあと六日なのだから」
(悪いが期日は守ってくれよ、こっちにもそれ相応の準備が必要なんだ)
心の奥底で眠っていた晴輝が黒へと話しかける。
だが何も知らず分からずの神奈子には何をしているかなど知る余地もない。
「だけど君の意識も消えかかってる、蒼も今はぐっすりだ。さっさと彼女を倒して私は戦の後の余韻に浸りたい」
(悪いけど、これで終わりみたいだ)
パァンと言う音がした。
後ろを見ると誰かが手を合わしている。
もう一人は緑の髪をした女性ともう一人はさっき助けた金髪の少女だ。
「大丈夫ですか神奈子!」
「同じ神様としてそのザマは何?神奈子」
「勝負ってのは一対一が基本だよ、知らないの?」
晴輝は大斧を消す。
「いくら諏訪子様の恩人でも」
「いくら私を助けてくれた恩人でも」
「「これ以上私の家族に手を出すな」」
二人は同時に手を合わせる。
神社の後ろから大量の水がこっちに向かって迫る。
「残念だけどこの程度の攻撃は」
(残念だが喰らって貰うぜ)
ガシッと足を誰かに掴まれる。
「やられたらやり返す。それが私の喧嘩だぁぁぁぁぁ!」
そのまま凄い勢いで投げられ襲い掛かる水の中に入る。
「息が……」
そのまま水は晴輝を包み込み、彼が酸欠になるまで閉じ込めた。
そして現在晴輝の体を使っている黒の意識が消えていった。

４０ー戦いは合掌とともに（後書き）

阿求「慧音さん、私たちの出番はまだですかね」
慧音「ちょっと前にお前のファンのための回があったばかりだろ。宴会まで待て」
主「宴会はいろんなハーレムの皆様が顔を合わせるからさぞや大変な事に……」
慧音「おい、主。ちょっと頭貸せ」

～主、頭突き地獄の刑～

感想よろしくお願いします。

41 ― 山の神は人間に頭を下げる

「本当にすまなかった！」
完全に元の晴輝に戻ってすぐの事だ。
今、山の神に頭を下げられている。
「いやいや、別に気にしてないですって」
アバラ五本が折れ、全身打撲に擦り傷多数のこの状態の人間を大丈夫とは言わない。
「まぁ、神奈子も反省してるし、許してあげたげて」
さっき助けた金髪の少女が頭を下げている神奈子の肩をポンと叩く。
彼女は洩矢諏訪子（もりやすわこ）さん。彼女は土着神と言ってこの神社で一緒に住んでいるらしい。
まるで叱られた子供とその母親の様な光景だ。
「でもまぁ、魔理沙が見たら怒るかな？」
「魔理沙さんなら神社（ここ）に乗り込んでくるかもしれませんね」
後ろから救急箱を持った緑の髪の女性が入ってきた。
この人は東風谷早苗（こちやさなえ）さん現人神と言う神様であり人間でもあるらしい。
「ああ、どうもどうも」
早苗から救急箱を受け取り晴輝は消毒液を取り出す。
「くぅ、沁みる！」
消毒液が擦り傷に沁みる。
「何だか古傷やら色々な傷跡がありますね」
早苗さんが俺の腕を見てそう答える。
「色々とありまして、森で何日も遭難したり、箒で突撃されたり、凍らされたり、槍とかナイフとか投げられたりと、一月で死にそうな経験ばかりで」
「それじゃあ、体全体が傷だらけって事？」

諏訪子さんが俺の腕をマジマジと見て答える。
「ええ、まぁ」
片方の腕や足の傷を見せる。
「手の届かない背中とかは如何してるんですか？」
「ああ、誰かにやってもらいたいけど、俺、ここじゃあ女性の知り合いしかいなくて」
死に腐れニア充が！（主の心からの叫び）
「それなら私が代わりにやりましょう」
早苗さんが手を上げて
「え、いや、だから恥ずかしいから、女性の前で脱ぐとか恥ずかしいから！」
「大丈夫です、私頑張りますから」
「早苗さんが大丈夫でも俺が無理なんだって」
「それじゃあ、後は若い者たちに任せて、行くよ神奈子」
諏訪子さんが神奈子さんを連れて行って部屋を出ていく。
「ちょ、信用し過ぎですって！て言うか何その仲人さんは！」
「早苗ぇぇぇ！何かされたら大声で叫ぶんだよぉぉぉぉ！」
「俺、信用されてねぇぇぇぇぇぇぇ！」

「早苗になんかしてたらアイツマジで埋めてやる」
神奈子ブツブツと愚痴りながら歩いていると襖に『蛙』し書かれた湯飲みを当てている諏訪子と出くわした。
「諏訪子、何やってんの？」
「まぁまぁ、いいから聞いてみてよ」
諏訪子はそう言って『蛇』と書かれた湯飲みを神奈子に渡す。
神奈子も何事かと思い襖に湯飲みを当てる。
『いや、駄目だってそこは』
『大丈夫、私に任せてください』
「……っ！」

部屋の中から聞こえてくるのは晴輝と早苗の声である。
「諏訪子、これは？」
「いやぁ～早苗が狼で晴輝が羊だったんだねぇ」
二人は再び湯飲みで盗聴を再び開始した。
『だからダメだってば。お願いだから触らないで、ひゃい』
『何だか楽しくなってきました、ほぉら力を抜いて、楽にして』
湯飲みをガタガタと震わせて二人は顔を赤らめる。
『聞いたことがあります。舐めるんですよね』
『いや、それとこれとでは明らかに違うから』
『私達に非があったのですからせめてもの償いです』
「早苗ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
神奈子襖をバンと勢い良く開けた。
そこには舌で背中の傷跡を舐めようとしている早苗と取り押さえられている晴輝がいた。
「えっ？如何したんですか？」
「た、助かった」
「なーんだ、本番じゃなかったんだ」

～少女と少年事情説明中～（手抜きじゃないよ）

「要は『舐めたら治る』と言う言葉を実際に試そうとした早苗が晴輝の背中を舐めようとした、と」
「「はい」」
何故か俺までも早苗さんと正座して神奈子説教を受ける羽目になった。
諏訪子さんは腹を抱えて笑っている。
「まぁ、それならいいんだ」
「何と間違えたんですか？」
「聞くな」
神奈子に質問したが返答ではなく鋭い刃物の様な睨みが返ってきた。

「私には神奈子が何を考えたなんて分かるけどね」
「諏訪子様、神奈子様は何を考えたんですか？」
『知らぬが事が仏』と言う言葉が脳裏を過る。
「そうだ、新しいスペルカードの実験台として二人を殺し……
いや使うからゆっくりしておいてくれ」
「神奈子、顔がマジだよ、ジョークだって」
「あの～神奈子様、何をお考えになったんですか？」
そのまま二人をズルズルと引きずって持って行った。
「いいな、あんなの」
別に処刑される二人の事ではない。
家族、そんな言葉が心に刺さる。
「魔理沙は俺の事を如何思ってんだろ？」
とりあえず帰ってくる二人の事を信じてお茶を淹れに行った。

41 ― 山の神は人間に頭を下げる（後書き）

次回は宴会編と黒編の始まり。
第一章もそろそろ大詰めです。

感想よろしくお願いします。

42 ― 彼が積み上げてきたものは石段の様に

「で、如何するんだぜ？」
魔理沙に言い寄られていた。
今夜ある宴会だが俺は未だに行くかどうか悩んでいた。
「まだ二十歳じゃないから酒の席はちょっと勘弁してほしい」
まだ十九である晴輝には酒などまだ早い。
「大丈夫だぜ、皆飲んでるんだから」
「でも」
「お前は私の助手だぜ、酒ぐらい注いでくれよ」
そう言われると弱い。
俺は助手なので立場的には魔理沙の方が上である。
それに宴会の方に行った方がいいと思われる事が一つあった。
「分かった、参加する。だけど俺は酒は飲まない」
「了解」
魔理沙は首を縦に振り喜んだ。

「と言うか今さら何だが何でバイクに乗るわけ」
魔理沙は箒をサイドカーに置いて晴輝の後ろに乗る。
「力は温存しときたいんだ、何があっても」
そう言って晴輝の腰に腕を回す。
「まぁ、いいか」
そう言ってバイクのキーを刺す。

「とりあえずは博霊神社に着いたけど」
「ちょっと早かったぜ」
宴会は夜からだがまだ夕日が沈む時間には早い。

「あややや？」
何処かで聞いた声がする。
「よく見れば晴輝さんとおまけに白黒ではありませんか」
「文、喜べ。今日は焼き鳥だ」
文と後ろから椛とにとりがいる。
「晴輝も宴会か？」
にとりはその場で着地して話しかけてくる。
「こいつ、酒は飲まねぇなんて言って最初は聞かなかったんだぜ」
「宴会なのに酒は飲まないんですか？」
皆は不思議そうな顔をして俺を見る。
確かに水着を着ているのに海で泳がない様な事と変わりは無い。
「酒を注ぐぐらいはするけどそれだけだ」
「何だ、私が注いでやろうと思ったのに」
後ろを振り向くと慧音さんと妹紅が立っていた。
「あの一件の礼をと思ったんだが残念だ」
「話は聞いたぞ、凄かったらしいな」
妹紅に背中を叩かれる。
「いや、別に凄いってものじゃ」
「今日は阿求はパスだから私が酌をしてやろうと思ったんだがな」
「まぁ、良いんじゃないか一歳ぐらい、今日ぐらいは羽目を外せって」
「もこたんの言うとおりですよ、良いじゃないですか一日ぐらい」
「よし、今日は鴉の焼き鳥だな」
「妹紅、手伝うぜ」
「駄目だってば三人とも、あと文はいい加減にしないともこたんのバーナー喰らうぞ」
「晴輝、お前は殺したくない。だからその呼び方は止めろ」
妹紅は手から炎を出して威嚇している。
「もこた……妹紅、そこまでにしておけ」
「慧音、お前も今『もこたん』って言いかけただろ」

そんな会話をしつつも石段を登る。
「て言うか皆飛んで行った方が早くないか？」
「晴輝さんは飛べないでしょう？」
椛は何故かそう言って俺の腕に自分の腕を絡める。
「俺に気にせず行ってくれれば良いのに」
「偶には石段を登りたいときだってあるんだよ」
にとりも何故かそう言って腕を絡めてくる。
「と言うか、何で二人は俺に腕を絡めて来るんだ？」
「気にしないでください」
「気にしない気にしない」
二人はそのまま絡めた腕に抱きつく。
「何だろう、背後からとんでもない量の殺気を感じる。特濃なやつを」
後ろを振り向いたら死ぬ。そう暗示をかけて石段を登る。
「マスター……」
「フジヤマ……」
「何故だろう、まるで見たかのように後ろの状況が見える。魔理沙と妹紅がスペカ持って構えてるのが見える」
何故だろうか背中がじりじりと熱い。
「二人とも落ち着いてください」
おお、助け船が来たかと思い文の方を向く。
「ここは私が解決しよう」
あれ、助け舟が撃沈しちゃったよ、オイ。
「灸にはやっぱり」
そう言って慧音は髪の色を緑に染めて角を生やす。
慧音の頭と晴輝の頭がぶつかりゴツンと言う鈍い音が脳に直接響く。
「～～～～～！」
晴輝はあまりの痛さに言葉を忘れ頭を抱える。
激痛に負けずと必死に堪えて口を開く。

「お、俺、何か悪いことしたかな？」
「複雑な乙女心は晴輝さんには分からなかったんですね」
「自分の胸に聞いてみな」
文は呆れた顔で首を横に振る。
白沢状態の慧音さんは通常時の慧音さんに比べて攻撃的である。
「大丈夫ですか？」
椛が俺の頭部を優しく撫でる。
「白沢もやり過ぎだよ」
にとりも頭部を撫でる。
「まだ足りないみたいだな」
「俺は何もしてないから！」
そう言って皆で石段を上って行く。
俺の積み上げた物は多くそしてどれもが素晴らしいものだった。
俺は幻想郷に来て良かったと心の底から思っている。
何時までも平和にここで暮らしたいがそうも出来ない。
だって俺は。
今日死ぬかもしれないのだから。

42 ―彼が積み上げてきたものは石段の様に（後書き）

主「めっさ久しぶりの」
「「東方二次創作『幻想郷と家出男』キャラの性格紹介コーナー！」」
主「久しぶりっすね美鈴さん」
美「原作では二十数話から出てませんからね」
主「もうちょっとだけ辛抱してください」
美「どのくらいでしょうか？」
主「地霊殿編もいれて十数話ぐらいっすかねぇ」
美「長いから寝て待つとしますか」
主「あれ、あそこにいるの咲夜さんじゃね？」

～美鈴終了のお知らせ～

「感想よろしくお願いします」

４３ 一宴会前のひと騒ぎ

石段を登り終える頃には俺の頭部は慧音さんの頭突き地獄で瀕死状態だった。

情けなくも途中で妹紅に運ばれて上ってきたのだ。

「もう下ろしてくれてもいいぞ。って何か妹紅、嬉しそうだな」

「気にするな、もう少し甘えたらどうだ」

「男はもう甘える歳じゃあないんだよ」

妹紅から下ろしてもらいそのまま地面へと立つ。

「おっと」

だがその場で目眩がして倒れかける。

「大丈夫か晴輝」

魔理沙が俺の体重を支えてくれたおかげで助かったが未だに足が機能してくれない。

「慧音、すこしやり過ぎたんじゃないか？」

「まぁ少しやり過ぎたように思えるが黒焦げにされるよりはマシだろう」

妹紅と慧音さんの会話が聞こえてくるが脳にちゃんと伝わってこないため何と言っているのか分からない。

「魔理沙、悪いけど運んでくれるかな？」

「いいぜ」

魔理沙に肩を貸してもらい先へと進む。

多少の頭の痛みを我慢しつつも

「おっ、助手と他の奴ら」

室内で小町さんが正座していた。

「如何したんですか小町さん」

「ちょっと天気が良かったから昼寝してたら怒られた」

「子供ですか」
アハハハハと笑う小町さんは手招きをする。
「後ろのアイツらは何だい？もしかしてお前さんの嫁かい？」
真剣そうな顔でこっちを睨む。流石は死神、睨みには迫力がある。
「違う、友人だよ友人」
「なら安心したよ」
何が安心なんだろうと心に思いつつも隣に座る。
「アンタは酒はイケる口かい？」
「残念だけど俺は今日は酒は飲まない事を前提に来てるんだ」
「なんだい、宴会まで来て飲んで帰らないとはまた無粋だねぇ」
「酌ぐらいはするけど、良かったら酌でもしようか？」
「お、良いねぇ。お願いするよ」
そう言って二人で会話を進めていると。
「小町、ずいぶん楽しそうですねぇ」
「え、四季様？」
「どうも、映姫さん」
「晴輝さん、そこで正座」
「何で？」
「いいから正座」
可愛く微笑む閻魔様だが何か怒っている様な感じがする。
「手紙の事、忘れたんですか？」
ハッと思い素早く崩した態勢から正座になる。
「まったく、貴方と言う人は死を待つ人間に対して生かしてやろう等と人間がそんな大業を行ってはいけませんよ。名のある神でもしてはいけない事を貴方は平然とやってのけたのですからね。そこの所を深く反省し、まぁ私も別に阿求を生かしてはいけないとは言っていません。ですがそう言う行為は自分の為にも阿求の為にもなりません。膨らんだ期待がそのまま形にならず割れてしまったらどうするつもりだったんですか？」
「すげぇ、大抵二行程度のセリフしか思いつかない作者のボンクラ

脳がここまで長いセリフを書くとは」
　悪かったなボンクラ脳で（作者の声）
「でもこのままだと二日はかかりますぜ旦那」
　隣で共に正座をしている正座仲間の小町が小声で話しかけてくる。
「如何すれば良い？」
「四季様がこうなると誰にも止められないからねぇ、放っておくしかないよ」
「ああ、説教さえしてなければ可愛いのに」
　口から漏れた言葉が辺りの空気を変えた。
　映姫はピタリと止まりワナワナと震えていた。
「ほほう、説教している私は無愛想だと言いたいんですか？」
　もう駄目だとと決心を決めた小町は眼を瞑る。
「ちょっと、アンタ達、説教してる暇あったら手伝いなさいよ」
　腰に手を当てて博霊の巫女の霊夢がやってきた。
「博霊霊夢。説教はその者の自分の罪を思わせる大事な……」
「まったく、仕事さっさと終わらせて朝早くからここで待ってたのは何処のどいつよ」
「四季様ったら今日の為に仕事の大半終わらせたんだ、何が楽しみなのかねぇ？」
「ちょっと小町、私が宴会の為に仕事を終わらせて何か悪い事が？」
　こっちに向けた映姫の笑顔には般若を思わせる威圧感があった。
「四季様の場合は宴会じゃなくてこの助手の事が……」
「小町」
　見える、見えるぞ。般若がどんどん鬼神へと変わるのが、背後にゴゴゴゴゴゴと言う擬音が付いて行くのが見える。て言うか怖い。
「いえ、何でもないです」
　小町はどんどん小さくなって行った。
「とりあえず、手伝ってくれない？」

包丁を持ってそう問いかけてくる霊夢にも映姫さんと同じものを感じた。

「とりあえずは料理なんだけど」
「それじゃあ俺がやるよ」
晴輝が真っ先に手を上げる。
「とりあえず酒の肴になりそうなものとかを沢山お願いね」
そう言って霊夢は映姫と小町を連れて宴会場の製作に行った。
「宴会は九時から現在時刻は五時」
四時間と言う時間で数十人分の物を作る。
「やっぱ揚げ物が定番だけど、ってか冷蔵庫あるし」
冷蔵庫を開けるが入っている物など殆どない。
「霊夢、冷蔵庫の中が空に近いんだけど」
「ああ、買い物もよろしく」
「人使いの荒い巫女だ」
「何か言った？」
小声で呟いた言葉が霊夢の耳に入った。
地獄耳か。
「悪かったわね地獄耳で」
心読まれた！

「バイクなかったらヤバかったな」
バイクのサイドカーに荷物を置き人里を歩く。
「あ、晴輝さん」
不意に誰かに呼び止められる。
「阿求、体の具合は大丈夫か？」
「ええ、すっかり元気になりましたよ」
酒瓶を三つ抱えた阿求が立っていた。

前回の一件で阿求は元気になった。
体の事も言えるが精神面も何か重荷を外した様だそうだ。
寿命が延びて人生の一日一日を満喫しているみたいだ。
「そうだ、これ」
阿求は持っている酒瓶を俺に手渡した。
「実は助かったお祝いにいろんな人からお酒を頂いて処理に困ってたんです。良ければどうぞ」
「あ、ああ、ありがと」
彼女の笑顔を見たら酒は飲まないからいらないとは断れなかった。
「飲ませて貰うよ」
ごめん、俺今日は飲まないんだと心の中で謝罪の言葉を放って阿求と離れた。

「とりあえずは唐揚げと天ぷら、月が綺麗に出るらしいからお団子も」
そう言って材料を取り出す。
「こんな量は久々だから腕が鳴るな」
袖を捲って包丁を握る。
「じゃあ始めますか」

４３ 一宴会前のひと騒ぎ（後書き）

感想よろしくお願いします。

４４ 一四十四は不吉を招く

「出来た」
現在の時刻は九時の数十分前、料理を皿に綺麗に盛り付けて机の上に置く。
「ちょっと作り過ぎたか」
「いえ、このぐらいあれば事足りるわ」
後ろから霊夢がやってくる。
「上出来ね、でもこの唐揚げは辛くないかしら？」
霊夢は皿の唐揚げを一つ取って口に放り込む。
「酒の肴には持って来いだろ」
「確かにね」
「あ、外れくじで三つほど激辛あるから気をつけてな」
「それならさっき妹紅が一つ当たってたわよ」
あ、やべぇ殺されるかも。
「大丈夫よ私が命令した事にしておいたから」
「助かった」
「でも次は無いわよ」
とりあえずはあとで回収するか。
「ねぇ、一つだけ聞いていいかしら？」
「何だ？」
「貴方から霊力が漏れているのだけれど如何いう事？」
「……」
晴輝は黙り込む。
「図星ね」
「流石は幻想郷の結界を守る博霊の巫女さんと褒めておけばいいか？」
「褒められても嬉しくないわ、魔理沙が気付かない様に魔力と類似した物に変えたり誰かと会うたびに力の性質を変えている。それだ

けの事なんでしょ？」
「正解」
もうすべてお見通しと思い全てを話す
「今夜、俺の中に眠ってる黒って奴が目覚めんだ」
「それを今日あなたが倒すって事？」
「ああ」
俺と霊夢は腰を下ろして話を続ける。
「俺の先祖は『龍の化身』」
「龍の化身？」
「『四龍』って言って紅龍、蒼龍、白龍、黒龍の四つの龍が神田家の先祖だ。変化や操作は龍の基礎能力でね、魔理沙の八卦炉の模造品を作ったり皮膚を妖怪の物にしたり出来る」
「便利そうね」
「そうでもないさ、龍の血は時を重ねる毎にどんどん薄まって行って奇跡的に残ってる状態なんだ」
腕を捲り腕の包帯を取る。
腕には無数の切り傷がある。
「そんな状態で力を使うと俺の体は力に耐えられなくなって体がボロボロになるんだ」
「それで、アンタは黒って奴と戦って勝てるの？」
痛い所を突いて来るなぁ。
「力は五分五分って所、まぁこっちは蒼と紅と俺の三人だから大丈夫だ」
「もしも負けたらどうなるの？」
「……」
晴輝は黙り込む。
「俺の人格が消えて俺の体は黒の物になる。アイツは人間が嫌いだからな幻想郷の全ての人間を殺すだろう」
「その時は容赦なく消すわよ」
「ああ、よろしく頼む」

立ち上がり時計を見る。
「四十四分、不吉だな」

４４ー四十四は不吉を招く（後書き）

主「次回はついに宴会編」

魔「皆、どんどん突っ込んでいいぜ☆」

「感想よろしくお願いします」

４５ 一宴会では適度な羽目の外し方を

「霊夢、来て上げたわよ」
「霊夢さーん来ましたよ」
「霊夢―酒飲みに来たぞぉ」
紅魔館の面々に山の神社の面々、もうすでに酔っている萃香がやってきた。
「あら、黒白の助手」
「久しぶり」
「まぁ、今日は宴会、楽しみましょ」
「お久しぶり」
「パチュリーさん」
「さんはいいわ、それより魔理沙は？」
「あっちでアリスさんって人と酒飲んでる」
パチュリーはそのまま魔理沙の方目掛けて飛んで行った。
「ああ言う時だけパチュリー様は早いんだから」
「美鈴さん、久しぶりです」
「美鈴、あまり羽目外さないでね」
「咲夜さんもお久しぶりです」
「ええ、久しぶり」
「今日は一つ大きめのパッドを着けてきたのぉ」
何かが耳を掠める。
「蒼、またお前か」
「いいわ、今日こそ決着を付けてやる！」
「酒の前の運動は酒を美味くするからのぉ」
そう言って二人が外へ出て行った。
「咲夜、私も戦うー」
フランちゃんが変な形状の武器を持ち出して外へ出ていく。
「ねぇ、私と戦わない？」

次は紅が俺から離れる。
「お姉ちゃん、強くないと壊れちゃうよ」
「私、相当強いから手加減とか要らないよ？」
「フラン、やるならここから離れてやって、咲夜もね」
レミリアにそう言われるとハーイと元気に手を上げてフランちゃんが外へと出ていく。
「ちょっと遊んでくるわ」
「ほどほどにな」
「最後に戦いたいじゃない、遊びでね」

「あの一件は本当にすみませんでした」
早苗さんが頭を下げる。
「いや、別に気にしてないから」
「いえ、こう言うのはハッキリさせた方がいいですから」
「それじゃあ、神奈子の事を何とかして、さっきから何故か睨まれて困ってるんだ」
（早苗の事をヤラシイ眼で見てんじゃねぇよ）
「何か凄い殺気を感じるぜ」
魔理沙風に言ってみたが特に変わりは無かった。

「萃香、すでに酔ってんじゃん大丈夫か？」
「大丈夫、大丈夫」
足元が覚束ない。
「大丈夫、大丈夫」
「気のせいかな何かでかくなってないか？」
「気のせい、気のせい」
「ちょっ、デカイ！もう三倍ぐらいになってるからってぎゃあああああああ！」
大きくなった萃香に押しつぶされる。

「助けてぇぇぇぇ！」

宴会が始まりもう一時間が経過した。
「もこたぁぁぁぁぁん！」
白沢になった慧音が妹紅を押し倒す。
「慧音さんは盛るな！」
「もちろん、ベットの上でだぞぉぉぉ」
「何言ってんですか慧音さん！」
「もちろん、晴輝と慧音と妹紅の三人だぞぉぉぉ」
「夢の様だけど酔った勢いはダメだぞ慧音！」
「もこたんも酔ってるし！」

さらに一時間経過。
「もみもみ脱ぎまーす、晴輝しゃんはみれれくらはい（見ててください）」
次は椛が徐に服を脱ぎ始めた。
「待て、脱ぐな！」
「いいねぇ、もみもみ、次はスカート行ってみようか」
文はカメラのシャッターを連続で切る。
「お前は何処の写真集のカメラマンだ！」
「にとりんも脱ぐぞぉぉぉぉ！」
「誰か止めるの手伝ってくれぇぇぇ！」

さらに三十分経過。
「霊夢、どっちが先に晴輝に酒を飲ますか勝負しようぜ」
「いいけど勝ったら彼を頂戴」
「いいぜ」
魔理沙と霊夢が何かしら怪しい話をしている。

「待て、俺は了解してないぞ」
「何か面白そうね、私も混ぜてくれないかしら？」
そこにレミリアも加わる。
「人の話を聞けよ」
「それじゃあ、私から」
霊夢が手を上げる。
何もかもを諦めて頭を抱える。
トントンと肩を叩かれる
「んむっ！」
頭を上げた瞬間に何かが口を塞ぐ。
霊夢の唇である。
口に何かしらの液体が流れ込み、相手の舌が自分の舌を舐める。
「んーんー！」
霊夢を離そうとするがガッチリと肩を掴まれて離れられない。
「んーーー！」
魔理沙とレミリアに助けを求めて見た。
「……」
「……」
「んーんんんーんんんーんんー！」
晴輝の今のセリフを日本語訳すると『お前等は何で口に酒含んでスタンばってんだよ！』である。
何とか逃げ出そうとするが舌を舐められる気持ち良さを体が覚えて力が出ない。
「んん、んーんんんんー、んーんんんー！」
日本語訳は（オイ、早く退かないと変なタグ付くから、子供には見せられなくなっちゃうから！）である。
パリン、と言う音が聞こえて霊夢の頭からガラス片が落ちてくる。
ダラーンとなった霊夢を退かすと割れた酒瓶を持った映姫さんがいた。
「映姫……さん？」

割れた酒瓶を放り投げ晴輝の体に倒れる。
「如何したん……ですか？」
「……いてください」
「へっ？」
何やら息を荒らげ、苦しそうにしている映姫さんがこっちを向いた。
「私の事を抱いてください」
駄目だ、これ以上やるとゲームで言う年齢指定Ｄのもう一段階上の指定になってしまう。
「小町さぁぁぁぁん、発情したアンタの上司を貰いに来てぇぇぇぇぇ！」
数秒で小町さんを見つけてＳＯＳを出す。

「でね、映姫様は少し寝てると私を丸一日説教すんだよ、如何思う？」
「私も門番をしている時にうたた寝してたらナイフ投げてくるんですよ、私の方も酷いですってば！」
死神が門番と愚痴ってた。
「如何でもいいし、て言うか自分が悪いだけなんじゃ！」
しっかりと抱きついている映姫さんを退かそうともがくが全然離れない。
「くそっ早くしなければこの作品に子供は見ちゃいけないタグがぁぁぁぁぁ！」
ムクリと背後で誰かが立ちあがる。
「うっさい！」
何やら黒白の球体とスペルカードを持っている。
「宝符『陰陽鬼神玉』
霊符『夢想封印』」
爆音と共に神社が一部大破した。

俺は満月の夜を舞ってそのまま地面に叩きつけられた。
この時、『この人たちの宴会に参加して良かった』と言う満足感と『二度とこの人たちの宴会に参加しないでおこう』という決心が心を埋め尽くした。

４５ 宴会では適度な羽目の外し方を（後書き）

感想よろしくお願いします。

４６ー満月は男に自信をつけさせる

「これで良し」
宴会に参加した面々を大破してない茶の間に寝かせた。
「お前等は大丈夫か？」
蒼と紅は決戦前にボロボロになって帰ってきた。
「あのメイドマジで強い」
「あの子見た目以上に強かった」
「「でも勝ったからいいや」」
勝ったんかい、と言うツッコミを顔で表現する。
「とりあえず大破した部分は俺の能力で少しは治せたけど」
と言っても骨組みだけである。
「アンタ、行くの？」
背後に霊夢が立ってた。
「私達の助けは？」
晴輝はその場で首を振る。
アイツはたぶんここの住人を皆殺ししても止まらない。
死人は一人でいい。
「この事は他言無用って事で」
「駄目よ」
フラフラと立ちあがが霊夢は即答した。
「そんな危険な奴はアンタ一人に任してらんない。それにアンタにもしもの事があったら何人悲しむと思ってるの？」
「霊夢は俺が死んだら泣いてくれるか？」
「別に、でも魔理沙はたぶん泣くかもね」
「それじゃあ、一つ皆に伝言を」
刀を右手に、槍を左手に持つ。
「『楽しかった、ありがとう』って、後、霊夢は酔った勢いでキスをしない事だ」

「酔ってないわよ、真剣にしたわよ」
「そうか」
何でそんな事をしたのか、何て野暮な事は聞かないでおこう。
霊夢にまた肩を掴まれた。
「死なないでよ」
そう言って彼女は晴輝の唇に自分の唇を押しつけた。
「ったく、また建っちまっただろ」
晴輝は外に出て背中から白い翼を生やす。
「死亡フラグが」
晴輝はそのまま飛んで行った。

「幻想郷の住人ならそのくらい切り抜けて来なさい」
霊夢は酒瓶の酒を一気に飲み干した。

４６ 満月は男に自信をつけさせる（後書き）

感想よろしくお願いします。

43．5ー彼女達の恋物語

話は宴会が始まる前の話だ。
「ねぇ、あんたたちは彼の何処が気に行ったわけ？」
事の発端は霊夢にあった。
「な、何のことだぜ」
「魔理沙も文も椛、にとり、妹紅、慧音、ついでにここに居ないルーミアも」
「ルーミアはみすちーと今日は飲んでるらしい」
「んで、魔理沙、何処が気に行ったの？」
魔理沙に指を刺すと皆が面白そうに魔理沙に近づく。
「気に入ったというかアイツと遭ったのは私の家の前だったんだがな何と言うか倒れてて」
「魔理沙、隠蔽か」
そこに慧音が釘を刺した。
「慧音、如何いう事？」
「妹紅、実は魔理沙はな彼に大怪我させて自分が犯人だと言ってないんだ」
「魔理沙、アンタ……」
呆れた顔が魔理沙の眼に映る。
「な、何で知ってんだよ慧音」
「悪いがルーミアから聞いた」
「んで、話に戻るけど何処で惚れたの？」
「まぁ、何と言うか私と同じ所を感じたって言うか」
「ああ、アンタも彼も努力家だったわね」
「努力家って言うな。それで普通に三人で暮らしてたらいつの間にか眼が晴輝を追ってて……」
「なるほど一目惚れですか」
「ちがっ、文！変な事言うな！」

「次は文、何で好きなの？」
「え、私なんかより椛や慧音さん、もこたんとかの方が」
「じっくり聞かせてもらいたいな、それとも丸焦げになりたいか？」
片手から炎を出した妹紅はすごい剣幕で文を睨んでいた。
「どうせ私達も聞かれるんだ、一人でも多く道連れって事で」
慧音は白銀の髪を掻きあげる。
「文様、観念した方がいいですよ」
「くっ、まさかこの私が質問される側になるなんて」
観念したらしくため息を吐いて口を開いた。
「晴輝さんと会ったのは彼が二回目に山に来た時です。スクープのネタを椛が持って来たんですが」
「そこで文様可愛いって言われて顔真っ赤にして飛んで行きましたもんね」
「椛、余計な事は言わなくていいですこのヤロー」
文の瞳が椛を捉える。
「それから時間が経って彼の顔とか頻繁に思い出しちゃうし、何か白黒と一緒に居るのを見ると少し胸が痛みます」
「何だ、文だって一目惚れじゃん」
「魔理沙さんに言われたくありません！」
「それより椛はどうして？」
文のウインクの意味を理解したにとりが話を逸らす。
「私も文様と同じです、頼れる兄妹（きょうだい）と言うか、頭を撫でてもらうと凄く心地が良いんです」
「犬だな」
「犬ですね」
「犬ね」
「犬じゃないです狼です！」
魔理沙、文、霊夢の発言に必死になる。
「私は好意と言うより興味だね、顔は良いし、将棋も強いし、私は椛と晴輝と三人で暮らしても構わないけど？」

にとりもアハハと笑って軽く流すが顔がほんのりと赤くなっていた。
「もこたんはどうしてですか？」
「皆、喜べ、今日は鴉の素焼きだぞ」
妹紅は両手から炎を出して構える。
文の軽い挑発に息を荒くする。
もこたんは「もこたん」と言う相性が嫌いらしい。
「ちょっと待ってろ、主を消してくる」
「まぁ待て、妹紅の話が先だ」
そう言って慧音が妹紅の片足を掴む。
「一人だけ逃げようたってそうはいかないぜ」
魔理沙がもう片方の足を掴む。
「別に好きってわけじゃない、ただ、興味があるんだけだ」
魔理沙と慧音が妹紅の足を放す。
皆も何やら残念そうな顔をしている。
「次は慧音だぜ」
「いいネタを期待してますよ」
魔理沙と文が慧音をはやし立てる。
「私は彼が好きだが？」
慧音の一言に誰もが息を飲んだ。
「興味ではなく好意でだ、彼を見ていると頭の中が彼の事で一杯になる。こういう気持ちが恋なんだろ」
「さらっと恥ずかしい事言ったわね」
霊夢は呆れた顔をしていた。
「そこまでハッキリ言うと恥ずかしいを超えて清々しいね」
にとりも苦笑しつつも返答する。
「自分で言って何何だが確かに恥ずかしいな。あーヤバい。顔真っ赤になってきた」
顔を隠して慧音が笑う。
皆は互いに互いと眼を会わせない様にそれぞれ違う方向を向いて

いた。
「まぁ、様は男らしい所に惚れたのね」
霊夢がそう言うと皆は黙り込む。
「そういう霊夢はどうなんだ？」
「私？私は彼じゃないと思う」
「思う？」
皆が霊夢の一言に疑問を持った。
「思うと言う事はそうでもあると言う事ですか？」
「それが分かれば手っ取り早いんだけどね」
霊夢は立ち上がり、台所へと足を運ぶ。
「キスすれば分かるかも知れない」
その一言に皆の顔付きが変わる。
さっきまで穏やかに色恋話をしていた面々だがいきなり真面目な顔をする。
「おい、それは如何いう事……」
「妹紅、口開けて」
ひょいっと霊夢が投げた物体が妹紅の口へと入った。
「……っ！」
最初は警戒しつつも口の中へとダイブした物を中で転がして噛んだ。
だが直ぐに顔を真っ赤にして口を押さえて苦しみ始めた。
「むぐーーー！」
何かの痛みに堪えている様な表情を見せて眼から涙を流す。
「か、辛い」
ズキューンと何かを射抜いた、もとい射抜かれた音が慧音からする。
「もこたーん！」
そのまま某怪盗三世並みのダイブを決めて妹紅を押し倒す慧音。
それを聞かぬふりして他の面々が出ていく。

「彼が本当に彼だったのか……」

意味深な顔をしている霊夢からは悲しみを顔に出していた。

４３．５ー彼女達の恋物語（後書き）

番外編です。感想よろしくお願いします。
次回は４４．５話です。何で宴会があんな事になったのかそれがわかります。

４４．５紅魔の屋敷に誰もいない

赤い屋敷が月夜に照らされ異様な雰囲気を出していた。
「フラン、準備は出来た？」
「出来た！」
紅魔館の主のレミリア、いくら吸血鬼と言えど実の妹の前では笑顔を見せる。
「咲夜、行く準備を……メイド長の咲夜はありったけのナイフを仕込んでいた。
「如何なされましたか、お嬢様」
主に笑顔を見せる咲夜だが背後には赤、紫、黒のオーラを出している。
「咲夜、別に戦闘に行くわけじゃないのだからもう少し装備を軽く……」
「如何なされましたか、お嬢様？」
さっきと変わらぬセリフだが背後のオーラはすでに邪神と化している。
黒い上半身に背中から特大の剣が背中から出ていて瞳はまるで充血したかのように赤い光りを出している。
「咲夜、戦争に行くわけではないからその装備は置いて行きなさい」
「如何なされましたか、お嬢様？」
咲夜は足に小型マシンガンを装備している。
マシンガンはボタンを押すと弾が発射するようになっていて『にとり』と書かれている。
「咲夜、出来るだけ外でやりなさい」
「はい、お嬢様」
邪神ＰＡＤの怒りは最高潮、それも全ての原因は、
「楽しみですね、晴輝さんたちも来るから……」

神田晴輝である。
「咲夜、その怒りを静めて、美鈴までも怯えてるわ」
無数のナイフが美鈴にあたるギリギリ一ミリの所で壁へと刺さっている。
美鈴はナイフをギリギリで避ける為に非常口の絵の人みたいなポーズをとっている。
「今夜は楽しくなりますね」
「一つだけ言っておくけど彼ではなく彼のもう一つの人格が咲夜を挑発したほうよ」
ドアを開けてパチュリーは美鈴とナイフと壁の繰り出すアートに「何これ」と一言感想を言って入ってきた。
「あら、パチュリー様も行くのですか？」
「ええ、ここのセキュリティーはちゃんと発動するように仕込んでいるから大丈夫よ」
歩いて来るパチュリーから何かが落ちる。
「えっと、パチュリー様？この怪しげな眼に優しい緑色の液体は？」
「美鈴、見なかった事にしなさい」
美鈴から薬品を奪い取る。
「くっ、まさかこれが永遠亭の主と共同開発した相手の欲望を開放させる（魔法使いに抜群の効き目の媚薬成分入り）薬とは気付かれてたか！？これを魔理沙に飲ませてあの男とアリスより先に既成事実を作ると言う私の野望が！！」
「ぜーんぶ言ってるわよ、パチェ」
「何……だと！」
「最近のパチュリー様はボケに目覚めてますから」
「咲夜さん、このナイフ外してくれませんか？」
こんな会話があり紅魔館の面々は博霊神社へと行ったのだがこの後フランちゃんが悪戯に全てのお酒にこの薬を入れてパチュリーさんが皆の居ない所で（主の規制、媚薬という点で察してください）していた事など今のパチュリーには気が付かなかった。

後日談だがこの薬を飲んだ魔理沙だが薬より先に自分の持っていた酒が回っていたから効果は出なかった。

４４．５紅魔の屋敷に誰もいない（後書き）

次回は本篇です。
感想よろしくお願いします。

４７－男の意地は覚悟の印

無縁塚、魔法の森を抜けて再思の道を真っ直ぐ歩いて行くとある。

幻想郷を包む結界が脆くなっている為にゴミ、機械、人間など様々な物がここへと辿り着く。

そんな場所に晴輝はいた。

何時になく真剣な表情で刀を握っていた。

「御先祖様に武器向けて失礼だと思わないの？」

目の前に姿を現すのは黒だが眼の色が他の二人と違っていた。

眼が赤い。

「今の今まで楽しみにしてたんだよ、君に僕の刃が刺さるとなると楽しくてね。あ、でも」

黒が手を上にあげると巨大な大斧が降ってくる。

「蒼の『妖刀』（ようとうそうえん）蒼炎、紅の『魔槍』（まそうこうすい）紅水、君の『外爪』（げそうはくひょう）白氷、そして僕の『邪斧』（じゃふこくらい）黒雷、四龍の武器の中で一番強いのは僕の武器」

斧を軽々と片手で回して相手を挑発したような眼つきでこっちを見る。

「勝てるの？」

完全に俺を相手を見下しているか。

それとも挑発しているのか。

「まぁいい、一日、いや一話で決着を付けてやるよ」

「メタな発言は控えた方が良いよ。人気が…………って言っても幻想郷キャラでないオリジナルのキャラクターには人気なんて全くないんだと思うけど」

「お前も結構なメタ発言してるけどな」

「フッフッフッ」

「アハハハハハ」

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

狂ったように笑い出す二人羽根を広げ、武器を強く握る。

「おもしれぇ、どっちが先に死ぬか勝負しよう！」

「弱肉強食、君が喰われろォォォォォォォォォォォォ！」

互いの武器が重なり金属音が響く。

晴輝は力、扱いやすさ、軽さ、長さのバランスの刀に対して黒はパワー重視の大斧、そんな二人は互角で戦っている。

これが示すのはバランスのある武器を良く使える晴輝、対してパワー重視の武器で対抗できる黒は技量が優れていると言える。

「まだまだまだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

刀を無造作に振り相手に攻撃の隙を与えない。

対する黒は黙って攻撃をかわしたりガードしたりと防戦に回っている。

「ふっ」

晴輝が刀を振り上げた一瞬をついて腹に蹴りを入れる。

態勢を立て直そうとする晴輝に追撃の弾幕が迫る。

「弾幕には弾幕だ！」

晴輝は右手の指を鳴らすと刀と槍が姿を現す。

槍と刀から無数の弾幕が発射される。

「面白い！」

負けずと黒も弾幕を飛ばしてくる。

弾幕は相殺されたり数発被弾しつつも飛び交う。

「何故諦めない！今諦めたら楽になるぞ！」

「…………………さぁね？」

「意地だよ意地」

弾幕の飛び交う中頭に皆の顔が映る。

「意地？そんなくだらない物で命を落とすのか？」

相手がほくそ笑む。

「くだらないなぁ！僕は君が可哀想でならない。何故立つ、何故立

ち向かう、何故諦めない、何故武器を放さない！」
幻想郷の日々が頭の中を過る。
幻想郷に迷い込んでもう二カ月近く。
春の四月から夏の六月へと変わり、俺の人生も変わった。
「男（オレ）が武器を持つ理由？簡単だよ」
「譲れない事情があるんだよ、男の意地は決意の印。命懸ける価値がない？強敵が倒せない？そんな事で武器を手放したら終わりだってんだよ！」
弾幕はさらに激しくなり体に数弾が被弾する。
赤いPと書かれたブロックやらが俺から出ていく。
「男なら武器持って誰かの為に戦いたい、そんな英雄になりたいんだよ！」
「英雄になりたい？それはただの自己満足だよ！」
確かにそうかもしれない。
自己満足、自己中心的等の言葉がお似合いかもしれない。
「俺はこの幻想郷で英雄になりたいわけじゃない！英雄ってのは人助けたらなれるものじゃない。誰かに必要とされてなるもんだ！今はお呼びでなくても、いつか誰かに呼ばれる。なら少し早めに英雄になつてやるよ！」
白い翼を大きく広げて自身の素早さを加速する。
「この一枚に全てを賭ける！」
「面白い、なら僕も！」
「「龍符！」」
二人は大きく息を吸って腹に力を貯める。
「「『バーストボイス』！」」
晴輝は白い光柱が黒からはその名の通り黒い黒柱が放たれる。
（もしも、生まれ変われたら、その時はまた魔理沙の助手として生まれたいな）
両者の攻撃は相殺されずにそのまま勢いを強めていく。
（和菓子屋開くのも悪く、ないかもな）

そして……。

「『文々。新聞』、夏の特別号ですよーーー！」

朝早くから文が空を飛んでいた。

記事には大きくこう書かれていた。

『今日も平和な幻想郷、博霊霊夢のお悩み相談（有料）、今日もばくせつ霧雨魔理沙』。

晴輝の記事などは大きく書かれてはいなかった。

今日も皆は明るい。

一部を除いて。

よく見ると新聞の端にはこう書かれていた。

小さいが目立つように写真付きで『探し人、神田晴輝』と。

４７ー男の意地は覚悟の印（後書き）

主「そうだ、鬼巫女霊夢、フランちゃん＆レミリアおぜう様の戦いの中に晴輝を放り込もう」

晴「確実に死ぬからやめい」

主「実はその後が地霊殿です」

晴「確実に死亡√入ったよ」

「感想よろしくお願いします」

48 ― 過去は常に変わらずそこにある（前書き）

投稿が遅れてしまってすいません。
過去編、改めてスタートです。
ちょっとグロいです。

48 ― 過去は常に変わらずそこにある

霧が濃い。
周囲を見渡しても何もない。
少しうす暗く、何故か来た様な気がする。
「三途の河か？小町さん居るかな？」
だがまだ酔い潰れているだろうと思い一歩一歩と周囲を確認しながら辺りを歩行する。
「でも、三途の河じゃなさそうだな」
水の匂いと朝の匂い、平らな地面、霧が濃いというヒントから霧の湖付近だと気付く。
あの戦いで俺と黒は相討ちになった。
何とか気力だけでアイツの斧に魂は封じてそこで力尽きたんだが何故霧の湖に居るのだろうか。
またも周りを見渡すがやはり辺り一面が霧だけである。
と言ってもここまで霧が濃いと頭がどうにかなってしまいそうだ。
「とりあえずは、飛んでみるか」
少し足に力を入れて直にでも飛び立つ準備をして空を見上げる
翼を広げようとすると頭の上から何かが落ちてくるのが分かった。
「何だこれ？」
包みが一つ落ちてきて拾い上げる。
「なになに？『その仮面を被って魔法の森まで行け、正体は明かすな』って何だよ？」
怪しげな内容だがまぁ信じてみよう。
他にやることもないのだから。
白い仮面の真ん中に龍と書かれている。
仮面を被りその場所を飛び去ったろうとしたが
翼は生えず、何も起こらない。
可笑しいと思いつつもう一度試してみるが何も起こらない。

「俺のコマンドは『飛ぶ』で『はねる』じゃないぞ」
しかし何も起こらなかった。

あまり遠くなかったので歩いて魔法の森に入ったが良いが何処を目指せばいいのか分からない。
ただ闇雲に歩いておけば何とかなると思ったが何も起こらない。
刀も槍もなく何故か財布と壊れた携帯電話を持っていた。
「ヒントが少ないっての」
何も考えずに歩いていると金髪の赤リボンの頭が見えた。
ルーミアだと思って近づく。
「ルーミ……」
だが鼻を刺す微かな臭いに足が止まってしまう。
「死んだ生き物の臭い」
よく見るとそこらへんに骨やら肉塊が転がっている。
「……ルーミア」
恐る恐るルーミアに声をかける。
「……」
少女は確かにルーミアだった。
口元に血を付け、服の白い部分にも血を付け人の手に似た物に噛り付いている。
眼は赤く光り幽鬼のように体を左右に揺らしながら近づいて来る。
「貴方は」
スッとルーミアは姿を消す。
「食べても良い」
再び現れるとルーミアは目の前にいた。
そしてまたも姿を消してしまう。
「人類？」
背後からルーミアの声が聞こえたので瞬時に後ろを向く。
ルーミアだいつもと変わらない姿だが性格が何故か変貌している。

「ルーミア、如何したんだ、人喰い妖怪の悪名は一年ほど前に無くなったんじゃ」
ハッと晴輝は思いだした。
ルーミアが人喰い妖怪として恐れられていたのは一年ほど前の話。
以前ルーミアと話をしている際に少しだけ聞いた。

『俺がお前を救った？』
『覚えてないのか？』
『身に覚えがねぇよ、一年前って言ったら俺まだ来てないもからな』

そんな会話をしていたような気がする。
この会話から導き出せるのは仮説だがここは一年前で俺はここでルーミアを救ったと言う事だ。
「クソッ！」
そのまま全力疾走で逃げるが今回のルーミアは最初に会った時とは違う。
木を蹴ってすごい勢いで追い駆けてくる。
「如何したらいい」
翼は生えない状態で妖怪相手に体力勝負なんて出来やしない。
「何かないか」
そう言ってポケットに手を突っ込む。
「ん、これつて」
手につかんだ物こそこの窮地を抜け出す切り札。
足を掴まれた晴輝はそのまま態勢を崩してこける。
「くそっ」
そう言って仰向けになると両手をガッチリとルーミアが掴み、そのまま顔を近づける。
「いただきま……」

「待て！」
頭に噛みつこうとするルーミアの動きが止まる。
「命乞いなら間に合ってるぞ」
「俺なんかよりもっと美味い物食わしてやるから」
そう言って手の平を広げる。
「これは何だ？」
「飴玉って言って甘いんだ」
ルーミアは俺から離れ飴玉を掴む。
飴玉の袋を破いて飴玉を口に放り込む。
「噛み砕くなよ」
そう言うと飴玉を口内で転がし始める。
「甘いな」
ルーミアは晴輝から気を逸らしたので今のうちに逃げようと後ろを振り返った。
「逃げるな」
そう言われてルーミアの方を向く。
「もう一個」
そう言われてまたも飴玉を出す。
「ない」
そう言うとルーミアは涎を垂らしてこっちを見る。
「待て待て、美味い物を食った後に不味い物を食うのはおかしいだろ」
「ならもう一個」
ため息を吐き頭を掻く。
「人里ならあるかもしれないからちょっと行ってくるわ」
「逃げるから駄目だ」
「なら近くまで一緒について来い」
とは言ったもののルーミアが人里に行くと確実に慧音さんに退治される。
そう思いルーミアを妖怪の森の近くに待機させて人里まで駆けて

行った。

48 ―過去は常に変わらずそこにある（後書き）

主「何でこんな事になったのかはまだ不明。さぁ鬼巫女霊夢登場はもうすぐだ！」

「感想よろしくお願いします」

49 一時は狂うが未来に害なし

徒歩なので二十分ほど経ったが人里には何とかこれたが、皆の視線が痛い。
まぁこんな仮面なのだから仕方ないだろう。
「すいません、ここの飴を全部」
財布から金を出そうとすると鍋と野菜が視界に入る。
「出来ればそれとそれとそれも」
いろんなものに指を刺す。そうめん、麺つゆに夏野菜と鍋。
そう言って風呂敷に包んでもらって荷物を手に入れる。
「あ、慧音さんだ」
途中、慧音さんを見かけるが声はかけない。
ここでは正体を明かしてはいけない様な気がしたからだ。
「ちょっと待てくれ、そこの……仮面君」
仮面君とは多分……絶対に俺の事だろう。
「はい」
少し声を高めて喋る。
「君から妖怪の匂いがするが何者だ？名を名乗れ」
警戒しているのだろう。
見知らぬ妖怪が里に下りていたら誰でも警戒するだろう。
「マ、マスク・ザ・ドラゴン、俺は妖怪じゃない、人間だ」
咄嗟に思いついたのがどこぞのプロレスラーみたいな名前だ。
キン●クマンとかタ●ガーマスク辺りの。
「ドラゴン君、ではなぜ君は妖怪の匂いがするかのかな？」
さっきまでルーミアと居ました、と言えばた絶対にやられるだろう。
そんな事を考えていると頭にあの言葉が響く。
『俺がルーミアを助けた』と言う言葉を実行したいと思った。
「実は、人喰い妖怪に襲われたんだ」

「何、ルーミアにか！」
喰いつきはＯＫだな。
「ああ、でも偶々持ち合せてた飴玉を渡して交渉したら普通に帰してくれたよ、アンタも森に行く時は飴を沢山持って行くと良い」
「ああ、分かった。他の皆にもそう伝えておくよ」
計画通り事は進んだ。
飴さえ持っていれば助かると言うこの教えが皆に広まれば大抵の奴らは森に行く時に飴を持つはず。
後はルーミアにこの事を教えてやれば良い。
「それじゃあ気を付けるんだぞ」
慧音さんはそのまま寺子屋へと行ってしまった。

魔法の森へと戻り火を起こす。
能力は完全には消えていなかったらしく指を鳴らすと指先から炎、氷、電、水の属性の小さな球体が出た。
火の球体をかき集めた枝に近づけると火が燃え移り調理が出来るようになった。
「とりあえずはそうめんを茹でてっと」
ルーミアが何をしているのかと興味を持って近づいてきた。
とりあえずルーミアの血塗れの服を何とかしたい。
「ルーミア、その服何とかしたいから一旦脱いでくれ」
ルーミアに風呂敷を手渡して晴輝は反対方向を向く。
「分かった」
そう言って服を脱ぎだす。
「ほら、脱いだぞ」
脱いだ服を受け取り近くの川で洗濯を始める。
「血がすげぇ染みついてる。血の臭いも、こりゃ悪臭だな」
力を込めて服を洗う。
その現場をルーミアはただ見ているだけだった。

「とりあえずは良し」
食後にゆっくりと片付けを始める。
ルーミアの洗った服を焚火で乾かしていた。
「ルーミア、人間なんか食って美味しいか？」
ルーミアは首を横に振る。
「なら何で食べる」
「お腹が空くから」
分かり易い回答だ。
腹が空けば何かを食べる。その食べ物が人間だっただけなのだから。
「人間は食べちゃダメだ」
「人喰い妖怪に人を食うなって変わってるな」
確かにそうかもしれない。
肉食動物に肉を食うなと言ってるのも同然。
「なら人間に近づいてお腹空いたって言いな、そうすれば何かくれるか逃げるから、人間は喰ったらダメだ」
ルーミアの服を触り乾いたか如何か確かめる。
「ほら乾いたぞ」
ルーミアに服を渡し再度後ろを向く。
「着たぞー」
振り返るとルーミアが鍋を木の棒で突いていた。
「もう少し女の子らしさを付けろよ」
何故、こんな事になったんだろうか、そう思ってしまう。
本来あの決戦で俺は死んだはず、なのに何故か一年前の世界に来ている。
「如何いう事だろうな」
上を見上げる。
「ほらっ」

ルーミアは何かを投げてきた。
投げた物を受け取ると何かの手紙だ。
ルーミアと会う前にもこんな手紙を貰った事を思い出す。
「なになに？『第一関門クリア、第二関門へ博霊神社へ正体はばらすな』」
関門と言う言葉に引っかかる。
これは何かの試練なのかと思い手紙を調べる。
その裏に小さく何かが書かれていた。
『ＰＳ・飛行能力は戻ったぞ』
「ＰＳ？」
明らかに幻想郷の人間じゃない。
俺と同じ外来人かと疑問を思いつつも手紙をポケットに入れる、
「もう行くのか？」
「ああ、他にやる事が出来たんだ」
翼を広げて飛べるか確認する。
「また、会えるか？」
「そうだな、十ヶ月後にこの森でマスクを被ってない俺がいる。格好は同じ、記憶は無いと思う。もしも見つけてやったら怖い顔で追い駆けてやりな」
荷物を包み翼を羽ばたかせる。
「じゃあな、また十ヶ月後この森で」
そう言って手を振るとルーミアも手を振って返す。
「まったく、自分で自分の恐怖の鬼ごっこの約束するなんてあの時は分かんなかっただろうな」
可笑しく笑い徐々に加速を始める。
「さぁ、次は腋巫女だ」

49　一時は狂うが未来に害なし（後書き）

感想よろしくお願いします。

５０ー鬼巫女ガチギ霊夢（前書き）

修羅場とかはまだ少し先です。
面白くなくてごめんなさい。

50 ― 鬼巫女ガチギ霊夢

さっきまで晴れてたとは思えない曇り空の下、羽を纏う冷気で体を冷やしながら博霊神社上空に辿り着いた。
いつもの様に参拝客の姿は見えない。
だが何故か箒で掃除している巫女の姿もない。
「如何したんだろ」
そのまま下に降りて見ると神社は変わり果てた姿になっていた。
賽銭箱は破壊され、部屋の中もぐちゃぐちゃ、その上地面が抉られている。
「何かが暴れたとしか考えられないな」
神社の奥を進むと巫女服の女性を見つける。
姿、格好からして霊夢だが何か様子がおかしい。
「あら、参拝客かしら？」
眼が赤く染まり、殺気の様な物を放っていた。
「あの、これは如何したんですか？」
「これ、これねぇ、別に何でもないわ」
何でもないって事は無い。
明らか何か事件が起こった後だ、今にもコ●ン君がダイブしてきてもおかしくないくらいだ。
「貴方、人間じゃないわね、妖怪？」
「まぁ、半人間妖怪って所かな」
「妖怪、なら退治しないと」
目の前に居た霊夢が何の前触れもなく消えた。
だが殺気は凄く身近から感じる。
その瞬間視界がぐらりと揺らぐ。
強い衝撃が脊髄を命中しそのまま前に倒れ込む。
「如何したの？こんなあっさりと」
背中に命中したのは弾幕でも鈍器でもない。

片足で何かを蹴り上げた様に
『足』。
霊夢の蹴りが晴輝の背中を抉ったのだ。
その一撃は岩より重く刀より鋭い、まるで足自体が一つの武器の様だ。
「流石は博霊の巫女様とでも言ったら許してくれるか？」
「今、とっても虫の居所が悪いのよ」
そう言って陰陽玉を八つほど霊夢の周りに出現させる。
三十？ほど宙に浮きお札を天に翳す。
「夢想天……」
「魔符『スダーダストレヴァリエ』！」
カラフルな星の形の弾幕が降り注ぐ。
「霊夢、神社を破壊した人物が分かったぜ！」
この弾幕を出した張本人が空から降りてくる。
箒から降りて霊夢の耳に何か呟いている。
「……魔理沙」
「魔理沙、ならコイツの相手をしてて、私はその犯人とやらをグチャグチャにしてくるから」
霊夢は陰陽玉を片付けてそのまま飛んで行ってしまった。
「アンタが相手か魔法使いさん」
「残念だが今は構ってられないぜ」
そう言って魔理沙も箒に跨り飛び立とうとする。
「乗りかかった船だ、俺も行こう」
白い翼を広げて飛行の準備をする。
「お前、普通の人間か？」
「アンタには言われたくなかった」
魔法を使えている時点ですでに魔理沙もこっちの世界の住人なのだから。

５０ー鬼巫女ガチギ霊夢（後書き）

感想よろしくお願いします。

51 ― 紅魔館の危機（前書き）

過去編の最終回

51ー紅魔館の危機

紅魔館、真紅の館。
館の色はこれまで紅魔館の主、レミリアに食べられた物の血や、侵入者の血が壁に滲んでいると言う噂を聞いた事がある。
だがそんな館も今はボロボロである。
その原因が……。
「姉妹喧嘩？」
「フランっていうのがここ最近まで閉じ込められていてな、館の中なら許してたレミリアに外に出たいって言ったらこのザマだぜ」
ボロボロになってしまった館の上で武器を持った二人が戦っていた。
「なら紅魔館の他の住人が止めればいいじゃないか」
「ああ、そうなんだが止めに入った門番とメイドはレミリアに一喝、もう二人は図書館を守っていて他の妖精メイドは無力ってわけだぜ」
「でも、あの巫女さんとこの件は如何いう関係が？」
「ああ、飛んでいた二人の弾幕の流れ弾が博霊神社に被弾、霊夢はブチギレ」
「分かり易いな」
紅魔館の上で戦っている二人に鬼巫女も参上して大乱闘へと発展する。
「ヤバい逃げるぞ！」
魔理沙が急に逃げ出した。
魔理沙が指さす方を見ると無数のお札がこっちに向かって飛んできている。
「何だよアレ！」
「夢想天生、霊夢の最強の大技でホーミング付きのお札が敵向かって飛んで行くぜ」
「俺らも敵ってことか！？」

「そう言う事だ！」
二人で力を合わせてもこれは無理がある。
「とりあえずあの2人をどうにかしないとな」
「私が何とかするからアンタは早く逃げな」
八卦炉を持って魔理沙が弾幕の嵐の中を飛んで行く。
「くそっ、スペカも武器もない俺に何が出来るんだよ！」
魔理沙が一人で紅魔館の危機（ここで恩を売っておけば後々本を借り（パクリ）易くなると思ったから）に自ら向かって言ったが晴輝には四つの武器もスペカも持っていない。
ふとあの謎の手紙が思い浮かぶ。
「この関門ってのをクリアしたら飛べるようになった、って事は」
大急ぎで博霊神社へと飛んで行く。

「とりあえずは手当たり次第に探すか」
ボロボロの博霊神社に入り部屋の中を物色する。
別に金品を盗むわけではない。二つ目の封筒の答え、憶測だが過去がこの状況を何とかしてもらいと死んだ俺に助けを求めてきたのではないかと思うのだ。
神も住む幻想郷、時を操る神がいてもおかしくは無い。
「封筒を見つけてさっさと闇魔様に裁かれに行きますか」
そう言って博霊神社に乗り込んだ。

「うお、同じ服が何着も」
タンスを開けると同じ服がたくさん入ってる。

「これは？萃香だ」
眼を回した萃香を発掘した。

「これは……家計簿、ワーオ、赤字だらけ～」
見なかった事にしよう。

「まったく、無い！」
まさか、読みが外れたと言うのか。
賽銭箱の残骸に腰を下ろしてため息を吐く。
「クソ、一時間は経ったか」
こうしてる間にも今あの2人が戦っていると思うと自分はどれだけ無力なのかを思い知らされる。
「こうなったらスペカなしで」
バキッと言う音が尻の下から聞こえてくる。
「ヤベっ何か折れたか？」
賽銭箱の残骸から降りて座っていた場所を見てみる。
何かの小包がある。
「何だこれ？」

魔理沙は三人の戦いを止めようと乱戦の中一人で戦っていたが願い届かず、惜しくも早々とリタイアしてしまった。
「お姉さま、如何したら分かってくれるの！？」
「フラン、少し調子に乗り過ぎよ！私は館内は許したけど外何てまだ早いわ！」
「まずアンタ達は私の神社の弁償をしなさい！」
「禁忌『レーヴァテイン』！」
「神愴『スピア・ザ・グングニル』！」
「最大出力夢想天生！」
三人がスペカを取り出して一斉に叫ぶ。

三つの攻撃が互いに相殺して消える。
三人とも限界が近く、息を切らしている。
「そこまでにしときな」
晴輝の声に全員が振り向いた。
「なぁ、皆少し頭を冷やそうな」
新たに一人加わって大乱闘となるはずが何と新参者が他の三人を蹴散らせたのだ。
紅魔館のほとんどが半壊したこの件は幻想郷でとても有名になった。
そして仮面の男も幻想郷で一時期だけ噂になった。

51 ― 紅魔館の危機（後書き）

すいませんですが原作ストック切れのため一旦休暇をもらいます。
今週の金曜日からまた再開させていただきます。
急ですいません。
次回は地霊殿編です。
感想よろしくお願いします。

52 ― 地霊殿は下へそのまま真っ直ぐ（前書き）

EXボスがててくるよ。

52 ー地霊殿は下へそのまま真っ直ぐ

皆さん、お久しぶり神田晴輝です。
作者のストック切れ事情や過去編があまりにもカオスっぽかったので今から一発芸をします。
「助けてくださぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！」
如何でしょうか笑って貰えたでしょうか？
「笑えねぇよ！オイ作者、何で俺になって勝手に謝罪してんの！？助けろよ！」
現在、俺、神田晴輝は如何いう事情か奈落の底へと落とされた。
一年後の世界、まぁ元の世界、現在に戻った俺は現在、下へと落ちていた。
幻想郷にはここまで深い所があったのかと言うぐらい深くそこがまだ見えない。
「くそ、力が使えたら羽生やして飛べるってのに」
龍の力の一つ、まぁ羽を生やすだけだが武器も能力も全てスペルカードになり体には宿っていない。
だがスペカに能力全てを移植した途端に能力の反動は無くなったが常時使えなくなったので便利とも不便ともコメントできない。
「とりあえず体を横にして落ちる速度を和らげないとな」
体を横にしてみるが風が半端ない。
「そうだ伝説の配管工の様に壁キックととかで上に行けるのでは！」
そう言ってとりあえず壁に足を近づける。
「どりゃぁぁぁぁぁ！！」
足が壁に触れるが足を壁に持って行かれそうになったので中止。
「どうすりや良いんだよ」
ただ必死に空中でもがくだけで何も出来ない。
もう底なのか明かりの様な物が視界に入る。
「クソッ！」

『死』と言う言葉がやまびこの様に耳元で聞こえてくる。
腹を括って眼を瞑る。
「お兄さん助けてあげようか？」
絶望に満ちた心を浄化してくれたのは女性の一言。
救いの女神、そう思い辺りを見渡すが誰もいない。
死に向かう俺に性格の悪い死神の吐いた幻聴だったのだろうと、諦めかける。
「ここだよお兄さん」
声の主は身近にいた。
そう背中にくっ付いていたのだ。
背中に体が触れている時点で気付くはずなのだがしかし彼女は背中にくっ付いていた。
フリルの沢山ある服に白銀の髪を風に靡かせ無邪気な笑顔でこっちを見ていた。
だが彼女の外見にもう一つ気になる所があった。
胸のあたりにある青い球体、まるで閉じた瞳を思わせるそれが気になって仕方がない。
「ああ、助けてほしい」
「お兄さん名前は？」
「神田、神田晴輝」
「私は変わらずお兄さんって呼ぶけど構わないよね」
「ＯＫ、だから早くヘルプミー！」
彼女は俺の前に出てきてそのまま抱き付く様に腕をまわす。
彼女の浮遊の能力の御蔭で落下速度は弱まっていきそのままゆっくりと降りて行った。

「懐かしい大地が見える」
あれから抱き合ったまま下に行くととうとう地面が見えるようになった。

ほんの数分の事がまるで数年も前の様に感じられる。
臨死体験をした人間は生きてる素晴らしさを実感すると言うのは本当だったらしい。
「お兄さん、感動してる？」
「してるしてる」
ガッツポーズを決めて眼から涙が零れる姿を少女は面白そうに笑う。
「君もありがとう、助けてくれて」
「自己紹介がまだだったね私は古明地こいし」
「こいしちゃんありがとう」
改めてお礼お言い頭を撫でる。
「そう言えばここは何処なんだ？」
「ここはね、旧都」
「旧都？」
「地上で忘れ去られた者、自らの力を恐れた者、嫌った者が集まる地下世界。旧都、前の名は……」
こいしと俺が地面に立つとこいしがタッタッタッと前に出てこっちを振り返り口を開いた。
「旧地獄」
その言葉は俺の大地への感動を全て消し去り悪寒を残した。
「よろしくね、お兄さん」

52ー地霊殿は下へそのまま真っ直ぐ（後書き）

どうでもいいぜ☆雑談コーナー

主「どうも久しぶりです、作者兼うｐ主の辻虎です、暑中お見舞いもうしあげやす」

主「雑談コーナーではヒマつぶしの雑談を語るだけですので飛ばしてもらっても構いません」

雑談開始

主「それなんですがね、この作品をやる前に実はこの作品の兄貴的な作品があるんですよ、『自重しろ俺！紅魔館編』と言って・微エロ・これマジでシちゃってるんじゃね？・マジやばいって！等のエロヤバいタグがたくさん入ってくる紅魔館のある執事のお話なんです」

主「若気の至りってやつですかねぇ。まぁ別に自分的には連載しちゃっても良いかなテヘっ程度に思ってるんですけど、まぁまだ東方に目覚めて浅い時の作品何でちょっと不備な面もあるんですけどもね、まぁ色々と悩んでいるわけですよ」

主「感想よろしくお願いします」

53 ー頭上注意、危険人物注意（前書き）

？ｃａｕｔｉｏｎ？　？ｃａｕｔｉｏｎ？

今回出てくるヤマメ、キスメさんは
たぶん皆さんの予想している性格と違われるかもしれません。
ご注意ください。
どうしてこうなったと思った人は作品の下の雑談コーナーをご覧ください。

53 ー頭上注意、危険人物注意

こいしちゃんはそのままどっかへ行ってしまった。
こいしちゃんの書いたらしきメモがポケットに入っていたのでそのメモに従って進もうと思う。
スペカが無い現在、落ちてきたあの穴を登るなんてしたくはないから。
まったく抜け目のない子だ。
メモにはとある場所への行き方が記されている。
「前に進みますか」
当ても何もない晴輝は渡されたメモを見ながら歩き始めた。
「でも妖怪だらけだな」
四方八方何処を見ても妖怪だらけ。
目玉が体中にある奴や完全に人に化けている者までいる。
もしかすると妖怪横丁なのかもしれない。
「まぁ、とりあえずはこの地図の場所に行くしかないか」
メモの指示に従って数分歩いて目的地に着いたが誰もいないし何かある様な様子もしない。
「危なーい」
突然の叫びに驚き辺りを見渡す。
後方から桶の様な物が飛んでくる。
少し腰を曲げて桶をかわす。
完璧だと思い態勢を直した晴輝に
「危なーい」
頭上から桶が降ってきた。
頭部に強打した晴輝は不意の一撃のあまりの痛さに悶絶する事を忘れてその場に倒れ込んだ。

「何が……」
眼を覚ました時に視界には二人の女性が入っていた。
桶に半身を入れた緑髪の幼女と金髪に黒いリボンの少女だ。
「大丈夫ですか？」
緑髪の子が心配そうな顔をして言った。
「あ～、『確か7時ダヨ、全員集合！』でしたっけ？」
「違います、8時です。でもその様子だと大丈夫そうですね」
「まだ少しクラクラするけど大丈夫」
眼を押さえて。
「まさか、追加攻撃があるなんて……」
と言うか横から来た桶をかわしてなぜ頭上から降ってくるのだろうか？
「ほんとに災難だったね」
人事の様に流す金髪の少女はそっと頭を撫でてくれる。
そしてもう一つの問題に気付く。
「これは……膝枕？」
「そうだよ、如何？」
「寝袋で寝るよりぐっすり出来そう」
「ならぐっすり寝ても良いよ」
ああ、頭部を撫でられ、柔らかい膝の上、何かだんだん眠くなって……。
「じっくりと犯してあげる」
「いえ、初対面の人の膝で寝るとかそんな事はしませんよ」
今、何て言ったの？何を言ったの？明らか俺が（いろんな意味で）食べられる的な事を口走って無かった？
気のせいだ、心の迷いだ、何もない、そうだ聞かなかった事にしよう。
「じっくりねっぷり可愛がってあげようと思ったのに」
「ねぇ、ねっぷりって何？何の擬音？何の効果音？」
「いつもの事なので気にしないでください」

緑髪の幼女はキスメちゃんで、
この１８タグを付けてもいい金髪の人が黒谷ヤマメ。
とりあえずヤマメに（いろんな意味で）食べられそうになったが、
まぁこの子がこいしちゃんの連れなのかもしれないと話をしてみると、
「とりあえず地霊殿だったらこっちだよ」
ビンゴ。
そう言ってヤマメに腕を引っ張られる。
「人気のない所に行きたい何て分かってるね～」
「別にやましい事を考えてるわけじゃない」
「ヤマメ自重してよ」
「はーい」
どちらかと言うとキスメが妹で姉がヤマメの様な気がするのだが全く持って立場が逆の様だ。
「ここが地霊殿です」
大きな建物の前に見知っている人物が立っている。
「お兄さん、早かったね。お姉ちゃんに叱られるから先に来てたんだ」
こいしが手を振ってやってきた。
「こいしちゃんこいしちゃん」
近づいてきたこいしにヤマメが話しかける。
「彼を頂戴」
肩をがっしりと掴み言った。
「ダーメ」
そう言ってこいしはするりと軽く体を捻ってホールドを解除する。
そして晴輝と腕を組みそのまま館内へと入って行った。
「ああ、アレ欲しい、外見も可愛いし何か虐めがいがあると言うか私の蜘蛛の糸で拘束プレイってのも乙よね」

じゅるりと涎を垂らすヤマメに対して、
「もうちょい自重してよヤマメ」
と落ち着いた突っ込みで返すキスメであった。

53 ー頭上注意、危険人物注意（後書き）

主の雑談コーナーキャラ紹介編

主「どうも辻虎です、何故キスメ、ヤマメがあんな性格かと言うと」
一週間近く前、友人とお洒落なバー（レストランのドリンクバー）でノンアルコールカクテル（この年にして色んなジュースを混じ合わせている）を飲みあっていた時の話である。
友「何か過去編がカオスになりそうだな」
主「あ、バレた？テヘっ」
的な会話をしていて咄嗟に友が口を開いた。
友「キスメをクーデレ、ヤマメを微エロキャラにするってどう？」
主「それやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

主「的な会話をして出来上がったのが『（微）エロいぜヤマメさーん』である、実際はそんな経験値など全然ないので攻めると弱い感じてます。
感想お待ちしております」

５４ー地霊殿の主（前書き）

ちょっと両親の実家に帰省、感想の返答は明日になります。

54 ― 地霊殿の主

こいしちゃんに案内されてそのまま奥へと進むと机に突っ伏して寝ている少女が居た。
薄い紫色の髪、こいしちゃんの衣装に後れを取らない不思議な格好に体格、まぁ姉妹なのだから姿や服装が同じでも分かる気がする。
だが彼女もあの目玉の様に物を持っていた。色は赤、目玉と体を繋ぐ配線？は直流のこいしちゃんと違い複数に枝分かれしていて絡まったら大変だろうな等の事を思ってしまう。
「別に絡まっても大丈夫です、慣れたましたから」
ムクリと体を起こして眼を擦る。
「こいし、彼は？」
さとりちゃんは俺を一度見て視線をこいしちゃんへと移す。
この姉妹、何処となくあの吸血鬼姉妹に似ているのは気のせいなのだろうか。
妹に手を焼く姉、そして姉の苦労を知らない妹、と言う所だ。
そして推測だが両者ともに妹を愛しているのだろう。
「前半は正解です。後半は不正解ですが」
「っ！」
「お姉ちゃんは人の心を読む事が出来るんだよ」
「ただ一人、妹の事は理解できないですが」
「それでね、お姉ちゃんこの人はお晴（はる）って言うんだけど飼っていい？」
「良いわよ」
「ちょっと待て、何だって、お晴？飼う？俺は捨てられた子犬か？」
機嫌を損ねたと思いこいしちゃんが俺の耳元で囁く。
「ごめんね、今人手が足りないから悪いけど仕事手伝ってくれないかな？」
「そう言うのはもう少し早く言ってくれよ、て言うかアレか、ここ

では従者はペット扱いなのか？」
こいしちゃんはこくりと頷く。
「お兄さんなら適任だと思うんだ」
まぁスペカが無い今の現状では飛んで帰ることも不可能、ここもそこそこ広いし、まぁ一週間、二週間は大丈夫だろう。
「まぁ仕方ない、手伝おう」
仕方ない、ここは了承しておこう。
「全て聞こえてるわよ？」
さとりちゃんが遠くから見つめる。
「そう言えば貴方は何の動物なのかしら？」
さとりちゃんは徐に質問を投げた。
龍と言えば簡単だ、だがあくまで化身、龍とは少し違う存在と思うのでこう答えておこう。
「蜥蜴（とかげ）」
「蜥蜴……また一段と賑やかになりそうね、それと主従の関係を忘れないでね、お晴」

５４－地霊殿の主（後書き）

雑談コーナー

主「コミケ行てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

主「いきなり叫んですいません、コミケ二日目、まぁ色々と買いあさりたいのですが出身は和歌山、場所は東京、予算７０００円程度と行けた所で金がねぇ、てか行った事がないのですげぇ不安。大人になったら行きたいと思います」

主「大人になったら名古屋に住みたいな、東方名華祭があるし……
…」

５５ー地霊殿での奮闘　前編

地霊殿に来て早五日、仕事を任され四日になる。
地霊温泉郷、そこが職場である。
文字どおり『銭湯』の事だ。
週五日、休日は土日で特に不満などは無い。
地霊温泉郷の番頭に任命された俺の仕事は管理と清掃、その他にお客を喜ばせるサービス提供等も仕事の一つだが二つ問題がある。
まず一つここの銭湯……男風呂が無いのだ。
もう一つの表現がある。
「女風呂しか無いんだよなここ」
男風呂建設の費用、土地を大半を女風呂に注ぎ込み施設等の設備費に全額投資、あと男性客より女性客の方が来ると思われるからである。
まぁ、別にここまでは特に問題は無い。
俺の仕事は管理、清掃であってボイラー室を調整したり店を閉めた後に掃除をするだけだ。
ここからが二つ目の問題。
二日前、客足はそこそこだったのでこいし様がこんなチラシを旧都全域にばら撒いたのだ。
『カッコいいお兄さんがお風呂上りにマッサージしてくれるよ』
「こいし様……」
これのお蔭で俺は女体を間近で御観覧出来ると言う特権を手に入れたのだが、もしもお客に浴場で欲情してみろ俺はこいし様のお仕置きを喰らう事になる。
余談だがさとり様のペットの猫が仕事中に同僚の鴉に発情してお仕置きを喰らったとか如何とか、亀甲縛りでトラウマを暴露されて精神が死滅しかけたと聞いたことがある。
「絶対に失敗してはいけない」

もしもこの事が地上の連中に知れたら俺は消炭になるだろう。
「その歳で尻に敷かれていると大変ね」
背後からの声に反応して振り向くとさとり様が立っていた。
「さとり様、如何したんですか？」
「ええ、少し顔を出しに来ただけよ、頑張っているわね」
自由翻弄としているこいし様とは別にさとり様は本当に優しい。
「まぁ、許してあげてこいしの行動は気紛れだから」
「理解してますよ」
申し訳ない様な顔をするさとり様に笑顔で返す。
「それじゃあ、貴方の事は出来るだけ広めないわ、上に戻った時に大変でしょ」
「まぁ、別に嫁や恋人が居る訳じゃないんですけどね」
ただこの事がバレると何故か俺を処刑しようとする魔法使いやら不老不死やら先生やらが居るだけだから、アレ視界がぼやけてきたぞ。
「……貴方も苦労人なのね」
「……はい」
涙をハンカチで拭ってくれるさとり様の親切が心に沁みる。
「それとあと一つ、明日にでも新聞記者がここへ来るのだけれど」
「良し、さとり様。こいし様には俺が死んだ事を黙っててくださいね」
「止めなさい、何を唐突に、ちょ、ロープで首を絞めようとしない！」
「放してください！これは罠です！」
もうあの人しか思い浮かばない。脳内で「あややややや」って言ってる。シャッター切ってるのが見えてくる！
「文にバレたら俺は頭突かれ、燃やされ、マスパされる！ああ、霊夢にあの時の事（キス）を聞く前に死ぬのはゴメンだ！」
「落ち着きなさい！ああ、いろんな感情が私の中に、落ち着きなさい！」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」
「くっ、一気に感情が黒く染まって行く」
そんなこんなで今日の仕事は捗らなかった。

取材当日、遠足の前日にはしゃぎ過ぎて眠れなかった子供の如く、まぁウキウキと言うよりはガクガクブルブルだが、色々あって眠れなかった。
「あやや、ここの新しいサービスのイケメンのマッサージですがそれほどカッコいいのですか？」
「まぁ、こいしが勝手にしたサービスだから見て判断して頂かないと……」
そんなこんなで文が直ぐそこまで来ているのが分かる。
「ええ、それで彼がここの番頭のお晴……よ」
さとりは硬直して動かない。まぁそれも当然だろう。バレない為には顔を隠す必要がある。
「友の為ならこの身を捨てて盾となり、主の為なら自分の命にゃあ惜しが無く使う、地獄の業火をその身に浴びて、今日も旧都の地を這う蜥蜴。どうもマスク・ザ・ドラゴンです」
龍と描かれた仮面を被り真っ白の学ランを赤く染めて後ろに温泉魂と直筆、さらにズボンをズタズタに引き裂いてボロボロのダメージジーンズ風。
セリフは必死に徹夜で考えた。
「え、えっと、これはこれで……面白い方ですね」
（すいません、さとり様、ここでバレたら俺死んじゃうんでこの格好です。お願いだから許して）
（まぁ、致し方ありませんですがお客様に失礼な事だけは止めてくださいね）
第三の目（サードアイ）とアイコンタクトをして説明を終わらせる。

「とりあえず、まぁ温泉の方を先に調査しましょう」
助かったと心撫で下ろす晴輝をさとりは耳打ちをする。
「あくまでその場しのぎだから気を付けてね」

５５ー地霊殿での奮闘　前編（後書き）

雑談

主「以外に連続していくとネタが尽きてくる、夏休みの最後を宿題にまわしたい」

５６ー地霊殿での奮闘　後篇（前書き）

主の真面目な話が最後にあります。

56－地霊殿での奮闘　後篇

女風呂、男子禁制の世界。汗臭い青春のたった一度の楽園（オアシス）。
高校生の頃、クラスメイトがバカやって退学した話があった。
何でも数人の罪を自分一人で背負い一人自首した男。
その男が生活指導の教師に説教されている時、彼はこう答えた。
『目の前に女風呂（楽園）があったからさ』
隊長の最後の言葉を聞いた副隊長はその言葉を全校集会で話した。
俺はそこで流したのだ。
涙を……そんな馬鹿げた理由で人生を棒に振った男の勇姿に俺は、全校生徒の男子全員が涙を流した。
その後、彼は忽然と姿を消したのだ。
だが忘れてはいけない。
立派な英雄の名前を……彼の名は
「何、現実逃避しているのかしら？」
はっと気が付くとドアの前で涙を流していた。
スタッフ専用の入り口を目の前にドアノブを握りしめた晴輝は過去の英雄の事を思い出していた。
「ああ、英雄の伝説を少し見ていたよ」
「ただの覗きじゃない」
まぁ確かに言われてみればそうだ。
「とりあえず、そこで文さんが待ってるわよ」
ドアを開けようとするがバレた時の恐怖が体を硬直させる。
「行ってきます」
ガチャリとドアを開けた。
視界に入ってきたのは人一人がギリギリ寝れる小さなベットに俯けで寝ている文である。
体をタオルで隠しているが汗の所為でボディラインがハッキリと分かる。

「如何でした湯加減は？」
とりあえず場を濁す為に日常的な会話を持ちだす。
「最高でしたよ、えっと……」
「龍で良いですよ」
「龍さん、ここの管理は大変じゃないんですか？」
「ええ、でも出来ない事は無いですね」
順調に話が載ってきた所でマッサージを始める。
「如何ですか？」
まずは腰、親指でツボを刺激して行く。
「あ～効きますねぇ」
徐々に指を上へ持っていく。
「如何ですか？」
「あー、気持ち良い」
気に入ってくれたみたいだ。
「文さんは仕事は楽しいですか？」
「楽しいですよ、他人のプライベートほど楽しい物はありませんからね」
考えてる事黒いな。
「そう言えば好きな人とか居るんですか？」
「……」
「あ、すいません何か嫌な事思い出させちゃいましたか？」
「いえ、良いんですよ。もう終わった事ですから」
何やら少し暗い顔で話を進める文。
「少しだけで良いから吐いてみませんか？楽になりますよ」
「……実はですね、もう一週間ほど前何ですけど突然友人が消えてしまいましてね、捜索は打ち切られて彼の消息も不明、他の皆は死んだと噂してますが何処かで生きていると思うんですよ」
「好きだったんですか？」
「ええ、大好きでした」
「もしも、そんな人を見かけたら教えますよ、外見は？」

「身長は龍さんぐらいで体格も同じぐらい、黒いズボンに白いシャツを着た魔法使いの助手がフレーズの……」
「……ん？」
何だろう何処かで聞いた事のある特徴だ。
「もしかして、名前は神田春輝って言うんじゃ……」
「見たんですか！」
「あ、いえ、風の噂で地上でそんな人が行方不明になったって聞いただけです、ちょっと失礼しますね」
出口のドアを開けて少し歩いて行く。
そしてスタッフ専用のトイレに入る。
「俺かァァァァァァァァァァ！」
大声で叫ぶ。
「まさかの俺！えっ、ちょ、ハズイ、めっさハズイ！」
目の前で告白されたら誰もが驚くであろう。
「マジか、如何なるんだ俺、如何なるんだよ！」
十分ほどトイレの中で自分と口論を交わすが答えにたどり着かなかった。

５６ー地霊殿での奮闘　後篇（後書き）

主「えっと、つもりに積もった夏休みの宿題をやったり、栄喜を養うために夏休み終わりまで休載とします。夏休みの終わった皆さんも終わってない皆さんも残りの夏休み存分にお使いください。あと夏休みが終わると週６で投稿できなくなります。ごめんなさい。次回は九月の初めです」

５７ 旧都の愉快で異常な仲間達（前書き）

お久しぶりです、夏休みいかがお過ごしになりましたか？
自分も今日から学校です。
でも……夏休みの宿題が終わってないＺＥ☆
ヤバッ、どうしよう。
最後に大事なお話がありますのでよろしくお願いします。

57 ― 旧都の愉快で異常な仲間達

休日はすることが決まっている。
何処かに行ってしまったスペルカードの回収である。
スペルカードは使用すれば何も書かれてない一枚の紙切れとなり戦闘終了後に色が戻る。
だが無くしてしまった物は探さないといけない。
「成果はゼロ」
旧都もそこそこ広い為にまだ見ていない所がある。
「はぁ～」
ため息を吐けば何とかなるとは思ってない、それでもため息は口から零れるのだ。
前日の文の告白に精神は掻き乱されてしまい次に会った時ギクシャクしちゃいそうだからだ。
「如何したんだ、ため息何か吐いちゃって」
背後からの声に振り向くと杯を片手に立っている金髪の女性が居る。
身長は晴輝よりも数？ほど高く、頭には赤い角を生やし、体操着と紅白カラーのロングスカート、大きめの胸をぶら下げ、半分酔っている様な仕草をしている。
「勇儀さん」
星熊勇儀、旧都に住む鬼で一緒に飲み合う仲まで発展し、偶に腕相撲を申し込まれるただ一人の心を許せる友人である。
「ちょっと、複雑な心の心境と言いますか、あまりにも酷な真実と言いますか……」
「ふぅん――なら少し付き合いな」
強引に引っ張られていく晴輝、強力な鬼の力を振りほどく事など出来ないので、諦めて連れ去られる事を決心した。

「こいし、ちょっとここに来なさい」
「何？　お姉ちゃん」
地霊殿のとある一室で古明地姉妹は正座をして話していた。
「あなたの部屋の本から出てきた、コレは何？」
コレと言ってさとりが取りだしたのはスペルカード、だが、それはこいしの物ではない。
ヒラヒラとスペルカードを揺らすさとりだが別に怒りを持っているわけではない。
「これはお晴のスペルカードね」
地霊殿の主、ペットの持っているスペルカードの種類など殆どは知っているが見た事のないカードがここに在れば、それは第三者、地霊殿外部の人間の物だと該当する事など容易いのだ。
「うん、そうだよ」
無邪気に笑うこいし、もしも彼女の心を読める事が可能であらば何を企んでいるか、筒抜けにする事は赤子の手を捻るも同然、だがこいしの活動は無意識での事、何を考えているかなど見当もつかない。
「叶えば良いね」
能力を使ったこいしがさとりの背後を取る。
「一週間だけ待ってあげる。思いだけでも伝えたら？」
「こ、こいし！」
こいしの言っていた事、本当は分かっていたのだ。
清掃と管理をしている彼に何故、マッサージの仕事を追加させたのか、それは誰かさんを囃し立て、告白の時を早める為、地上の存在である彼と一日でも長く、深い濃密な時間を過ごしたい為。
「まったく！　こいしは……自分が恋のキューピットとでも、幻想でも見ているのかしら」
だが彼女も悟っていた。
自分の妹が最初に彼の事を好きになったのだと、能力で心を読め

ずとも、日々の行動が理解できなくても彼女にはこいしが晴輝の事を好きなのが理解できる。
たった一人の姉なのだから。

「ハックション！」
盛大なくしゃみを出した晴輝、体を摩り、風邪かなと自分の事を思う姉妹の意志を簡単に否定してしまう。
「風邪か？　毎晩走り回ってたら、そりゃあ風邪にもなるよ」
杯に零れるほど入った酒を一気に飲み干した勇儀は新しい酒を杯に入れる。
「飲みな、飲みな！　今日は楽しい宴会だ！」
別に今日は宴会ではない、だが、『酒を飲んで騒いだらそれは宴会だ』とか、『毎日が楽しい宴会だ』とか名言チックな言葉を並べた、勇儀の家で数人だけの、小さな飲み会である。
キスメ、ヤマメに尖ったエルフ耳の金髪少女が酒を飲んで、騒いで、踊って、歌ってのどんちゃん騒ぎ、何故だか頬が緩み次第には飲み比べをしてしまう始末。
「よし――、ならばぁ、我輩はこの杯一杯丸々を飲み乾しやぁす！」
ベロンベロンに酔っぱらった晴輝は勇儀さんの杯を奪い、酒を一気に飲み干してしまう。
飲み乾した晴輝を皆がさらに囃し立てる。
「もう一杯行けぇぇぇ！」
「良いれすよ、もう一杯ぐらい行っちゃって！」
「そんなに酒を飲めて……妬ましいわ！」
「あー！　私の酒を飲みやがって！」
顔を真っ赤にした勇儀さんもすっかりと出来上がり、もう収拾がつかなくなってしまった。
「こんの――ヤロー」
勇儀に抱きつかれ身動きが取れなくなる。

「勇儀さん、やらかーい」
体操着の上から伝わってくる何と言えない柔らかさ、それに顔を埋めて如何にかなりそうな晴輝。
「よっしゃあああ！　こうなったらキスしまくってやる！」
もう理性も吹っ飛び晴輝の言った言葉に反応する蜘蛛女が一名。
「ふっふっふっ、その言葉を待っていたのだよ、さぁ、始めよう乱交だ！」
いきなり脱ぎだすヤマメ、それを止めようとせずに自分も桶から出て来るツッコミ担当キスメ。
「ふはは、かかって来い、俺は逃げるぜ！」
酔っていた晴輝、精神の奥底で眠っていた危機感知能力を掘りだし、千鳥足でその場から逃げ足して行った。

５７ ― 旧都の愉快で異常な仲間達（後書き）

次週からの投稿日は月曜、木曜、日曜となっています。
今週は後日曜です。
そしてタグ追加は雑談コーナーにて発表、まぁ、日曜日になればわかりますので
今月もよろしくお願いします。

雑談コーナー

主「お久ーです、夏休みの宿題の終わっていない辻虎と申します、
今回は追加されたタグの話ですが、
今後、ベットの下に本を隠している人なら誰でもわかる展開をするために
Ｒ－１５とＲ－１７．９９を付けましたが、
その瞬間にドンと愛読者が増えたのです（驚き）。
そんなによっきゅーふまんかこのヤロー、
では次回も頑張って、行きたいと思います」

58 ― 暴走鬼ごっこの行く末

「クソッ、如何してこうなった！」
晴輝は誰よりも早く酔いから醒めて飲み過ぎで暴走した皆から逃げている。
咄嗟の事で理解できなかったので、無造作に置かれていたダンボールの中に入った晴輝、某ゲームの蛇の様な名前の主人公の顔が脳裏を過る。
「とりあえずはここで皆の酔いが醒めるのを待つか」
安心した晴輝に近づく一人の女性。
ダンボールを取り上げて彼女は笑い、こう言った。
「みぃつけたぁ」
ヤマメである。
もっとも見つかってはいけない人物ランキング、第一位に最初に遭遇したのだ。
ルーミアと鬼ごっこをしていた時みたいにねこだましをしようと素早く立ち上がり両手をヤマメの目の前で叩こうとするが、手と手を合わせる前に体が動かなくなる。
「ふふっ、私が――蜘蛛だって――忘れたのぉ？」
手足に引っ付く粘着性の強い細い糸、無理に外そうとすると辺りに張り巡らされた糸が絡んでしまう。
「力を抜いて――朝まで楽しも、ね？」
耳元で呟かれた淫靡な声はまだ思春期の十九歳男子の心を揺さぶり、頬を紅潮させる。
「（そうだ、誘われているんだ。俺が喰う訳じゃないし、ここで俺が了承すれば、それは合意の事、なら、良いんじゃね？　ヤマメ可愛いし、少し貪欲そうに見えるけど良いんじゃね）」
少年の心は彼女の一言に魅了されキャラさえも崩壊させる。
「もちろん、三〇ゲーム」

「（前言撤回させてくれ）」
たぶん枯れ果てるだろうとと覚悟した。
「ふふふ、じっくりしっぽり、楽しもうじゃないか」
Yシャツのボタンを一つ一つ外し、舌で彼の頬を舐めるヤマメ、そんな彼女に晴輝は色々な卒業を手伝ってくれる事の覚悟と、この事がバレたら魔理沙辺りに消されると浮気のバレた夫の様な事を考えていた。
だが、ボタンを外す動作は最後の一つを残して、止まってしまった。
体を捕縛していた数本の蜘蛛の糸も取れて、行動が可能となる。
倒れてくるヤマメを支えると視界の先に犯人はいた。
キスメが桶を使ってヤマメの後頭部を殴りつけて彼女を停止させたのだ。
「キスメ、ありがとう」
「らいひょうふれふか～？」
呂律の回っていない謎の口調、熟れたトマトの様に赤い顔、右手に持った酒瓶、一つだけでは真実には辿り着かないがこの三品が晴輝の頭に一つの真実を導き出す。
「お前も酔ってるのか」
「酔ってまへんよ～」
酔っているほど酔っていないと言う言葉は本当なのだと確信した晴輝はキスメの背後に回り、首に手刀を入れ、気絶させる。
「まさか、本当にこの技が出来るとは……」
テレビでよく見る相手を無力化するチョップ、本当に出来た晴輝も驚きを隠せない。
倒れた二人を放置して新しい隠れ場所を求め歩き続ける。
「ああ、妬ましい」
耳元に囁きかける様な声に驚く。
後ろを振り返ると一緒に飲んでいた金髪のエルフ耳少女が立っていた。

「えっと、パルスィさん？」
「ええ、覚えていてくれたの？」
飲み会が始まる少し前にこの女性と対面した、パルシィさん、勇儀さんと仲が良く、一緒に飲み合ってる事が多いらしい。
「ホント、妬ましいわ。貴方の回りはいつも賑やかで退屈しない」
パルスィさんは一歩一歩近づいて来る、彼女も酒を飲んでいたので、あの二人の様な謎の行動をするかもしれないので一応構えておく。
「私はそんなに美人じゃないかしら？」
「はい？」
あの2人と比べて様子がおかしい。
「いや、美人ですよ、特にその眼、何か宝石みたいですし」
「本当？」
「本当です」
パルスィは下を向く、だが、顔が赤くなったのを知らない鈍感な十九歳は、追い打ちをかける。
「美人ですよ、金髪とかその碧眼とか、耳とかも可愛らしいですし、それに……」
「も、もう良いわ、ありがとう」
鈍感男に撃ち抜かれた心は鼓動を強く、早くして今も絶賛稼働中、褒め殺した張本人は何が起こったのかを理解出来ない御様子。
「大丈夫？」
「ちょっと、休んでくる」
パルスィはそのまま隣の部屋へと入って行った。

最終的には飲んでいた宴会場に戻り、何で皆あんな風になったのかを調査しに酒瓶を調べていた。
「手掛かりは無しか」
酒で酔ってたと言えば一言で解決できるが明らかに酔った勢い以上

の勢いだ。あのクールツッコミ役のキスメさえあの淫れっぷり、何かあるとしたら酒にあると思ったのだが変わった所は無い。
　だが一つだけだが気になった事があった。
　酒瓶の色が二色、片方は普通の茶色、だがもう一色は緑、明らか違う酒だと思い調べてみるがラベルは剥がされて何もわからない。
「確か、これヤマメが持ってきたっけ」
　眼を瞑るとこの酒瓶を大量に担いで持ってきたヤマメが見えてくる。
「そうだ——確かこの酒瓶のラベルをヤマメが座布団の下に隠した様な……」
　不確かな情報だが他に当てもなくとりあえずヤマメの座っていた座布団の下を調べてみると案の定、酒瓶から剥がされたラベルが出てきた。
「えっと——これであなたも一心同体、既成事実を作る媚薬入り、『夜犯っちゃって（よっ、やっちゃって）』」
　明らかに原因となる物質はヤマメの持ってきた、不審の酒瓶を片手に——
「あのバカの所為かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
　最大ボリュームで叫び、ぜぇぜぇと息を切らす。
「クソッ、さっきアイツの事を可愛いと思った俺がバカじゃねぇか！　あと少しで発禁が付きそうだったわ！　もう、何か、どうにでもなれ」
　その場で大の字になって畳の上に寝転がる。
　多分、この酒よりも他の酒を大量に飲んでいたから媚薬の効果も長続きせずに酔いも早く醒めた。
「アレ——でもおかしいな」
　飲んだ量はキスメとヤマメが同量（ヤマメは性格が元からアレだったので多分）だったはず、パルスィは俺と同じぐらい、なら後の酒は誰が…………とここまで来て全てが繋がる。

他の全ての酒は俺をこの宴会に呼んだ張本人が平らげた、と言う事は数本の媚薬入りの酒がまだ発散されずに体の中で暴れている人が約一名。

ガシィと誰かの手が晴輝の肩を掴む。

見当はついていた、ただ一人酒を水の様に飲み、体に蓄積された欲求不満が解消されていない一体の鬼。

「晴輝ぃぃぃぃ、探したぞ」

旧地獄に住む鬼、その怪力はそんじょ、そこらの妖怪では手も足も出ない。

ましてや現在、ただの人間の俺と彼女では猫と熊ほどの戦力差が出来てしまう。

「勇儀さん、落ち着いて話し合おう、酒に酔った勢いは真実の愛とは言わないのだよ！」

もう自分のキャラ崩壊などどうでも良くなってきた。

押し倒され、腰の上に乗られて身動きが取れなくなる。

体操着を脱ぎ、胸を抑えつけているブラ代わりのサラシが姿を現す。

「夜って意外と長いんだぞ」

「いえ、長くなくてもいい様な気がします」

「じっくりと私が可愛がってやろう」

もうすでに袋の鼠、その場にキスメとヤマメ、素面っぽいパルスィまで来て事態は最悪になって行った。

58 ー暴走鬼ごっこの行く末（後書き）

雑談コーナー

主「見えてくる、過去の栄光、走馬灯。
教師に散々叱られて、見えてくるぜこまっちゃん。
その胸で泣かしてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

59 ―まるで浮気のバレた夫の様な主人公（前書き）

先に言っておこう。
事後です！

影月さん、たくさんの感想ありがとうございます。

59 ―まるで浮気のバレた夫の様な主人公

早朝、朝早く起きる習慣が体に身につき、眠くても起きてしまう晴輝、生活リズムは崩さない様にしていた彼だが今日ばかりは無理である。

「夢――だったら良かったのに」

目の前の光景に眼を瞑りたくなる。

何故か全裸の勇儀と向かい合って寝ていたり、ペットの上でヤマメとキスメとパルスィが裸で寝ていたり、何故か腰に激痛が来たり、した事の記憶を全て丸々と消えていたりする今日この頃、予想では多分、事後てある。

「魔理沙に殺される程度で済めばいいけどな」

遠い眼で何かを悟った様な事を呟く晴輝、その彼からは、まるで地球最後を迎えようとしている海外の映画に出てくる脇役の様な深刻な顔、絶対に魂まで塵になる事を覚悟していた。

ベットから出て服を着る。

裸の彼女等の服をかき集め、折りたたみ、風邪をひかない様に毛布をかける。

「さぁ、今日も働きましょう」

死んだ魚の様な眼からは雫が流れる。これはただの雫ではない、どんな困難をも乗り越えてきた男の人生が崩れた破片、絶望の欠片、明日を見る事の出来ない者の叫びである。

ドアノブを開けようとすると一枚の手紙が落ちている事に気付く。

手紙の内容は『明るく前見てな、道がある。それに進めばいい』と書かれ、最後に星熊勇儀と書かれていた。

「勇儀さん」

たぶん、この事を俺に伝えようとしていたのだ。

そう思う彼の眼は元の綺麗な眼に戻り、再び涙が溢れ出した。

「そうだ、酒の勢いなんだ、俺が襲ったわけじゃないんだ、なら魔

理沙だって許してくれる。そうだ、きっとそうだよ」
自己暗示をかけて前向きになる晴輝、零れ落ちて行く涙を拭き取り今日も元気に職場へ向かう。
「大丈夫よ、今日は私のペットが出るから」
聞き覚えのある声に決心と勇気は全て破壊された。
「さとり……様？」
ドアの先にこいし様、さとり様の古明地姉妹が立っていた。
ニッコリと笑うさとり、眼をカッと開いてまるで威嚇する様なさとりの第三の眼（サードアイ）。
「お兄さん、ここで何してたのカナ？」
眼を閉じて微笑むこいし、眼を閉じたままのこいしの第三の眼（サードアイ）。
急いで着替えたのかクタクタになって皺まみれの服、俺の後ろでは全裸の四人組、さっさと寝室から退去する晴輝、この三つのアイテムは、いつの間にか名探偵っぽい服装に着替えて虫眼鏡で俺を凝視するこいしが答えた。
「事後だね」
彼女の推理に無駄は無く、的を射抜く矢の如く鋭い、そして彼女の推理は俺を撃ち抜いたのだ。
「ああ、神よ、貴方は何故そんなに無慈悲なのだ」
ギリシャ神話の様なセリフは彼女達の心には届かず、ただアーメンと心で祈っている。

場所が変わり地上の守矢神社。
「諏訪？」
「どうした？　諏訪子」
「何か今、彼の声が聞こえた様な」
「彼って、神田晴輝の事か？　アイツは死んだはずたろ」
「たぶん、まぁ良いか。諏訪諏訪諏訪諏訪諏訪諏訪諏訪」
「と言うか、何だそれ？」

「共鳴？」

59 ―まるで浮気のバレた夫の様な主人公（後書き）

雑談コーナー

主「え？　何でこんな事をしたかって？

そっちの方がドロドロした修羅場が生まれるかなーって」

６０　お仕置き＝拷問（前書き）

自重？　えっ、何それ食べれるの？

60 ― お仕置き＝拷問

「（親父へ、前略、もうすぐそちらへ行きます。その時は色々と話し合いましょう）」
「残念だけどお仕置きでは殺さないわ、もう少し苦しみなさい」
「お兄さん、顔が真っ青だけど大丈夫？」
現在、例の一件で晴輝はお仕置きを受けている。
磔、獄門ならまだ軽い方だ、さとりの能力で封印してきた数々のトラウマを呼び覚まされ、手足を拘束、目隠しをされて質問攻め、それを三日間、不眠不休である。
「ねぇ、気持ち良かった？　何プレイ？　子供は何人欲しい？」
「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」
主のこいしの質問に全く答えず、ただひたすら同じ言葉を喋るゲームに出てくるモブキャラの様だ。
「少し休憩させましょう、壊れたら大変だわ」
さとりの言葉に慈悲など無い、ただ壊れない様にギリギリの境界線で休憩を入れて、ある程度治ったら再度拷問を開始する。
「光を拝めないと思いなさい」
「それ、ただの拷問じゃね？」
ツッコミは精神が壊れ、ズタボロでも、今も健在である。

仕置きを受けるペット達が入れられる牢獄のような場所、かつて、ここが灼熱地獄であった頃に罪人を閉じ込めておく部屋である。
「じゃ、また後でね、お兄さん」
視界も見えない、身動きも取れないそんな状態で牢獄の中に入れられる。
元はここも灼熱地獄、その名の通り辺りは真夏以上の暑さ、熱を帯びた地面は異常なほど熱く、肉を焦がす勢いだった。

「俺は……無罪だ」
そんな悲痛の叫びは牢獄のもう一人の住人の耳へと入って行った。
「ニャーン」
「……猫？」
猫の鳴き声、明らか誰かが声真似をしているのが分かったが、視界も未来も混沌の闇の中、そんな少年には相手の顔どころか明日の道すら分からない。
「お兄さんはこいし様のペットのお晴だっけ？」
「アンタはさとり様のペットの火焔描……お燐？」
親友の鴉とかに発情して襲い掛かり、敢え無く御用され、さとりの『貴方のトラウマと黒歴史を呼び覚ましちゃうぞ（はあと）』教室で数百年分のトラウマを呼び起こされたと言う、凝り性のない猫である。
「火焔描燐、お兄さんは色欲魔……お晴？」
「クソッ、語呂が良いから何となくそれで良い、と思った自分を呪い殺したい」
色欲魔なのは仕方がない、あんな事件を起こしたのだ、色欲魔と言うれようが、ド変態と呼ばれようが、アニキと呼ばれようが仕方がない。
「せめて、記憶ぐらい残してくれよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「仕方のない色欲魔だね」
「お前だけには言われたくねぇ！」

牢獄に幽閉されてもう一時間が経つ、滝の様に流れ続ける汗は体の水分を持って行きＨＰもＭＰも限界値を突破していた。
「如何するお兄さん、こうなったらお互いの汗を舐め合って、水分補給を……」
「何そのマニアックな光景！　自重しようぜ、そんな事バレたら次

は如何なる事やら」
だが水分を欲する舌が潤いを求めて口から出る。
四肢を拘束しているロープを切る事すら面倒になり、次第には生気がどんどん失われていく二人、思考力も低下し、お互いの考えて行くことがおかしくなる。
「そうだ、汗を舐めあえば水分は確保できるよ、お兄さんの汗を舐めさせて」
「じゃあ首な、舌でも良いぜ」
「聞いたことがある、暑い時は裸になってベットの上でラジオ体操を……」
「違う違う、ラジオ体操じゃなくてプロレスだぞ」

「如何かしてたと思う」
「あたいもそう思う」
あの後、両者喉やら舌やら舐め合い、気がついた時には水を持ってきたこいしに発見されて、拘束の仕方が亀甲縛りへとランクアップしていた。

６０ー お仕置き＝拷問（後書き）

主「誰か、誰か！絵師の方ぁぁぁぁぁぁ！
黒ゴスのさとりんと
白ゴスのこいしっちのイラストをおおおおおおおおおおおお！」

61 ― 真実は仮面へ（前書き）

時間軸　晴輝失踪から十日目

61 ― 真実は仮面へ

翌日、晴輝とこいし、さとり、さらにあの時一緒に寝ていたキスメ、ヤマメ、パルシィ、勇儀の面々が集まり旧都で有名な居酒屋で一杯飲んでいた。

飲み会と言う気楽なものではない、あの夜の真相を確かめるため、さとりの開いた言わば取り調べの様な物だ。

だが会場は予想以上の緊迫した空気に包まれ、真相を語る状況なのではなかったのだ。

席に座り誰も喋らない。

まるで合コン初心者達が残された時みたいな、何を喋れば良いのか分からない空気。

そんな空気がたった一人を残して彼女達を包んでいた。

「私はお酒、とびっきり美味しいの」

こいしは笑顔で店の人間に注文をしている。

そんな彼女の事を放置してさとりがこの空気を蹴り飛ばした。

「ほ、本題なのだけど」

この重々しい空気の中、話を切り出せたさとり様の勇気に俺は敬礼をしたい。

「したの？」

直球ど真ん中、優しく包む事もなく、遠回りでもない真剣勝負、この最終局面、打たれたら負け（はいと言われたら俺が死ぬ）、そんな時にとんでもないボールを投げた。

「あの時変だったのは覚えてますけど――その後は全然覚えてないです」

「キスメに同じく、私も記憶がない」

二人はどちらかと言うと酒には強くない、他の二人に聞こう。

「ちょっとだけなら――キス……位かしら？」

そのパルシィの一言で俺のライフポイントはすでにレッドゾーン、

さとり様爆弾が爆発寸前である。
だがこれで済めば俺の容疑も晴れ、自由の身、明日から娑婆に出ても何ら問題がない。
「……」
たった一人、酒の席でなくても何時も豪快な勇儀さんが黙ったままである。
「どうしたんですか？　何か具合でも」
「あ、いや、ちょっとさっきまで飲んでたから少し頭が」
勇儀はどちらかと言うと飲めるタイプ、なら何か隠し事をしていると踏んださとりが誰よりも先に行動を示す。
「こいし！」
「アイアイサー」
こいしが取りだしたのは何かしらの薬品、それを能力で勇儀に悟られず、中身の錠剤を口に入れ水で流す。
「か、体が！」
「私の所にある鬼をも痺れさせる、毒薬、生死には関わらないから安心して」
薬品の入れ物に『永』と大きく書かれている。明らか何処のメーカーかは見当がつく。
「第三の眼（サードアイ）！」
さとりは第三の眼を使い相手の心を読む事が出来る。
意識すればするほど明細に、ハッキリと具体的に。
「はっ！」
幻想郷での激しい戦闘、そんな中で培われた第六感である危険危機能力が眼を覚まし、俺の脳に『逃げろ、今なら間に合う』と指令を出しだのだ。
席を立ち上がり、出口を目指すがヤマメの蜘蛛の糸に足を取られて地面に頭を強打する。
さとりの投げたボールは勇儀によって打たれた、そのボールは予想の斜め上を行き、場外ホームランとなった。

61 ― 真実は仮面へ（後書き）

主「さぁ、自重しない作家の最大ハーレム人数三〇超えの物語の始まりだ！」

番外編　キスメの誘惑（前書き）

61話後

番外編　キスメの誘惑

「んー！」

朝、旧都の宿で一夜を明かした、実はあの反省会の後、晴輝は地霊殿を追い出された、さとりが口走って『ち、地霊殿から出て行きなさい！』と言われたのだ、フラれたみたいでかなり心の奥底へ刺さった。

「ああ、体痛い」

あまり高い宿には泊まれなかったので畳の上で雑魚寝したのだ、布団も無く、天風が防げる程度の超ボロ宿だった。

「さぁて、如何しますかねぇ」

宿を出て体を伸ばす、両腕、首、腰からバキッボキッと良い音が鳴る。

「とりあえず、歩いて考えるか」

「あ、あの！」

暗い今から一歩でも進もうと晴輝は足を動かし始めたその時、不意に声を掛けられ足を止める。

「ん？　キスメ、如何した？　ヤマメの所にカチコミでも行くか？　ちょっと殴りこみに行くか？」

キスメはブンブンと首を振って否定し、瞳に涙を溜めていた。

「冗談だ、悪かったなこの前の事」

「そ、その件なんだけど」

キスメは急に頬を赤らめて体を小刻みに震わせる。

「もう一回してくれない」

「……」

晴輝の瞳から光が消え、まるでパソコンを再起動したように再び瞳に光が戻る。

「ん？　キスメ、如何した？　ヤマメの所にカチコミでも行くか？　ちょっと殴りこみに行くか？」
「ちょっと、同じ事さっき言ったよ……」
「ん？　キスメ、如何した？　ヤマメの所にカチコミでも行くか？　ちょっと殴りこみに行くか？」
「あのね、私にもう一度性交を……」
「なるほど、キスメになりすましたヤマメか！　ここで会ったが百秒と八六三〇〇秒ぶり、さぁ、神妙にお縄で亀甲縛り！」
「ああもう！」
キスメは桶の中から酒瓶を取り出し、栓を外し、晴輝の口へ突っ込んだ。
「んむ！」
酒瓶の液体を飲み乾した晴輝はその場へ腰を下ろす。
そんな晴輝をキスメはズルズルと路地裏へ運んだ。
「キスメ……」
「ごめん、体が疼くんだ、特にここが……」
キスメは晴輝の手を取り、豊満とは言えぬ薄い胸へ押し当てた。
胸から伝わる鼓動を右手で感じ晴輝は息を荒くする。
荒くなっていく息には理由があった。
キスメの飲ませた謎の液体、酒瓶でカモフラージュしていたそれは媚薬であった。
ヤマメの懐から拝借して来たのは内緒である。
「あ、熱い……」
「す、すぐ済ませるから……」
キスメは晴輝の唇を奪い、舌を丹念に絡み合わせる。
両者の息は荒くなり、キスメもまるで貪るように淫靡な舌使いで舐める。
「ん、ちゅ、はぁ……もう良い……よね」
キスメは自分の白装束を脱ぎだし始める。
「声抑えればバレないから……だから……」

全裸に近い状態で今度は晴輝のズボンへと手を出す。
「だから……ね」

番外編　キスメの誘惑（後書き）

主「自重何それ食えるの？」

次回はちょっとおかしなヤマメさんのお話。

番外編　ヤマメの異変

旧都の外れ、ヤマメの住む巣がある、実際は巣を張っているだけで他で衣食住をしているらしいが、ヤマメがそこに居る事に確信的な物を抱いていたのかもしれない。

「ヤマメだ、絶対ヤマメが吹きこんだな！」

色々と激しい運動をして失神状態のキスメを担いで晴輝は走る。

足取りは重く、だが素早く、一歩一歩確実に進んでいるが歩き方にぎこちなさを感じる。

腰が砕けるほどの快感にでも襲われたのだろうか？

「ここか……」

着いた時には既に昼時、朝から昼まで何をしていたのかは皆さんのご想像にお任せします。

蜘蛛の巣の様な大きな網、何も釣れていないのを見ると漁は不調の様である。

「背後からアルゼンチンバックブリーカーの刑だな」

指をパキポキと鳴らし、辺りに眼を光らせる。

まるで得物を探す鷹の様な鋭い眼光。

その時晴輝の耳が声を捉えた。

「三時の方向に声……」

息を殺し、身を潜めて近づく、声が段々と明確に聞こえ始めて来る。

「はぁ……イクゥ……イッちゃうぅぅぅ」

クチュクチュと響く水の音、ヤマメの淫靡な喘ぎ声、晴輝は背後からそっと近づく。

「（実はアイスを舐めてましたとかそういうオチだろ、俺は引っからないぜ！）」

ヤマメはなにやらソファーの様な物に座っていた。

背後から息を殺し、そっと近づき深呼吸する。

「ヤマ……」
「ふぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
その瞬間、不意にのけ反ったヤマメと眼が合った、ヤマメは一時停止し、再び思考を働かせる。
その顔はどんどんと赤く染まり、真似をする様に晴輝も顔を紅潮させる。
何故か濡れているヤマメのスカート、口から垂れる涎、何故か自分の股へと右手を当てている。
名探偵でも無い普通の十九歳の思考がフルに回転し、一つの結論へと達した。
「ああ、その……」
自慰と呼ばれる性的行動、妖怪だって何百年も生きていればお年頃にはなる、だがこんな展開になるとは誰が思っただろうか。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
キスメは自慰をしていた右手で晴輝の顔面を渾身の力で殴りつけた。
晴輝は顔面を押さえ、その場で数分もがき続けた。

「……」
「本当に悪かった」
晴輝とヤマメ、ソファーにお互いの背を合わせて座る。
気まずい空気と罪悪感で心が折れそうな晴輝、さして気まずい空気と羞恥心が混ざり、今にも死にたい鬱な気を出すヤマメ、二人を包む空間があまりにも重すぎる。
「てか、お前の性格上、見られたら恥ずかしがるのはおかしくないか！？」
「なっ、何言ってるんのよ、私も女なんだから、その、恥ずかしいに……」
体育座りの態勢でどんどんと自分の膝へ顔を埋めていくヤマメ、

晴輝はそんな彼女を不意に可愛いと思ってしまう。
「（クソッ、これがギャップって奴か!?　兵器レベルだぞこれ、可愛いは大罪だよ!）」
「あのさぁ、私の巣に何の様？」
「あ、その……そう！　キスメの様子がおかしかったんだ、だからお前が何か吹き込んだものかと……」
「どんな風に？」
正直エロかったと言えば事は片付くねだが今そんな事を言ってしまえば自分がヤマメを誘っている様に聞こえてしまう。
そう判断した晴輝の脳内会議室は何と言うかを考え、ある一つの結論へ達した。
「何か、熱がある様なボーっとした感じでさぁ」
「何されたの？」
晴輝は弱点を突かれた。
キスメの様子を遠まわしに言っても結果は同じ、『さっきまでお楽しみでしたね』等言われたらもう立ち直れない。
「じ、実は……私……晴輝の事を思ってやってたんだ」
「……は？」
「実はだんだん思い出して来てさ、なんかこう、ムラムラしちゃって……気が付いたら晴輝としてるみたいな錯覚がね、何か止まらなくなって」
「待て待て、え、何？　自然と俺が悪い様に思えて来たんだが、てか何？　お前どうしたの？　キャラを保ってくれ！」
「だってさぁ、一生一度の初体験を捧げたんだよ、ちょっとぐらい恋愛感情を持っても……」
「いいじゃない、妖怪だって恋の一つぐらいしたいもの」
「俺ですよ！　和菓子とバイク弄りが好きで色恋沙汰なんか無縁な人間ですよ！」
「恋に……神も妖怪も人間も関係ないよ」

不意に唇を奪うヤマメ、無理に舌を絡めようと晴輝の閉じた唇に無理に押し込む。
晴輝の唇は何故か開き、舌を入念に絡ませた。
一度離れる二人の唇、唾液の糸が二人を繋ぐが儚くも切れる。
晴輝は唇を右手の甲で押さえるが手を退け、口を開く。
「もしも、お前の好きな男が女ったらしだったら如何する？」
ヤマメは気の抜けた表情を浮かべるが、クスッと笑い答えた。
「……色々あるけど大丈夫。だって私が女ったらしにするんだから」
二人は再び唇を重ね濃厚な口づけをした。
これが後の『女ったらし』の完成であった。

番外編　ヤマメの異変（後書き）

主「俺は自重する事を辞めるぞおおおおおおおおおおおおおおおお！」

番外編　嫉妬に燃えるパルスィ

地霊殿追放から二日目、昨晩はヤマメと共に夜を明かした。
ベットの上でお互いの手を絡み合わせ二人で寝ていた。
ついでに両者共に裸で、腰の激痛に最初はベットから出る事が出来なかった。
暴走キスメの事も一応は解決する為、二人の扱いは同じ恋人である。
「ま、まぁ、本当は『友達以上で恋人未満』だからな」
「面倒だから『家族』ってのはどう？」
「ちょっと飛び過ぎだね」
旧都をキスメ、ヤマメ、晴輝で三人仲良く歩く、橋姫でもないのに旧都の皆さまから妬ましい様な声が聞こえるのは幻聴にしたい。
「……妬ましい」
「のぅわっ！」
耳元からの不意の一声、晴輝はリアクションを見事に決め、平常心を取り繕う。
「パルスィか」
「貴方達、幸せそうね」
腕を組み地面を見つめるパルスィ、だが悲しげな表情で顔を曇らせていた。
「ああ……その、ヤマメ、キスメ、今日はパルスィと話あるから、悪い！」
手を合わせ、軽く頭を下げ謝罪の意を見せる晴輝、それを理解出来たヤマメはキスメを持ち、そのまま去って行った。
「良いの？」
「ああ、悪いけど俺の話に付き合ってくれないか？」

旧都にあるパルスィの家。
「それで何で私の家？」
「ちょっと外じゃ話難いからな……」
晴輝とパルスィ、机を挟み話し合う。
パルスィが気前良く出した湯飲みのお茶を飲み乾し、真剣な表情でパルスィを見つめる。
「な、何よ……」
「この前の事は本当に悪かった！」
晴輝はその場で土下座をした。
パルスィは何の事か解らず、数秒間放心していた。
「えっ？　何を誤っているのか理解できなんだけど」
「あの、引きずってるよな、あの宴会の件、謝って済む問題じゃない、許してくれなんて言わない、でも本当に悪かった！」
「あの件は貴方だけが悪人ではないわよ」
「えっ？」
「媚薬酒を飲んでいた皆、持って来たヤマメ、貴方を襲った私達、つまり今回の件は全員が加害者であり、被害者……」
「で、でも！」
「媚薬酒を持って来たヤマメに罪を擦り付けたいのなら別だけどね」
「そんなこと思ってない」
晴輝はパルスィを睨んだ、だが自分の行動に気付き、軽く詫びを入れパルスィの眼から視線を逸らす。
「……妬ましい」
「ん？　如何した？」
「貴方にそこまで思われているヤマメが妬ましくてしょうがないわ。ああ、妬ましい妬ましい」
パルスィは親指の爪を噛み始める。
「私には何かないの？」
「えっと……何か願いとか無いか？」
「……晴輝は如何なの？」

「俺は……パルスィも勇儀さんも迎え入れたい」
「そう」
パルスィはその場で親指を噛み続けた。
「そうね……」
パルスィはまるで獲物に近づく女豹の様に鋭い眼光で睨みつけ、ゆっくりと近づいて来る。
「あの、性的な願いは遠慮して……」
「そうね、別に性的な願はしないわ、ただ『今日一日私の事を満足させる』と言う条件の中に性的欲求の解消が含まれていても構わないわよね？」
パルスィは晴輝のズボンのチャックを下ろし、自分の服を脱ぎ始めた。
「ちょっ！」
健康的なスポーツブラ、スパッツが晴輝の目の前と現れる。
「別に貴方の事が好きではないわ、ただ、一度抱かれてしまっているのに他の相手にされるのは嫌なだけ、たったそれだけだから……」
頬を赤く染め、下着すらも脱ぎ始めるパルスィ、右手は晴輝のズボンのチャックから侵入し、何かを掴んだ。
白く輝く肉丘、大きいとも小さいとも言えぬそれを鷲掴み、揉みしだく。
「はぁっ……て、手馴れてるわね」
「まぁ既に六回目ですから……」
鋭く睨むパルスィ、地雷を踏んだ事も知らずに快楽の海へと沈もうとする晴輝。
「そうね、本気で逝っても良いのよね」
背後から漂わせる黒いオーラ、何に対しての嫉妬なのかはさて置き、パルスィの眼に炎が宿る。
「（そうね、私が多少独占しても良いわよね……偶には甘い蜜ぐらい吸っても大丈夫よね）」

「パルスィ？　顔がマジなんだけど、ちょっ、いきなり舐めるな、うおぉぉぉぉ！」

番外編　嫉妬に燃えるパルスィ（後書き）

辻虎脳内会議室から出て数分歩いたところにある
ミスティア・ローレライの八目鰻屋。
主「今日呼び出したのは以下省略……今回は真剣な悩みなんだ」
晴「何ですか？」
主「神霊廟の新しいキャラの皆様方の出演についてのアンケートを取りたい」
晴「わお！　以外に真面目……」
主「今日から一週間、神霊廟の新キャラクターを出しても良か否かのアンケートを取りたいと思っています。一通もない場合はネタバレ厳禁と言う事でもう少し後になります、皆さんよろしくお願いします」

番外編　ご乱心の勇儀姉さん

「腰がぁぁぁぁぁ」
女ったらしは現在、パルスィの家で腰を休ませていた。
まだ二十歳にもなっていないのに腰痛に悩まされているのは自分でも少し調子に乗り過ぎたと重々承知していた。
「だ、大丈夫？」
パルスィが湿布を持って部屋へと入って来る。
「わ、悪い、出来れば貼ってくれ」
自分一人で背中に的確な位置に湿布を張る事など出来ない、なのでパルスィに湿布を貼って貰う。
「今日は如何するの？」
「勇儀さんの所へお詫びもしないとな」
「それなら良いわ」
パルスィは湿布を張った場所を撫でるが、段々とその手は腰から股の方へと移動して行く。
「あ、俺もう行かなきゃ」
地面を這うように移動するが勿論歩行する相手には勝てない。
よって俺はパルスィに捕まえられた。
「た、助けてぇぇぇぇぇぇ！」

色んな意味で精気の抜けた晴輝はボロボロな体で勇儀の家へ向かっていた。
「あっ」
「あ……」
気の抜けた声を出し立ち止まった晴輝、その視線の先には勇儀が居た。
普段の体操着と長いスカートではなく、紺色の和服に身を包み、

酒が満ちた杯を左手に持ち、残りの右手には酒の入っている瓢箪を二、三個ほど着けていた。
「ど、どうも」

勇儀に連れられ、勇儀の家の奥へと進む。
「……」
勇儀は真剣な表情をし、何も言わずに付いて行く。
勇儀の立ち止まったのは部屋の一室だった、寝室でも客間でもない、ただの一室、勇儀は襖を勢い良く開け、待ってろと小声で言うと晴輝を置いて部屋へ入って行った。
一分もせずに出て来るが真剣な表情は変わらず、またも部屋を移動した。
着いた客間で晴輝は正座をした。
別に自分の意志ではない、ただ勇儀の真剣な表情が晴輝を暗示にかける様に作用した。
「……」
「……」
両者黙り込む、気まずいのか、相手の出方を探っているのかは分からないが邪魔者の居ない現状では晴輝と勇儀の二人以外、この沈黙を破る事は出来ない。
「あ、あの本当に……」
「本当にすまなかった！」
晴輝よりも前に頭を下げたのは勇儀だった。
姿勢よく頭を下げ、綺麗な土下座を見せる。
鬼が人間に謝ると言う行動、晴輝はそれだけが理解出来ず、心を放り投げていた。
「あ、いや、何で勇儀さんが頭を下げるんですか？」
「私が宴会なんか開かなかったら晴輝を襲う事は無かった。私があの時の事に飲まれてなかったら晴輝が苦しむ事が無かった。私があの時の事

を覚えていなかったらお前は地霊殿から追放される事は無かった」
一人深々と謝り続ける勇儀、別に今回の一件に加害者を作る事は無い。この件は媚薬が悪いと言う事にして丸く収めたかったのだが、勇儀は自分が加害者だと思っているのだ。
「いや、勇儀さん。今回の件は加害者は誰も居ないんだ、もしも誰かが加害者になるなら男の俺に責任が在る。だから俺も本当にすいませんでした」
「い、いや私も腹を括ってるしそれに」
勇儀は懐から何か取り出す。
スペルカード、だがそれは勇儀の物ではなく、何処か見た事のあるイラストが描かれている。
「俺のスペルカード！」
晴輝の紛失したスペルカード、一枚だけではなく、全てのスペルカードが揃っていた。
「今回の件の詫びに見つけたんだが揃っているか？」
「ああ、全部揃ってる、これで何時でも地上に帰れる、ありがとうございます！」
晴輝はスペルカードを貰い受け、大喜びで両腕を振った。
「でも名残惜しいな」
勇儀は口を開く。
「折角仲良くなったのにもうお別れか、別れなんて何度も経験したのに……こればっかりは慣れないね」
「また会いに来ますから、家族ですもの」
「家族、まぁ超える一線は越えてるし、家族ってのも悪くないかな」
「また地底にも遊びに来ますし、その時は美味しい酒を」
「ん、本当か？　なら楽しみにしてるよ」
酒と言う大好物の単語を聞いたのにまだ気分の晴れていない勇儀、晴輝の頭が全力で回り、ある一つの行動に出る。
「は、晴輝？」
不意に抱き付く晴輝、その手は優しく、包み込むようにゆっくり

とだった。
「重荷は捨ててください、勇儀さんならこう言う湿っぽいのは嫌いじゃないですか」
「あ、ああ確かに……」
「捨てる事が出来ないなら一つ約束してくれませんか？」
「約束？　鬼と約束する時は腕の一本は覚悟しな」
鬼は嘘が嫌いだ。
それがどんな些細な物でも破れば悲しむし怒りもする。
晴輝はその意味を知ってて約束をしようとした。
「約束は二つ、俺を家族になる事、いやなってください」
「約束と言うよりはお願いだな」
晴輝は顔を赤くし始める。
いくら自分から抱きついても時間が経つに連れ、自分の行動に恥じたくなってくる。
「そして二つ目、どんな重い荷物も俺等家族で支え合い、頑張って行く事」
「ああ、分かった、と言う一つ良いか？」
「ん？　如何しました？」
「家族ならもう少し家族らしい喋り方をすればいいじゃないか」
「うぇ！　いやその皆十九歳の俺より年上だし……」
「他の三人にはため口なのにか？」
「……」
晴輝は勇儀の視線から逃げる様に眼を逸らす。
「と言うか私は家族の何だ？　姉か？　妹か？」
「勇儀姉さん……良い響きだ」
「なるほど、嫁とか妻とかそういう選択肢には入ってないのか……お姉さん悲しいなぁ」
「ああいやその、嫁や妻が四人もいると色々と面倒事が勃発しそうな気がして……」
「同じ男を好きになったんだ、喧嘩の一つはするだろう？」

勇儀の正論に完膚なきまでに看破された晴輝、もう何も言う事が無く、俯いていた。
「なぁに、今さら古明地の姉妹が追加しようとペットのお空やお燐が追加しても、私達を見てくれるアンタが本命なんか作らない限りなぁ」
勇儀も晴輝を抱き締めるが徐々に力が強くなり、晴輝のアバラ辺りが折れる音が響く。
「冗談は良し子さん……イタタタタタタタタ！」
「嘘や冗談は嫌いだって言ったろ？」
「は、ハイ！　言った、だから勇儀さん！」
「勇儀だ」
「ゆ、勇儀、俺は皆を嫁にする！　四人位の養う甲斐性があって本物の男なのですよ、後々何人増えても大丈夫な位稼いでみせる！」
「さっそく浮気宣言か、アッハッハッ本当に面白いな！」
「浮気とかではなく子供とかの……ガクッ」
「おーい、如何した？」
返事は無い、まるで屍の様に動かなくなってしまう。

「まったく、良い顔で寝やがって」
晴輝を膝で寝かせ、自分は杯の酒を一気に飲み干す。
一杯が軽く一リットルほどあるのに一気飲みしても倒れない、これが酒豪の強さなのか、それとも鬼の凄さかは分からない。
「いいさ、姉で私も弟が出来ただけで嬉しいさ」
何よりも今回の一件で関係が崩れなかった事が一番の喜びだった。
「明日にでも帰るかな……」
そう思うとこれまで飲んで来た事を思い出す。
「楽しかったけど、たっく、コイツが妖怪ならどれだけ良かった事か……」
そっと頭を撫で、笑って見せる勇儀、優しい微笑みを見せ最後に

は酒を飲む。
「す、少しくらいなら襲っても……いやいや、それじゃあ約束を破る、嘘は嫌いだからな……でも」
「俺が了解したら良いわけだな」
「うぇっ！　起きてたのか？」
「いや、まったく、良い顔で寝やがっての所ですかね」
「ほ、殆ど最初だよ！」
「んで？　鬼の星熊勇儀さんは人間の俺に何か？」
何か悪戯をする悪ガキの様な表情を見せる晴輝、勇儀は平常心を取り戻し、何でもないと言い返した。
「何でも無い事は無いでしょう、姉弟なのですからね？」
逆にその関係だともっと言いにくい。
「ああそうか、私をそこまで辱めたいなら良いぞ」
勇儀は服を脱ぎ、胸に巻いたサラシが見える。
「その気と言う訳ですか……」
晴輝も服を脱ごうと立ちあがる、だが腰の方からゴキッと嫌な音が響く。
「あがっ」
「ん？　如何した？」
「骨が昇天しますた」
腰を押さえ、前屈みになる晴輝、だが勇儀は悪戯な笑みを浮かべ、手をワキワキとさせ血数居て行く。
「え、何？」
「いやぁ、痛い時は他の痛みや快楽で忘れると言う療法が……」
「ちょっ、オチが読めた、助けてぇぇぇぇぇぇ」

番外編　ご乱心の勇儀姉さん（後書き）

主「感想お願いします」

62 普通の魔法使いは今日も騒がしい（前書き）

時間軸　晴輝失踪から三週間

62 普通の魔法使いは今日も騒がしい

晴輝が消失して三週間、未だに消息を掴めない、極普通の魔法使いは今日も箒に乗って彼を探していた。
「ったく、何処に居るんだぜ？」
魔理沙は上空から晴輝を探していた。
地上に居るとは限らない、ただ、死んでいない事だけは彼女も知っていた。
四季映姫・ヤマザナドゥからの情報だと彼はまだ輪廻の輪も潜っては無い、地獄にも居ないと告げられた。
つまり地上の何処かにいると彼女はそう思ったのだ。
「それにしても暑い」
幻想郷は夏真っ盛り、七月の後半である。
「そう言えば新聞に美味しい和菓子屋が紹介されてたっけ」
そう言って前日の文々。新聞を取りだす、甘味屋『龍神堂（りゅうかんどう）』。たった数日で有名な店となり売り上げも上々、店主が面白く、サービスも良いと有名で妖怪もバッチこいな店である。
「行ってみるか」

数分ほど並んで店に入った魔理沙、外との温度差が激しく、寒い位の冷気で満たされていた。
だが魔理沙にはそれよりも衝撃的な物に驚いた。
「ドラァァァァ！」
子供相手に謎の叫びを上げる変仮面を付けた男、仮面には龍と書かれ背中にも龍と書かれたマント、そして見覚えのある学生服、一年前、スカーレット姉妹と鬼巫女相手に圧倒的な実力差を見せた伝説の男、マスク・ザ・ドラゴンである。
「仮面男！」

「ああ、魔法使いさん、一年ぶりだねぇ」
右手を上げてドラァァと変な挨拶で返す。
「魔理沙、アンタも来たのね」
声の主は霊夢だ、他にも見覚えのあるメンツが顔を揃えていた。
「如何なってるんだぜ？」
メンツは紅魔館の門番、メイド長と妹紅、慧音、四季映姫、小野塚小町、霊夢と変わった組み合わせで座っていた。
「変な組み合わせだな、如何した？」
「魔理沙、大変な事になりました」
深刻な顔をして映姫は話を始める、手に持った手鏡を魔理沙に見せるが魔理沙は何が何なのか理解できていない。
「この鏡は魔理沙の知っての通り、プライベートも人権をも無効とする覗き専用の鏡」
霊夢が手にとって見せた鏡は、閻魔の持つアイテムの一つでもあり、映姫の所持品でもある。
失礼な！　と声を上げる映姫を小町が落ち着かせ、ふたたび元の話へと戻る。
「この鏡で彼、晴輝の事を見てみると面白い事になるのよ」
そう言って魔理沙も鏡を覗く、そこに映ったのは晴輝ではなく、今となりで何故か美鈴と腕相撲をしているドラゴンの姿であった。
「如何いう……事だ」
怒りを抑える魔理沙、三週間も姿をくらまし、さらに変な仮面で帰って来たと思ったら店を開いてのんびりしてました、と彼女が怒りに身を任せて辺り一面を焼け野原にする要素が沢山あるのだから。
「でもまだ確信は無い、だからまだ動かないでおくわよ」
「アイツが晴輝だって証拠がない、もしここで動いたら確実に逃げられる」
今すぐにでも真相を暴きたい、魔法使いがその事を誰よりも思っている。
だが今は待つしかないのだ、真相は逃げないが晴輝は逃げる。

両方を確かめ、確実に仕留める為に、獲物が隙を見せる一瞬を狙うのだった。

62 普通の魔法使いは今日も騒がしい（後書き）

主「マスク・ザ・オウガ？　知らないな、誰の事を言ってるんだい？」

６３ 紅魔の従者達は今日も騒がしい（前書き）

時間軸　魔理沙が店に入る前

63 ― 紅魔の従者達は今日も騒がしい

「咲夜、美鈴と共に新しく出来たって言う駄菓子屋に行ってきなさい」

早朝、レミリアは咲夜を呼び出して唐突にそんな事を言った。

「お嬢様、出来れば理由を教えてもらいたいのですが」

「行けば分かるわ、そうね……美鈴と行ってきなさい、護衛用に」

笑うレミリア、ティーカップの紅茶の匂いを楽しみながら彼女は笑う、だが咲夜には彼女は怒り狂っているとしか思えない、十数年の付き合いでここまで主人の事を理解できる事、それもメイド長になる為に必要なものだったからだ。

「分かりましたお嬢様、それと申し上げにくいのですが……」

「何？　言ってみなさい、怒らないわ」

「……では、駄菓子屋ではなく和菓子屋です」

メイドはそのまま部屋を出た。

ちょっとったミス、だが最初から最後まで偉そうに振る舞ってしまうととても恥ずかしい。

紅魔館の主は熟れたトマトの様に顔を染め、残った紅茶を飲む。

「久しぶりですね、こうやって二人で人里に来るの」

「はぁ……美鈴遊びに来たわけじゃないんだから」

美鈴、咲夜は少し離れて歩いていた、まぁ片方は頭に突き刺したままで来ているので里の人間からすれば見世物同然、その彼女の隣を並んで歩くのは少し恥ずかしいのである。

「あそこですかね」

美鈴が指を指す方向には『龍神堂』と書かれた看板のある店があった。

「ドラァァァァァァァァ！」

謎の雄叫び、店から飛び出す謎の仮面男、その仮面男にダブルラリアットをされている二人組の男、美鈴と咲夜は茫然と眺めているだけだった。

「当店での不埒な行為、そして自分に酔ってるお前等みたいな、バカな男は入店できません」
「クソッ、何しやがる！　俺達は客だぞ」
「そうだ！　客は神様なんだぞ」
「俺の知ってる神様はもう凄く凶暴な女だ、テメェらみたいな三下じゃねぇ、それとも、今のセリフ、本物の神に言ってこようか？」
仮面を少しずらし、眼で相手を威嚇する、殺意に満ちた目に男達は怯えて退散して行った。
「その腐った性根を直してからまたのご来店を～」
仮面を戻し、殺気のにない陽気な笑い声で二人に手を振る。
店からは声援等の黄色い声が上がり拍手をしている。

「美鈴、見た？」
「見ましたよ」
そう彼女達も見た事はあった、龍のマント、変な叫びは置いといて、龍の仮面、学生服が何より印象的だった仮面の男、自分たちの主の姉妹喧嘩を止めた伝説の様な存在。
「あのマント、何処で売ってるんですかねぇ？」
「そっちじゃないわよ！」

「あはは、見られてたか」
陽気に笑う男、まるで恥ずかしい一面を見られた様な、愉快な口調だった。

先に居た霊夢、慧音、妹紅と合流する。
「いやね、さっきまで居たお嬢さんが変な男に絡まれてたから追い出しただけさ、それよりお客さん、ご注文は？」
ドラゴンは何処から取り出したメニューを咲夜へと渡す。
「じゃあ……水饅頭」
メニューを開いた咲夜は適当に選び、注文をする。
「私は宇治金時」
さっきまで店に居る子供たちと遊んでいた美鈴がメニューに素早く眼を通し、さっと答える。
「水饅頭と宇治金時、ちょっと待ってくれよ、すぐ作るから」
そう言って店の奥に行ってしまうドラゴン、彼を不審な目で見つめる霊夢達を無視して。

63 ― 紅魔の従者達は今日も騒がしい（後書き）

主「……」

返事がないただの屍の様だ。

６４ 楽園の巫女は今日も騒がしくない（前書き）

咲夜たちの来る少し前

64 一楽園の巫女は今日も騒がしくない

博霊神社、一年での参拝客はギリギリ二桁だった。
現在、博霊霊夢は参拝者増やしに『龍の爪』を公開している、ついでに有料、御利益は商売繁盛、金運上昇など根も葉もない言葉を並べているだけだ。
だがしかし、一向に参拝客は増えない。
「如何したものかしらね？」
お茶を飲みながらゆっくりと考える。
「分からない！」
そう言って四肢を投げだし畳の上で大の字になる、もう如何でも良さそうな顔をして天井を見上げる。
「茶菓子でも買いに行きますか」

人間の里は活気に満ちて辺りはとても幸せそうだ。
「あーあ、商売繁盛してる店は全て滅びれば良い、ついでに守矢神社も」
明らか巫女の言う言動ではない、それほど彼女の頭は末期寸前だと言う事だ。
「霊夢、良い所に来た」
「あん？」
まるで不良の様な返答、そんな返答を軽く無視するのは慧音であった、愛しの妹紅と歩き幸せそうな慧音、その幸せを『リア充爆破してやろうか？』みたいな鋭い眼で睨む霊夢。
「これから新しく出来た和菓子屋に行くんだが来るか？　奢ってやるぞ」
「すぐ行くわ」
顔色を変えて慧音に飛び付く巫女、この巫女は何処まで金銭欲に

溢れているのだろうか。

「……」

霊夢は茫然と立ち尽くしていた、変な仮面男と平然と喋る男、スカーレット姉妹の喧嘩に灯油を注いで火を炎にした霊夢達をボコボコにした男。

「ああ、霊夢、彼はマスク・ザ・ドラゴンと言ってルーミアと人間との仲を良くした」

「アンタ、ここで何してんの？」

霊夢はドラゴンの胸ぐらを掴んで仮面を外そうとする。

「ノウ！　マスクが、我が命、マスクがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

マスクを死守しようとするドラゴン、だが霊夢の握力はマスクを軽く破壊し、こめかみに食い込む。

「アイアンクローが頭にィィィィィィィィ！」

「待て！　それ以上するとソイツが死ぬ！」

「妹紅、そう言ってマスクを外す手伝いをするな！」

「中々の握力、まさか！　あの時の博霊の巫女か？」

ボロボロのマスクを取り換えたドラゴン、霊夢は未だにマスクを狙っている。

「いやぁ、あの時はすまない、少し私も気が動転していてな、一品ぐらい奢るから許してくれないか？」

振り返って奥へと戻ろうとするドラゴン、だが霊夢はさらに追い打ちをかける。

「晴輝、魔理沙の所へ帰らなくて良いの？」

「……」

「晴輝……晴輝なのか！」

妹紅が大声で叫ぶ、叫び声は他の客の耳に入り、注目の的となる

がドラゴンがその場を落ち着かせる。
「晴輝……はて誰の事やら」
「もしもそれが本当なら私達はそれを追求しなければならない、そうだろ妹紅」
「慧音の言うとおり、キッチリと落とし前付けてもらおうか」
何も喋らず、ただ立ち尽くすドラゴン、だが無言のプレッシャーが彼の仮面から漏れる。
「もしも、私が晴輝と言う人物だとしたら、正体を隠す理由があるのかも……知れませんね」
「否定か？」
「否定などしませんよ、一年前貴方を止めたのが私なら、つい数ヶ月前に来たのは誰でしょうね」
そう答えてドラゴンは注文の品を取りに行く。
真実を悟られない様に。

６４ 楽園の巫女は今日も騒がしくない（後書き）

主「番外編……ゆうかりんとのイチャイチャ生活でも書きますか、ゆうかりんファンのためにも」

晴輝「そこそこ期待してますよ」

６５ー地獄鴉と不良天人は今日も騒がしい（前書き）

時間軸　開店数日前

皆さまのおかげでアクセス数が総計三十万！
ありがとうございます。

65 ― 地獄鴉と不良天人は今日も騒がしい

マスク・ザ・ドラゴン、地獄から這い出てきた龍の化身、だがその正体は神田晴輝だった。

彼は謎の秘密組織、地霊殿に捕まり、改造人間にされたのだ、だが彼の心に正義と言う心が芽生え特殊なカードを使う事でマスク・ザ・ドラゴンへと変身するのだ。

「何か、某特撮ヒーローみたいな匂いがするんだが、てんこ、もう少しマシな説明ない？」

「てんこ違う！　天子！　私は天子！」

「天子さん必死ですね～」

龍神堂から響く数人の声、天界、地上、地底の三人が今、太陽の沈んだ人間の里の小さな家から響く。

マスク・ザ・ドラゴンにして、龍神堂の主、神田晴輝。

天界で有名な不良天人、比那名居天子（ひなないてんこ）

旧地獄の太陽、地獄鴉、霊烏路空（れいうじうつほ）、通称『お空』。

「まぁ、良いか」

「良くない！　もう一週間近く経つのに何時になったら名前で呼んでくれるの！」

てんこが愛称としている晴輝、だがすでに半泣きの天子を見ると良心が痛む。

「ごめん、ごめん、でもなんか、天子って慣れないんだよな『天使』みたいで」

「てんこさん天使と言うよりは小悪魔っぽいですし」

「小悪魔いる！　紅魔館に居るから！」

そんな日常的な会話、生まれも暮らし、種族も違うがたった一つだけ共通する言葉があった。

『家出』である。

日々のつまらない日常に飽きた天子は地上へと逃げてきた。

だが所持金はゼロに近く、当てもなかったので路頭で餓死寸前だった所を保護した。
そして俺に会いたいが為にさとり様に黙って飛び出してきたお空、偶々俺が外で遊覧飛行をしていたから何とかなったが、俺が居なかったら確実に天子と同じ運命を辿っていた。
「それじゃあもう寝るぞ、明日からまた材料集めだ」
龍神堂を開く為に有り金の大半を使って材料調達をする。
この家は妖怪の集まる家、として競りに出されていた物を格安で買ったのだ。
風呂、トイレ、キッチン設備、さらに家具がいくつか放置され妖怪など一匹もいない、まぁ、今では三人の隠れ家として使用させてもらっている。
「それじゃ、また明日」
「おやすみ、晴輝」
「おやすみ、お晴」
いくら仲が良くても一緒に寝ると言うのには抵抗がある、それに俺には前科があるのでこれ以上罪を重ねれば……考えただけでも涙が出る。

家の屋根に上り月を見ながらあの仮面を見て笑う。
「この仮面とは絶対離れられないと思う」
仮面の龍の字を指でなぞりながらそう呟く、晴輝の覚悟は決まっていた、この仮面と一生付き合う覚悟、彼にはもう神田晴輝として生きる、そんな選択肢はすでに無いのだ。
「まだ起きてたの？」
そこに天子が来る、俺の替えのYシャツをパジャマ代わりにしている、決して作者が裸Yシャツが好きだとかそんな事は無い。そんな事は無い！
ついでにお空も裸Yシャツだがして作者が裸Yシャツが好きだと

かそんな事は無い！
「隣、座るわよ」
天子の青い髪は月夜に照らされ、普段以上に綺麗に見える。
「まったく、一人で色々抱えて、ノイローゼでも抱える気？」
「何をすればいいか分からないんだ、俺の明日は闇に包まれてる」
ネガティブな晴輝に天子は両手を使って視界を遮る。
「てんこ？」
「先が見えないのなら私が隠してると思いなさい、貴方の道が暗闇でも足元は見えるでしょ、ゆっくり、ちょっとずつでも進んで行きましょ、ね？」
彼女の手から温もりを感じて、心を落ち着かせる。
「ありがたいよ、天子」
「やっと名前で呼んだわね」
「てんこやお空となら、俺もまた羽ばたける、俺が蜥蜴から龍に戻る間で良い、少しだけ手伝ってくれ」
「天子、そう呼んだら手伝ってあげる」
「てんこ」
「天子！」
「てんこ」
「天子！」
「天子」
「てんこ……ってアレ？」
笑いを堪えて膝を叩く晴輝、だが天子は涙目である。
「これで手伝ってくれるな、てんこ」
必死になって笑いを堪える晴輝に天子の悪魔の様な悪戯が晴輝を襲う。
唇に触れる柔らかい感触と鼻を摘む細い指、天子は晴輝を驚かせようとキスをして呼吸できない様に鼻を摘んだ。
「んーんー！」
鬼二は劣るが天人の力も強く、人の力では抜け出せない、さらに

舌を絡め合わせて来るので心身共に痺れて行く。
絡まる舌から唾液が注がれて、もう、色々と限界である。
酸素とか長いとかそんな理由ではない、体が火照って熱くなり、理性も吹き飛び、紳士から野獣へと変貌する晴輝、もうあの時の二の舞とか、同じ罪を重ねるとかそんな事は頭にない。
ただ、求めてくる相手に答える為に、溢れる欲望を出す為だけに動く。
野獣モードの晴輝の頭にはある言葉しかない。
「据え膳食わぬは男の恥！」
「やーん、ケダモノ～」
この男、本当に死んだら次の主人公を誰にしようか。
リア充は全て爆発すれば良いと思う作者からの切ない願いである。

６５ー地獄鴉と不良天人は今日も騒がしい（後書き）

主「ニコニコ動画を日々見続け、すーぱー廃人化」

６６ 一鼠との出会い（前書き）

失踪から十六日目

前回はすみませんでした。

改めて月曜、木曜、日曜に投稿します、すいませんでした。

66 一鼠との出会い

八月の初め、晴輝消失から一月近くたった。
今日も龍神堂は大忙し、どこぞの神社とは違って金の流れも良く、大繁盛と言うにはほど遠いが、若い娘や子供に人気が多く、信仰も多いのでどこぞの神様にも眼を付けられてしまう。
昼時、客足も増えていたこの時間帯に一休みに外へ出た。
「何だこれ？」
そこで店前の落とし物を拾い、砂埃を掃う。
置き物っぽいが何となく違う様な、塔を思わせる形である。
「置いとくと壊れそうだし、店に飾っとけば情報も来るかもな」
店に戻ろうとするとドラゴン、だが目眩を起こし壁へと凭れかかる。
「くっ！　流石に七ゲームはキツイぜ☆」
この男、昨日の晩も三人でお楽しみでしたねコンチクショーですよ、三人ですよ、この節操無しが！
「絶倫と言ってくれ」
だかドラゴンもいよいよ取り返しが着かない所まで来てしまったのかもしれないと反省している。
「これで子供でも出来たら……」
「あなたー、出来たわよ」
天子の和菓子の追加が出来た事を違う意味でとらえたドラゴン、
「あばばばば」的な事を言い放って倒れてしまう。
「魔理沙、ごめん、俺、やっちまった」
真実を聞かず自分で解決してしまったドラゴン、仮面から零れ出てくる雫は誰にも分からない。
日は落ち、丑三つ時、何故か槌で釘の様な物を打っている様な音

が響く、人間の里。
　その人間の里の外れに位置する命蓮寺、妖怪と人間の共存を目指している。
「ナズーリン！」
「如何したんだ、ご主人、まぁ、どうせ『宝塔を失くしたから探してくれ』とかだろう？」
「くっ！　何故分かったんですか？」
「長い付き合いだからね、と言うか、日が落ちる前に行って欲しかったな」
「うう、今まで仕事とかお茶菓子を食べていて遅くなってしまい……」
　千葉にある某遊園地のマスコットの様な少女、鼠の少女、ナズーリン、灰色の髪、鼠の耳、尾が特徴である。
　そして彼女の主人、寅丸星（とらまるしょう）、ドジっ虎、ひんぬー、↑いや、違う巨乳だ！
「何か、私の紹介適当じゃないですか！」
　余談だか作者は脳内で彼女をDだと思っている。
「作者さーん！」

「ここかな」
　ダウジングロッドを使い、辿り着いたのは最近噂の和菓子専門店、『龍神堂』である。
　失くした本人、星曰く、出来るだけ静かに、家に入り、宝塔を回収する事が望ましいらしい。
「まったく、泥棒白黒じゃあるまいし、まぁ……偶には悪くないか」
　針金を口に含み、形を変形させて鍵穴に入れる、鍵は開き、計画通りとドヤ顔で潜入するナズーリン、探し物は店に飾られていたので回収はあっさりと出来た、だが……
「ん？　何だ、起きているのか？」

奥から聞こえてくる声、まるで喜んでいる様な、気持ちの良い様な声。

「な、何だろか、聞いてるだけで顔が紅潮するこの声は……」

声の元へと息を殺して近ずく、何か、これ以上踏み込むとイケナイ様な気がするナズーリン、だが興味心とは知らぬ間に体を動かす。

一室の前、声を殺そうとするが何故か呼吸が乱れる、まるで緊張している様な、その姿、初めてエロ本を買った男子高校生の様な……

「その話、前にも聞いたことがあるぞ」

生唾を飲み、覚悟して襖を開ける。

「あっ、らめぇ、そこ、強くし……ちゃ！」

「……」

ゆっくりと襖を閉めて現実から逃げる。

「（今のはアレだよな……性交と言うやつか？　いや違う、たぶんマッサージの延長線だ、ならあの地獄鴉の体の白いのは？　ケフィアか！　そうだケフィアだ、そうだよ、そうに違いない、ならなぜ二人は裸？　分かった、ケフィアが……ケフィアの……）」

「お客さんにしてはまるで泥棒みたいね」

「……ッ！」

背後からナズーリンの口を塞ぎ、首に手刀を入れる、意識を失くしたナズーリンはそのまま床に倒れる。

作者の俺が言うのが少しおかしいが、この出会いは最低であると内心、思った。

６６ー鼠との出会い（後書き）

主「現在新作製作中、まぁゆっくり読み直して言ってね！」
晴「凄い事ここで言ってますね」
主「主人公は喧嘩好きって言う奴」
晴「え、ちょ、やるよやるよ詐欺じゃないんですか！」
主「どこに驚いてんだテメェ」

67 ―みょんな噂

「ハッ！」
視界に入って来たのは三人の顔だ、地獄鴉、天人、見知らぬ男、それぞれ心配そうな顔で私の顔を見ていた。
「いやぁー、大事に至らなくてよかった」
「てんこさん、少し力入れ過ぎだよ」
「お空、天子だってば」
三人は心配そうな表情から一変、温かい表情で迎えてくれた。
「家に来た理由を聞かせてもらいたいが、何か食べるか？」
「ああ、少し君の家に用があってね」
懐の宝塔を取り出し、男に見せる。
「つまり、自分の物を取りに来たって所？」
「私の物ではなく、主のだが……まぁ、同じだ。龍神堂（ここ）の店主は気の良い事で有名だ、出来れば明日取りに来たかったのだが、ご主人が……な」
経緯、行動、目的を言い、解放されると思っていた。
「それじゃあ、俺の探し物も引き受けてくれないか？」
「はい？」

「なるほど、君は一月前に居なくなった神田晴輝と言う事か、知ってるよ、魔法使いが泣きながら探していた時期があったからな」
「もう確実に死んだ、十三回位殺される、転生しても殺される」
「ま、まぁ、女を本気にさせた罪だ、優柔不断は身を滅ぼすぞ、つ、ついでに、私は……何時でも……」
鼠に励まされる人間、最後のセリフは小さくて聞き取れなかったが「さっさと殺されないかなぁ……」まったくもって情けない話だ。
「何か、今作者の声がしたんだか？　てんこ、お空、聞こえなかっ

たか？」
　二人とも首を横に振り、否定をする。
「何処までメタな話をしてるんだ……」

「とりあえず、噂では君の武器は四人が所持しているらしいが、その人物の場所を示す、それでいいんだな？」
「よろしく頼む」
　ナズーリンは外へ出てダウジングの道具を持って飛んで行った。
「私達も手伝うわよ！」
「うにゅ！」
　お互いに武器を持つ二人、天子はひそうのつるぎ、お空は制御棒である。
「悪いけど、今回は一人で戦いたい、俺のご先祖の世話は、子孫である俺がするのが当然」
「そう」
「うにゅ……」
「……協力してくれるなら、二人に頼みがあるんだけど」

「龍符『竜に翼を得たる如し』！」
　スペルカードは、晴輝の翼となり、光となり、消えて行った。
「それじゃあ、行ってくる、明日の仕込み、よろしく」
　学ランにマントの衣装、仮面はずらし、顔の半分が見えるようにしている。
　腰には風呂敷に姿を隠した刀の様な物を差し、小包を着けている。
　翼で空気を掻き、足が地面から離れる。
「それじゃあ、行ってくるわ」
　手をひらひらと振り、ナズーリン、お空、天子に合図を送る、これは『離れろ』と言う意味を持つ。

「では、また会おう、諸君！」
マスクを着けている時と同じ、掴めないキャラを使う。
地面を二、三度蹴って一気に上昇すると風が三人を襲う。
「立つ鳥跡を濁さずと言う言葉を知らないのか彼は？」
「お晴は渡り鳥じゃない、だから、また帰ってくる」
「さて、仕込みでも始めますか」

67 ―みょんな噂（後書き）

主「久々にモンハンをプレイ、だがジンオウガに秒殺、俺弱いぜ」

晴「執筆してください」

番外編一鼠と鴉と天人

厨房、残された三人は下ごしらえまで済ませて、さっきの話をする。

「それにしても、今回は一段と声大きかったね」

話を振ったのは天子であった、退屈な時間を談話で過ごそうと計画した天子はつい最近の話で場を盛り上げようとする。

「うにゅ？」

「夜伽だよ、よ・と・ぎ」

お空は数分考えた後、言葉の意味を理解し、顔を真っ赤にする。

「君達は何の話をしているんだ？」

「何って、自分の眼でみた本人が何を仰って……」

「アレは事故だ！　きょ、興味もあったが、だが！」

「はいはい、誤魔化さなくてもバレバレだっちゅうに、お空も見られて興奮してたみたいだし、でも……まぁ、興味を持つのは分かるよ」

「んにゅ、確かに、満足するまでやってくれるし、何しろ……」

「逝き地獄と言うか、快楽の絶頂のオンパレード……と言うか」

分からない皆さんは次の話へ、分かる人は……ケフィアだと思ってね。

「いい加減にしないか、その、何だか私まで変態じゃないか！」

「え？　変態じゃないの？」

「違う！　断じて違う！」

そんな楽しい会話の中、不安が彼女達の思考を狂わせる。

「お晴は……帰ってくるかな？」

「信じるしかない、彼が私達を信じたように」

この会話にイマイチ馴染めないナズーリン、だが不安なのは同じである。

「心配だ」

「おや？　ナズーリンさん、彼の事が心配ですかな？」
天子は何かを悟った、相手を茶化す様な口調で言う。
「ああ、そうだな、心配だよ、彼が他の女性を襲うと思うと」
「それは無いよ」
お空は微笑んだ。
「お晴は確かに貪欲だよ、まるで一滴も残さない様に、でもお晴から襲う何て無いよ、絶対に」
「確かに、私達が喰われた事なんて無いな」
「二人も抱いて、彼は……」
「それ以上いるよ」
「！？」
「キスメ、ヤマメ、パルスィ、ゆーぎ……私達を入れて六人」
元気に明るく答えるお空に対し、天子は憤怒、ナズーリンは羞恥の感情を抱いた。
「ほほう、初耳、帰ってきたらお仕置き……お空、拘束具」
「ハイよ」
何処から取り出したロープを、カウボーイの投げ縄のようにくるくると回す天子、だがそのスピードはどんどんと落ちて行き、仕舞いには地面へと垂れる。
「帰って……来るわよね」
「天子さん、それまで待っとこ……ね？」
テンションが下がって行く二人に彼女は呆れる、だが対象はお空でも、天子でもない。
「（帰ってこなかったら如何しようか、君は……何を望んでいるのかな）」

番外編一 鼠と鴉と天人（後書き）

主「最近、ニートがやめられない」
晴「働いてください」
主・輝「はたらかないでござる！」

69 ― 弾幕ごっこ【魂魄妖夢】前編

「スペルカードルールは無し、相手が降参または死んだら勝ち……
……それで良いわね？」
「ありがたい、まぁ、遊び気分で来てくださいな妖夢さん」
「手加減はしませんよ」
幽々子の合図で始まる弾幕ごっこではない、真剣な命の駆け引き、
晴輝はマントを脱ぎ捨て腰の武器を構えずに立っていた。
「何で構えないんですか？」
「好物は最後まで取っておくタイプでね、残念だけど俺は君を舐めてる」
「いい度胸、良いでしょう、この楼観剣に斬れぬ物などあまりない！」
彼女の口調が変わり武器を構える。主人の手前、負ける事は恥を晒す、負けたら死を決意しているのだろう。
「この世に生まれて一九年、その人生に意味は無く、足掻いて生きた一族の恥曝し、龍神堂店主、神田晴輝、互いに魅せよう生き様を、綺麗に散りゆくその日まで、いざ……参る！」
「それじゃあ、始め！」
合図と共に仕掛けてきたのは妖夢の方である、刀を握り横腹から斬ろうとする彼女、いや、彼女達の刀を素手で受け止めた。
「ッ！」
「何で分かった！　みたいな顔してるけど、俺はお前の事を良く見てる、たった数分だけどお前の半霊居ないの最初から気付いてたぜ」
妖夢は距離を取り後ろへ下がる。
半霊も後ろへと下がり警戒をする。
「中々ですね、ですが、まだ完全には見切れていないようですね」
Ｙシャツは切れていた、あの時、完全には見切れず数発良いのを貰っている。

「たっく、刀つかんだら血が出……ありゃりゃ？　血が出てないわ」
　刀など素手で掴んだら確実に血が出る、なのに血が出ていない、この状態を妖夢は理解出来なかった。
「如何いった仕掛けか知りませんが、素手の貴方に後れを取る様な私ではありません！」
　再び二人で攻撃を仕掛ける妖夢、避ける事も受ける事もなく、鋭利な牙は晴輝の首と胴体を引き裂いた、と思ったが。
「ゴメン、痛くないわ」
「なっ！」
　刀は肉に入る前に皮膚でその刀身を受けていた、切れた皮膚からは血が垂れるが、当の本人は全く痛がってない。
「確かにね刀の修行は行ってきたみたいだけど……何？　刀に頼り過ぎて力が出てなくない？」
「（凄い、妖夢の弱点を見抜いた、流石は紫の連れてきた外来人、でも……痛そう）」

「それじゃあ、俺も本気だそうかな」
　二人の妖夢の頭部へ軽くチョップを入れる。
「なっ！　ふざけてるんすか！」
　今、確実に晴輝は相手の首を落とす事が出来ていただろう、だがそれはしなかった。
「ふざけてないよ、ただ、同じ刀を使う物として、修行ぐらいは手伝ってあげようかなと」
「余計なお世話です、次行きますよ」
　次の攻撃を教えてくれた優しい少女、その少女へ腰に付けている袋から竹筒を投げる。
「ふざけないでください！」
　彼女が竹筒に攻撃した時、晴輝はすごい勢いでその場を離れた。

「妖夢！　危ない」
「えっ？」
竹は謎の警告音を放ち、爆発した。
規模が大きく半径五mは爆発しただろう。
「お空特製の爆弾だ、竹筒でカモフラージュしてるから分からなかったろ」
幸いにも相手は死んではいない、辛うじて避けている。
「おお、清く正しい白、アンタは如何思う？」
「そうね、もう少し大人っぽい下着でもいいんじゃない？」
「え～、でもストライプとか如何すか？」
「それよりも黒か紫ね、下着で魅せなきゃ損よ、損」
自分の従者の敵だと言うのにパンツの話で意気投合、何故かパンツ談義へと発展していく。
「ちなみに幽々子さんは何色で？」
「私？　ん……今日は赤ね」
「貴方達は……何盛り上がってるんですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
地に伏せていた妖夢も自分の醜態に気付きね怒りながら立ちあがる。
「白い天使をありがとう」
親指を立てた両手で晴輝は無邪気に笑う。
「こんの！」
刀を力任せに振る妖夢に二つ目の竹筒を投げる。
「同じ手は！」
後ろへと下がる妖夢に対し、爆破予想地から逃げない晴輝。
「ゴメン、これさっきのじゃない」
そう言って眼を腕で隠すと竹筒は眩い光が放たれる、閃光玉ならぬ閃光竹である。
「くっ、眼が」
「まだまだ俺のターン」

一瞬で背後へと立った晴輝は妖夢のカチューシャを取り違うカチューシャへと付け変える。
「あら、可愛い」
幽々子が見たのは猫耳カチューシャで招き猫のポーズをさせられてる妖夢であった。
「……？　ハッ！」
自分の頭への視線に気付いた妖夢はカチューシャを取り外し折った。
「オウマイガー！」
晴輝は頭を押さえてその場へと伏せる。
「こんの！」
刀を構える妖夢、だが。
「アレ？」
刀は刀でも木刀、それもヒビの入った折れかけである。
「刀ならこっち、後、足元見てみ」
「？」
足元に転がっている無数の竹筒。
何故か屋敷の上へと非難している晴輝、彼女はこの二つの事柄を繋げる。
「にゃぁぁぁぁぁぁあ！」
そのまま横へと飛ぶが竹は爆発しない。
「あ、ゴメン、それ偽物」
散々コケにされた妖夢の怒りは頂点へと達し、顔を赤くする。
「アハハ、可愛い所見せてもらったし、じゃあそろそろ」
愉快そうに笑う晴輝の顔は一変鋭い目つきへと変わった。
「本気で行くか」

69 ― 弾幕ごっこ【魂魄妖夢】前編（後書き）

主「最近何だか頭が冴えない、とりあえず皆、サークル『アールグレイ』の添い寝ＣＤ聞いてこい！」

70 ー弾幕ごっこ【魂魄妖夢】後編

「人符『現世斬』！」
「ドラァァァァ！」
刀と手刀がぶつかり合う、屋敷の庭の所々は抉られ、削られ、壊れている、手刀で刀を持っている相手と戦う人間は、晴輝が幻想郷で初めてだろう。
「あ、でも霊夢とかデコピンで紅魔館を半壊させたからなぁ」
「何を！　無駄口叩いていないで刀を持て！」
まぁ、素手で戦って押されていると思うと、誰でも腹が立つだろう。
「ハァァァァァァァァァ！」
力押しで負け、そのまま弾き飛ばされる。
壁に当たり、瓦礫が雪崩の様に晴輝を飲み込む。
「龍符『竜に翼を得たる如し』」
瓦礫を自慢の白い翼で掃い、上空へと飛ぶ。
「良し、合格」
「何を言ってるんですか？」
「力、速さ、技量共に全部バッチリ、そろそろ本気出すわ」
腰に差している刀の様な物を取り、構える、だがその武器の殺傷能力は低く、戦闘向きではない。
「木刀？」
「木刀ですが何か？」
「ふざけてるんですか？」
「こんな武器しか持って無いんだ、まぁ、次で決める」
スペカを取り出し、投げる。木刀を構えてそのまま呼吸を止め、
「刀符『伝家の宝刀』」
スペカが燃え、晴輝の体を炎が包む。
「ドラァァァァァァァァァ！」

妖夢目掛けて斬りかかる、妖夢は刀で防御するが力負けし、そのまま後ろへ下がる。
「まだまたぁぁぁぁぁぁぁ！」
燃える木刀、炭になる前に決着を付ける為に剣先を妖夢へ向け、業火が妖夢を包む。
「くっ！」
木刀と刀、どちらが強いと誰もが後者を答える、だがその木刀一本で本物相手と互角、それ以上で戦っているとしたらそんな事が言えるだろうか。
「ラスト！　龍撃『諸刃の剣』」
木刀が燃え尽き、晴輝は燃える翼から無数のレーザーを放つ。
その数軽く一千を越え、降り続く雨の様に、燃えおがる炎の様な勢いで、彼女の元へと一直線へと向かう。
「決着が着いたか？」

最後の一撃が終わり、能力も解き、妖夢が飛ばされた所へと歩いて行く。
「大丈夫？」
「遠慮は無用、さぁ、トドメを」
「幽々子さーん、カウントお願いしませんか？」
晴輝はその場に座り、幽々子へ合図を送る。
「如何いう事？」
幽々子は理解しているのだろう、だが理由を理解できていない、そんな顔をしている。
「もしも十数えてどちらかが立たなかったら、『引き分け』って事で」
「……優しいのね」
「自分勝手っと言ってください」
幽々子はカウントを始める、だが両者立ちあがる気配は無い。

「何故、立たないのですか？」
「疲れた、案外あのスペル、体力使うんだ、それにトドメを指す武器は無い」
「まだ立てるほどの気力は残ってますよね？　それに私の武器を使えば……」
「……真剣に向き合った女に、恥かかすのは男として如何かと、ああ、女ったらしのつまんないセリフだから、流しても良いですよ」
「そうですね、覚えておきます」
「十っと、さぁ決着は着いたわ、私は寝るから、お探しの物は倉庫にあるけど取って帰っちゃダメよ」
取って帰っても良いとでも言いたそうな顔で、部屋に戻って行く。
「よいしょっと、おろろ？」
立ちあがるが足が震え、上手く足が地面に垂直にならない。
「私もまだまだ未熟者ですね」
そう言い終わると目蓋を閉じる。
「寝てる」
安心したように落ち着いた寝息をたてる妖夢、外で寝かすのも鬼畜なので屋敷の中へ運んだ。
「さっきまで真剣だった少女は何処へやら、まったく可愛らしい顔して。誰だって未熟者だよ、そこから強くなるんだよ」
彼女の顔が赤くなった様な気もしたが気の所為にしておこう。

早朝、
「あれ？　今……幽々子様の朝ご飯！」
服を着直し、台所へ駆ける妖夢だが、既に十人前近くの料理と、それを食べている幽々子がいた。
「おはよう妖夢、昼まで寝てて良いわよ、突然の来客で疲れてるでしょ？」

「あの……この料理は？」
「彼が作って行ったわ、食べたら寝なさい、無理は良くないわよ」
「でも、庭の手入れが……」
「それも彼がやって行ったわ、お詫びの印って言って」
「……」
二人の戦いが終わったのは午前の三時辺り、現在時刻が六時としたら、晴輝は三時間で全てやってのけたと言う事になる。
「ついでに伝言」
「……？」
「寝顔可愛かったって」
妖夢は顔を真っ赤に染める、幽々子は何かを悟った様遠い眼で、
「若いって良いわね」等と愚痴を溢していた。
「変わってるわよね、彼」
「そうですね、いきなり乗り込んできて、剣の指導を勝手に始めたり、変な能力使ったり、台風みたいな人でしたね」
桜の花びらが綺麗に舞う、まるで彼が風の子の様だった、強くなったり、弱くなったり、背中を押したり、支えたり。
「幽々子様、午後はお団子でも食べに行きませんか？」
「やってると良いわね……龍神堂」

70ー弾幕ごっこ【魂魄妖夢】後編（後書き）

主「てめぇら、ニコニコ動画見てこい！
『無気力が幻想入り』シリーズ見てこい！
以上、宣伝でした」

71 ― 苦労人達の集会（前書き）

失踪から十七日

読んでくれる皆さんへ、読み終わった後に活動報告をチェックしてください。

71－苦労人達の集会

八月の最初、夏の暑さと蒸される様な熱気に体は悲鳴を超え、絶叫していた。

「テラ寝不足なう、睡魔に襲われヤバス」

仮面を付けて今日も仕事に勤しむ、だが疲労、睡眠不足、その後の説教等で身も心もボロボロである。

「誰かぁ、助けてくれぇぇぇぇぇ」

そう呟くと足が縺れ、バランスを失った体が倒れそうになる。

だが誰かに支えられ地面とキスする事もなく、態勢を立て直す。

「大丈夫ですか？」

「昨日の友は今日の敵と言うやつですか？　妖夢さん」

仮面がずれ、顔が半分出てしまう、だが妖夢に抱きつかれているので他の人には見えてない。

「逆ですよ、重症ですね」

「最近ほとんど寝てなかったから、パネェ」

「ワロスじゃありません、少し休んだら如何ですか？」

「だけど、他の皆が働いてるのに自分だけが寝てるのは……」

「店のから心配そうに見てる人が見えるんですが、お客さんも心配してますよ」

大丈夫？　無理しないでと、励ましの言葉を貰い少しだけ眠気を吹き飛ばすドラゴン。

「そうだね、今日は五時までの営業にするか、看板出しとこう」

フラフラと覚束ない足に無理やり力を入れて前へと進む。

「お晴、お空は居るかしら？」

「店主さん、昨晩は宝塔、ありがとうございました、ナズーリンの主人の……」

「すいません、ここに総領娘様が……」

「ああ、さとり様、それに……」
虫の息、体は命令を受け付けず、精神も臨界点を軽く突破する、そのまま地面へと倒れ込む。

龍神堂の客間、布団の上で目が覚めた、倒れた原因は過度の疲労、睡眠不足から来る軽い発熱、時刻は閉店から三十分ほど後、喉を潤す為に台所へ向かうが……
「お空、いい加減戻って来なさい、アナタが彼と居るおかげで私……こいしのストレスが大変なの、それに仕事とかそういう面も……」
「ですから、総領娘様にはもう礼儀を付けてもらいたくて……」
「まったく、ご主人、いい加減に物を失くさないでほしいな、そのお陰で……ま、まぁ！　とりあえずご主人、普段から気を配っておけば日々の弛んだ生活も……」
アレ何この状況、お空はさとりに叱られ、てんこは綺麗な美人に生活指導され、何故にナズーリンは自分の主人に説教してんの？
どっちが偉いの？
「お晴～」
「晴輝～」
「店主さ～ん」
お空、てんこ、ナズーリのご主人が俺にダイブする、それを何故か色んな怒りをぶつけるさとり、綺麗な女性、ナズーリン、三人をとりあえず宥め、自己紹介へとこじつけた。
「私は地霊殿の主、古明地さとりです、お晴の元主人で、今も旧都、地霊殿との交流関係は途切れていませんので」
何か、さとり様の第三の眼から対抗意識が溢れ出ている。
「私は永江衣玖です、総領娘様の」
「てん……天子から聞いています、優しくて美人だっ

て」
「きょ……恐縮です」
衣玖さん、顔を合わせるのは初めてだが、てんこの言ってた通りの優しい人だ。
てんこ事態は悪く言っていたが、その時の顔は明るく輝いていた物が多い。
「うう、私はナズーリンの主人、寅丸星です」
ナズーリンに絞られ、軽く涙目でこちらを見る星さん、だが、だんだんとその眼は闘志に燃えてくる、何故だかこちらも、この人と戦いたい衝動に襲われ……違うからね！　性的な意味じゃあ無いからね！　決闘（デュエル）的なアレだから！
「何故でしょうか、貴方を倒したい！」
「ドララララ、こちらも本気になろうか」
龍と虎、双方が交える事は数千年も前から決まっている、なぜならば最強は一人で良いから！
お互いに構える、それをナズーリンとさとりが止めに入る。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「ドラァァァァァァァ！」

「アレから小一時間、病人だってのにタフね」
天子が衣玖の説教を聞き流しながら晴輝と星との対決を見ていた。
「皆さ～ん、ご飯の準備が出来ました」
台所から大皿に大量の料理を乗せた妖夢がナズーリンと共にやって来た。
「わ～い」
「と言うか何故、貴方達は当たり前の様な顔で、この家の台所で料理を？」
「あの……先日は色々あったし、晴輝さんに手料理食べてもらいたくて」

「私もご主人の借りがあるからね、恩返しをしても良いだろう？」
二人の言動を怪しいと睨むさとり、当の本人は星と勝負をしている、と言ってもだんだんとランクが下がって行き、今は指相撲で落ち着いた。
「お晴！」
「はいっ！」
さとりの言葉で眼が覚め、背筋を伸ばして振り返る。
「貴方、熱は？」
「星さんの御蔭でかなり落ち着きました、全力で運動するって良い事ですね」
妖夢から渡されたタオルで汗を拭き、その場へと座る。
「ちょっと汗臭いんで風呂に入ってきます」
「いや、気にしてないわ、だから入ってこなくても」
「こんな美人たちの前で汗臭かったら失礼なので、それでは」
その場で軽く頭を下げて風呂場へと向かって行った、残されたメンバーは顔を紅潮して場を盛り上げようと、無理に笑いを作る。
「ま、まったく、お晴は……最近天然の女殺しへと進化して……」
地霊殿時代から良く接してきたさとり、色々と成長した晴輝に心を奪われてる。
「私、あんな良い笑顔で美人って言われたの初めてです」
「衣玖、大丈夫？」
初対面の衣玖までも頬を赤くする。
「女ったらしなのが残念だけどね、まぁカッコいいし、大事にしてる分にはマシなほうか」
「ナズーリン、人を外見で判断してはいけません、それにとてもいい人じゃありませんか」
「いやご主人、本当に彼は女ったらしなのだが……」
「それは……如何いう事ですか？」
空気が変わる、辺りに漂うみょんな殺気、今にもポルターガイス

トでも起こりそうに物体が振動を始める。
何かしらの殺気に気付いた天子とさとり、そっとその場から離れようとするが、
「詳シク話を聞カセテ貰イマショウカ」
妖夢の姿へと変化した半霊と、妖夢が二人を捕まえる。
「ちょ、妖夢さん、怖い、別に良い話じゃないわよ」
「そうそう、ここの空気が変わっちゃうからそれは……」
……」

風呂を上がり、火照った体を覚まそうと牛乳を飲みに来たのだが、机の上でお空がのびていた。
「お空、大丈夫か？」
今回の売り上げの計算を終わらせたお空、今回は異常なほどの売り上げだったので、計算に頭を使ったお空は頭から煙を出していた。
幽々子の御陰で一週間分の材料は底を尽き、臨時休業と言う事で一週間の休みである。
さらに代金が不足していたので妖夢が一時的にこっちへ働きに来ている。
「お空～、起きろ」
「うにゅ……もう無理」
とりあえず頑張ったご褒美でも買ってやろう、そう思ってお空を抱きあげる。
「さてと、飯の時間だ」

「それで晴輝はイっちゃったんだけど、私には記憶がないんだけど、その後はまるで獣みたいに……」
「今日はハードプレイにしてやろうか？」
天子達の怪しげな会談にお空を連れて入ってくる。

「そんな生々しい話、誰が聞きたいんだって……皆興味津々ですか」
「お晴……キスメやヤマメ、パルスィさん、勇儀さんでは飽き足らず、天子さんにまで手を出して……」
「お空も食べてぇ～」
「！」
お空のタイミングの良い寝言に皆驚く。
「あー、ご想像にお任せします」
もう面倒になって来た晴輝、お空を皆の居る居間で横にしてやる。
「何か、もう手遅れみたいな雰囲気なんだけど、え、何？　全部聞いた？」
皆はコクリと頷く。
「そ、そう言えばお晴、貴方は魔理沙の所へ帰るって言ってませんでしたっけ？」
今さらだな、そう言って頬を掻く。
「てんこ、風呂入ってきたら？」
「そうね、それじゃあ入ってくるわ」
そう言って風呂場へと行ってしまう天子、まぁ、あそこまで恥ずかしい話をしたのだ、この場からの脱出は誰よりも天子が望んでいた。
「それじゃあ暇だし、俺とてんこお空の出会い話でもしますか？」

71－苦労人達の集会（後書き）

主「現在、アニメ、漫画、ラノベから離れて休憩をとります、絶対に直して帰ってきますので！」

番外編　天と地との狭間

「暇ねぇ」
相変わらず天界は暇、毎日が平凡、争い事は無いこの世界にもう飽き飽きとしていた。
「衣玖、ちょっと飲み物取って来て」
「分かりました、でも天界から抜け出さないでくださいね」
「分かってるって」
衣玖は何度も私に言ってその場を離れて行った。
「計画通り☆」
全力でその場から逃げだし、天界から落ちる。
「適当にぶらぶら歩きますか！」
灰色の雲を抜け、そのまま地上へと真っ逆さまに落ちる。
全ては退屈な日常から抜け出す為、刺激を求め地上へと降り立つ。
だが、何の因果か分からないが上空をゆっくり飛んでいる少女と激突する。
ゴツンと鈍い音を響かせた、天子は頑丈な体の為にダメージはゼロ、だが相手は頭を抱えて空中で悶絶していた。
「痛ぁぁぁぁい！」
「ちょっと、ゆっくり飛んでると邪魔よ」
「うにゅ……確か？」
少女は頭を押さえながらも必死に脳を働かせる。
「天人の……衣玖さん？　でも胸が……」
ブチッと言う音が天子の頭から響く、絶壁、まな板、刑事ドラマの定番の崖等のコメントは死亡フラグを建てたと思え、彼女にとって胸の話は禁忌（タブー）である。
「ちょっと胸がFあるからって、何か？　挑発か、安い挑発ね、でも嫌いじゃないわ！　地獄鴉、霊烏路空！」
天子は緋想の剣を握りしめ、お空に斬りかかる。

「ッ！　光熱『ハイテンションブレード』」
相手の攻撃に素早く対応し、スペルカードで応戦する。
「今度はこっちから、爆符『プチフレア』」
「何の！　非想『非想非非想の剣』」

妖怪の森から一人の男が出てくる。
晴輝だ、まだ龍神堂を開く少し前、彼は苦しんでいた。
「あんなこと言われたら……な」
森に入る前、アリス・マーガトロイドと言う人形使いに出会い、彼女にこう言われたのだ。
『貴方は私達の邪魔なのよ、出来れば魔理沙に会ってほしくない、神田晴輝はすでに死んだのよ』
巨大な人形に囲まれ、武器を突き付けられた晴輝には、彼女の言う事を聞くしかなかった。
元々、俺が幻想郷に来なければ、彼女の恋は成就していたらしい、何か『お前がいなければ作戦は成功していた！』的な事をほざく、雑魚キャラみたいだったが。
今さら旧都に帰れない、帰ったら帰ったで気まずい。
「店でも開くか……和菓子屋でもすれば儲かるだろ」
一応は菓子職人を目指していたのだ、頑張れば出来ない事は無い。
何時までも魔理沙の家に居候しては居られないと思ったので、ぼろい家も買った、改装すれば店として使えるだろう。
「魔理沙に会いたいな」
まぁ、会ったら殺されることは確実だがな。
「てか、誰だよ、こんな嵐の中、弾幕ごっこしてるのは」

鉛色の空、いつ落雷が落ちても可笑しくない、豪雨が二人を包みこむ。

嵐の中、二人の戦いはすでに激戦へと変わっていた、服は無残にも破け、服と言うよりは布に近い。
「博霊の巫女も如何したのかしらね、ここまで派手に暴れたら来そうなのだけど」
「どうせ、バカみたいに寝てるんだよ」
仲が良いのか悪いのか、互いに息を切らしている、だがお空は今にも倒れそうだ、天人の無尽蔵とも言えるタフさには、勝てない。
「次で決めるわ」
「こっちのセリフ！」
スペルカードを互いに構え、最後の一撃を放そうとする。
「『全人類の緋想天』」
「鴉符『八咫烏ダイブ』」
天子は緋想の剣を投げ、お空はその場で一回転する。
「うりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
天子の攻撃に押されつつも、前進するお空、だが羽根はちりぢりに焦げ、仕舞いには髪も燃える。
「大丈夫か？」
お空の元へ晴輝が飛んで行く。
「アレ？　お晴？」
「ああ、お晴だ、霊烏路空、お空で良いんだよな」
「う、うん」
「ちょっと休んでろ、後は俺がする」
お空を抱き、手を前に出す。
「龍撃『諸刃の剣』」
背中から発射される追尾型レーザー、全方向に発射されたソレは天子のレーザーを相殺しようと突撃を始めた。
光線はぶつかり、相殺され消えて行った。
「ちょっと、人の喧嘩に手、出さないでよ」
「悪いが俺はコイツの知り合いだ、コイツがピンチだったんだ、助

けるのが義理だろ」
　お空は力を使い果たし、ぐったりとしている、脈と呼吸が安定しているので、無駄な心配はしなくて良いみたいだ。
「コケにされて、大人しく出来るタイプじゃないのよ」
「そうかい、ならまた日を改めて、それとも俺とするか？」
　白銀の翼を広げ、次のスペルを構えるのを見た天子は武器を下ろした。
「そうね、骨の一本ぐらいは、折ってやろうと思ったけど、興が醒めたわ、たっく、地上の観光に来たのに、何なのよこの大雨は！」
「天気の神にでも聞いてくれ、とりあえず、俺はコイツを自分の家に持って帰る」

「で？」
「で、て何よ」
　我が家、購入して数日、『妖怪の集う家』と言う曰く付きの家を安値を値切り倒し、博霊神社の十年間分のお賽銭並みの金額は、太りに太った財布の紐を緩める事など無かった。
　お蔭で改装して、店まで開けてしまいそうな勢いだ。
　そんな我が家に何故か同僚の対戦相手であった天子までもご来店である。
　出来れば今すぐに『閉店』の札を外へ出してやりたい、コイツと共に。
「仕方ないじゃない、コイツのお蔭で私は泊まる家は無く、野宿しかけたんだから、アンタが責任取りなさい」
「天界へ帰れば？」
「拒否、拒絶、残念ながらその提案は却下デース」
　家出して来た不良、とでも言えば良いのだろうか、家出してくる何て、頭大丈夫か。
「アレ？　何だろう心が痛い」

「如何したの？　頭痛？」
「そんなもんだ、んで、天人のてん『こ』さん」
「天子やっちゅーに！」
簀巻きにして今、ここから放り投げてやりたい、等と思う晴輝と裏腹に天子は徐に服を脱ぎだす。
「お風呂かして貸してくれない？　体冷えたし、それに服がずぶ濡れ」
「あー、廊下を曲がってすぐだ、出来れば脱衣はそこでして貰いたい」
「アラ？　天人の脱衣シーンが見れて嬉しくないの？」
「刑事ドラマで良くありげな『飛び降り自殺』をしそうな崖を見ても……グバァ！」
何処からか出した自分の顔より大きい石で晴輝の後頭部を叩きつけた。
「誰が崖よ、絶壁とは言われたけど、崖って、崖って」
「待て、話し合おう、てんこ」
「私は！　天子だぁぁぁぁぁぁぁ！」

番外編　天と地との狭間（後書き）

療養中。

72 一天子ご乱心

「と言ったわけで、俺は魔理沙の家には帰れず、てんこやお空と出会ったわけよ」

出会い話を済ませると皆、それぞれの感想を言う、だが一人だけ可笑しな事を言う輩が居た。

「あの総領娘様とシた時の話とか聞かせてくれませんか？」

空気を読む程度の能力ェを持つ衣玖さん、『それは空気呼んだの？』と思いつつ、あの時の事を思い出す。

「あの時……確か？」

「でも、さっき天子さんから聞きましたよ」

妖夢が半霊を抱きながら言う、一度した話を再びするとはどういう事なのだろうか、と皆が視線が衣玖の方を向く。

「私はずっと総領娘様を見てきました、嘘を吐いている事など丸わかりです」

「それでは改め……四日ぐらい前の話だけど、俺がお空としてる所を見たてんこが夜伽に来て、『不束ですが、お願いします』だなんて柄にもない事……ゴブゥ」

何者かが晴輝の頭に鈍器で攻撃した、それも何度も何度も。

血塗れの鈍器を持った犯人が頬に付いた帰り血を手で拭い、とてもいい笑顔で言った。

「わ・す・れ・ろ」

憤怒、羞恥、殺意が混じった、低いトーンの恐ろしい声で。

鼠や庭師だけではなく毘沙門天の虎、地霊殿の主、話を振った本人ですら怯え、首を縦に振る。

「ご飯にしましょ」

「ハッ、小町ちゃん、俺はマスク・ザ・ドラゴンだって！」

三途の河近くから何とか帰って来た晴輝は巻かれている包帯を撫でる。
「寅丸さんがやって行ったわよ」
「後でお礼言っとかないと」
「そんで、明日は店、如何するの？」
「とりあえずは閉める」
「あたし達も着いて行くわよ、今回は敵が強すぎる、それに相手は多数、それならパーティは一人でも多く、賑やかに」
「でも館壊すなよ」
「分かってる、お空とも打ち合せはした」
「そうか、なら、明日は紅魔攻めだ」

72 一天子ご乱心（後書き）

主「久々です皆さん、持病を治して帰ってきました。
実は木曜の朝辺りには治ってて、新作を連続徹夜で執筆してました。
そしてついに、新作『妖怪の山とバイト男』が連載します！
この作品はアルバイターである主人公がボーダー障子の正社員になるまで妖怪の山で修行する物語です。
クロスオーバーはしません（てか出来ません）
違う幻想の物語です。
出来れば読んでください。
自重はするかしないか迷っている」

73 ― 紅魔の館リベンジ

その日、珍しく龍神堂は臨時休業の看板を出した、何でも、夜の営みが忙しいとか言って、店主は流していたが、そんな事は無い。

お嬢様曰く、今日が運命の日らしい。

美鈴には不眠薬を投与、栄養ドリンク等も食事に取らせた、あの紅魔異変以来の厳重な警戒態勢である。

原因は一つ、レミリアお嬢様と妹様の持つ、神田晴輝の武器、『槍』と『斧』である、今日、仮面を着けた晴輝が来るらしい。

「主人であるレミリアお嬢様の名に懸けて、十六夜咲夜、全力で行きます」

三日月の夜、何時もより、静かだが、空気が違う、気の抜けない緊張感と何処から攻めてくるか分からない今、紅魔館は何時も異常に真剣であった。

外には美鈴の他、氷妖精が警護している、本人は遊びのつもりらしい。

だが不安だ、この中に敵が居るかもしれない、そう思うと誰もが敵に見えてしまう。

「安心しなさい咲夜」

「お嬢様」

「あの男は正体を隠している、どんな事情であり、それは顔見知りである魔理沙、霊夢が敵になっていない事が言えるわ、そうね、地底の連中、天界と船の奴ら、そして新しく出てきた奴等が敵だと思えば良い、身内は仲間だと思っていなさい」

「……はい」

「不安なら全て敵だと思いなさい、そうすれば楽よ。もちろん私も」

「お嬢様はお嬢様です、敵になる事などあり得ません」

「そう、なら戻りなさい、あの男とは私がケリを着ける」

「良いかお空、俺の合図で俺を撃て、良いな」
「うん！」
「てんこは出来るだけ咲夜を挑発、良いか？」
「フフフッ、今、ＥＸを超えた最終鬼畜モードの天子さんだから大丈夫」
不気味なほど笑う天子、紅魔館正門を前で、作戦を建て終わると皆とハイタッチをする。
「行くぞ！」

「寝れねー」
バッチリと開眼した表情で正門を守る美鈴とチルノ。
「美鈴、だいじょーぶ？」
「まぁ、そこそこ。チルノは？」
「アタイは大丈夫だって」
「最強だからな」
「さいきょーだもん」
「……ん？」
チルノの声が二つ、聞こえたのは幻聴か、そう思い横をゆっくりと振り向く美鈴。
「どーしたの？」
「如何したんだ？」
一匹だけ、何故か、大きい男物の服を着て、顔の横に面を着けていた。
龍と書かれた面を着けて。
「本当に俺ってば、最強だから」

紅魔館内、静寂を保っていたが、崩れ、轟音の様な爆発音が外から響く。
「咲夜さん応援お願いします。正門から突撃してきました！」
「美鈴、持ちこたえなさい、今行くから」
雑音の中、扉の前で響く美鈴の声を聞き取り、ナイフを構えて外へ出る。
正門ではすでに激戦が繰り広げられ、砂埃が仲間も味方も包んでいた。
「しゃがみなさい美鈴、チルノ！　奇術『ミスディレクション』」
大量のナイフが砂埃目掛けて飛んで行く、金属と金属がぶつかり合う音が聞こえてくるだけで悲鳴などは一つも無かった。
「残念でした」
鉄の板で防御したお空が板から顔を出し、舌を出して咲夜を挑発する。
「倒せたと思ったの？」
鉄の板から天子も顔を出す
「チッ、美鈴、貴方は鴉を、私はあの天人と……って聞いてるの美鈴？」
砂埃が消えると美鈴とチルノが姿を現す、だが。
「なっ！」
二人ともロープで手足を拘束されていた、声が出せない様にロープを口にも巻きつけて。
「な、何が」
二人の拘束を外し、美鈴に話を聞く咲夜を見て、天地コンビが笑いを漏らす。
「咲夜さん！　さっきの私を追ってください」
「（さっきの……？　もしかして応援を読んだ美鈴は、あの男の変装！　でも声帯を真似る事なんて出来たのかしら、いえ、それよりお嬢様を！）」

門へ向かう咲夜にお空が回り込む。
「館へ行かせない気？　悪いけど貴方達の相手は美鈴がするわ、それに私の能力忘れたのかしら？」
懐中時計を取りだした咲夜、だがお空はそんな事に動じてない。
「アレを見ろ！」
お空は指を指す方向、咲夜は警戒しながらも振り向く。
そこには鉄板を持ったまま立っている天子がいた。
「あの自分の胸の様な板を持っている、天人が如何したのかしら？」
「絶壁？　それは過去の話、今は違うはよ」
天子は鉄板から手を放す、明らか異和感の様な物を感じた、咲夜はまるで『絶対に有り得ない』物を見た様な顔をする。
「ほ、ほ、ほ、豊乳だとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
『揺れる事のない絶壁』の二つ名を持つ天子、それはまな板同然の平らな胸から来たのだが、今の彼女は違う、服のボタンがはち切れるほどの豊かな胸を持っていた。
「バカな！　奴は私と同格だったのにEほどに成長してるだと！」
驚きを隠せない咲夜が下唇を噛み締め、ついには血涙し始めた。
「メイド、一つ言っておくわ」
「な、何？」
「胸があると肩が凝るわ」
ブチッ。
「何か動き辛いし」
ブチッ。
「彼には毎日こう言ってるわ『当ててるのよ』って」
ブチャ。
堪忍袋の緒が切れる所か、堪忍袋自体が潰れた様な音が咲夜から響く。
「あら、そう言えば、凝るほどの胸を持っていないのが一人……」
「……」
「ざ、残念ですが、チルノも入れればふた……」

「おお、アタイってば胸が大きくなってる！」
バッと振り返る咲夜、そこでは美鈴並みの巨乳と化したチルノが立っていた、自分の胸を触り、美鈴に見せびらかす。
「でも、肩が凝る」
ピーと言う、もう何の音か分からない擬音が咲夜の頭から聞こえてくる。
「ＯＫ、お嬢様すいません、ちょっと暴れます（皆殺します）」
無数のナイフがスカートから落ちる、咲夜の眼は紅く、まるで操られている様な変な動きを見せる。
「メイド秘儀『殺人ドールＥＸ』！」
敵味方など今の彼女には関係なかった、ただ『豊か』である者に、正義の鉄槌、そして、死刑の判決を自らが実行する、処刑魔人と化していた。
「日々、牛乳を飲んでも、自分で揉んでみても、寄せてあげても、たった一？に喜びを感じ、今後の成長を期待する為にさらに牛乳を飲み、揉んだりと、試行錯誤を繰り返してきた、なのに、たった、たった数日で巨乳になりやがって、このクソがぁ」
まるで糸で操られた人形の様に、変な動きが咲夜を操っていた。
「豊富な女（胸のある女）は殺す、殺す、殺します、ウフ、ウフフフ」
「やべぇ、咲夜さん、何か黒歴史の何か体に宿らせちゃったよ」
「アタイに任せて！」
そう言うチルノを押さえつける。ここで行けば無限ピチューンの嵐だろう。
「そう言えば赤髪で、貴方より胸のある人が『私の上司、私よりちっさいんだよ』とか言ってたわ」
ギギギと首を曲げ美鈴を見る咲夜。
「ＯＫ、オ前モ敵ダ」

「……小町」
「はい、何ですか映姫様」
「後で説教です」
「何で！」

73 ― 紅魔の館リベンジ（後書き）

主「ダイハードはやっぱり1と2だな」
晴「執筆してください」

７４ー紅魔の館リベンジ　？

作戦名『ＰＡＤボム』。
まず、正門の門番を捕獲、次に一人が美鈴を演じ、咲夜を外へおびき寄せる。
咲夜を挑発し、咲夜を暴走させ、敵味方関係のないバーサーカーへと変貌させる。
だがこれは時間稼ぎ、美鈴を演じた奴は紅魔館へと侵入する。
この作戦は予想通り成功、次の作戦は中から外壁を崩す『ダム決壊作戦』。
「小悪魔、パチュリー、レミリア、フランを倒し、ブツを回収する」
「でも、作戦もそこまでよ」
小悪魔さんには手刀でダウンさせ、現在パチュリーと戦っている。
「強い、魔法使いの強さは異常だな」
「魔理沙のパワーには負けるは、まぁ、ゴリ押しだから、バテるのが早いけど」
「喘息持ちのアンタに言われたら魔理沙も終わりだよ」
お互いに構え、一歩も動かない。
「撃つと動くとかはしないのか？」
「魔理沙ほど単純じゃないわよ、貴方が動く時を待ってるの」
両者、睨みつけるだけで進展は無い、だが晴輝には勝機があった。
「さっきから魔理沙、魔理沙って魔理沙の事が好きなんだ」
「ちょ、ちがっ……ええそうよ、悪い？」
一瞬だけ取り乱したがポーカーフェイスを保とうと首を横に振り、平常心を取り戻す。
「貴方、魔法使いに似てるわね、私の所で魔法でも習ってみる？」
「残念だけど俺は魔法使いじゃないんだわ、俺は……」
「錬金術、石を金に変えたり、土から生物を作る、魔法使いの超上級者が使える、言わば『神』に似た存在、貴方は錬金術を使い、あ

の天人と、チルノに細工を施した、自分にもその能力が使えるんでしょ、だから美鈴の声を真似た」
「おっと、そこまでだ、確かに俺は錬金術師に似ているかもしれない、でも親父が龍の化身だぜ、A型とB型の夫婦にO型の子供は生まれない、だから……」
「母親」
「……」
晴輝は口を閉ざした、ここまで調べられているとは思わず、顔を抑え、笑い出す。
「そうだ、母親が錬金術師だった、それに気付いたのは阿求を救った時だ、あの時、俺は眠るご先祖様に聞いたんだ。性質変化、『あらゆる物を変化する程度の能力』について」
「でも彼女達は知らなかった」
「そう、母の能力、俺は母は俺から救おうと、この刀を売ろうとした、それに気付かず、俺は……」
「後悔した？」
「してはない、でも少し罪悪感はある」
「そう」
「おしゃべりは終わりだ、かかって来い、魔法使い！」
「そうね、火符『アグニシャイン』」
パチュリーの指先から放たれる炎、だが刀を振るい、炎を消し飛ばす。
「ドラァァァァァ！」
刀から放つ通常弾幕、無数の赤い球体がパチュリーを捉える。
「ホーミング！」
だが弾幕を紙一重に避け、どんどんと晴輝に迫る。
「喰らえっ！」
刀の峰を振るうが、パチュリーは刀身を足場に上へと飛ぶ。
「上への警戒が薄い」
斬劇を飛んで避けたパチュリー、晴輝の頭の上で本を広げ、何か

を詠唱し始める。
「火符『アグニシャイン上級』」
頭の上から勢いよく放射される炎を回避するため、前へ転がる。
炎は俺の居た場所を燃やす、回避してなければ炭になっていた事は間違いない。
「次は外さない」
「OK、かわしてやるよ」

紅魔館の地下、分厚い扉を押し開け、中へと入る。
「あ、お兄ちゃん！」
ドアを開けた途端、フランが飛び込んでくる。
仮面はボロボロになり、後頭部、腕の流血が酷い、栓を失った
「一年ぶり、三カ月ぶり、どっちかな？」
フランを抱きとめ、頭を撫でる。
「約束通り、遊びに来たよフランちゃん」
一年前、何故か一年前の幻想郷に戻された晴輝、三対一では分が悪かった為、フランにある約束をしたのだ。
『また今度遊びに来る』、そう言ったのだ、今日、約束は果たされる、だがまず先にしなければならない事がある。
「遊ぶのは少し待って、皆を寝かせてから遊ぼ」
「分かった、でも早くしてね」
そう言って地下を後にした、目的の場所はここより上の場所、そこに二つの武器があるのだ。

７４ー紅魔の館リベンジ　？（後書き）

主「もっとバトルがうまく書きたい」
晴「自分で自分を磨いてください」

75 ―弾幕ごっこ【レミリア・スカーレット】

紅魔館の廊下、外には必死に戦っている天子とお空が見えた、一刻も早く、斧と槍の回収をしなければならない。
「たっく、あの時より殺気を出して……反抗期ですか？　レミリア」
「我が館にようこそ仮面の男、招待状何か出してないけど……貴方和菓子屋から泥棒へと転職したのかしら？　魔理沙も馬鹿なのかしらね、こんなのが助手だなんて」
「ようやく、最初に会った時に俺を殺そうとしたのが分かった、負けて僻んでるんだろ？」
「別に……ただ妖怪としての威厳が保てないのよ、貴方みたいな人間風情に私は倒された、フランと共に、幻想郷の妖怪の頂点に立つ吸血鬼の姉妹が、こんな男に倒されたなんて、冗談でも言えないわ」
「実際に起こった事だけどな」
「あの時、殺しておけばよかったわ」
「そうかい、俺はあの二つの武器さえ返してくれればそれで良い、そうしたら特別に言わないでやる『紅魔の吸血鬼は俺ごとき人間に倒される低種族だ』って」
「武器を……持ちなさい、死と言う運命に抗いたければ」
「俺の運命はレミリア、お前には決められない、悪いけどさっさと不様に負けてくれ」
「泣いて命乞いしても助けないわよ」
右手に血の様な真っ赤な槍を握り、狂ったように笑いだす。
「フランちゃん、お姉ちゃんと俺と三人で遊ぼうか」
「えっ、ホント！　何して遊ぶ？　フランはねぇ……」
「「「弾幕ごっこ！」」」
三人は武器を構え、館の壁を破壊し、外へと飛び出す。

「狂ったように踊りましょう、フラン！」
「壊れない限り遊びましょう、お姉さま！」
神槍と似て対する武器、魔剣、禁忌『レーヴァテイン』、今回は二人の息が合っており、それに本気、確実に潰される事を覚悟した晴輝、だが何故か頬は緩まり、言葉を漏らす。
「仲直りして良かったよ、本当に」

フランは取りだしたスペルカードを無惨に破き、紙くずを散布させる。
「禁忌『クランベリートラップ』」
星が描かれた四つの陣が出現し、晴輝目掛けて弾幕を放つ。
通常弾幕のホーミング弾は全て陣に向かい、晴輝は弾幕を避ける防戦に徹していた。
「悪いけど、弾幕ごっこに『卑怯』何て言葉は無いわよ、先に被弾（殺さ）するかそれとも、被弾（殺すか）させるか」
レミリアはスペルカードを取り出し、体を十字にし、唱えた。
「紅符『不滅城レッド』！」
レミリアから放たれる十字の光、前門の虎、後門の狼とはこの事だ。
「避けられないなら壊すだけだ、お空！」
その瞬間、晴輝に向かって一線の光が飛ぶ。
「必殺のチョン避け！」
光線は軽く避けられるが、晴輝の回りの弾幕を飲み込んで言った。
「うにゅ！」
所々から血を流すお空、戦っている相手がバーサーカーソウル発動しているのだ、無理もない、でも今のメイド長とは死んでも戦いたくない、そう思った、だって。
「ヒヤッハー！　テメエら全員血祭りにあげるわ！」
「咲夜さん！　私達味方だから、ナイフ投げないで！」

「アタイの氷壁も軽く破られるなんて！」
乱れているを通り越して壊れているメイド長、作戦の効果は絶大の様だ。
「卑怯何て言わないよな、元から二体一なんだから」
「そうね、でもこれで避けられたなんて思わない方が身の為よ」
不意に一年前の事を思い出す、クランベリートラップ、弾幕自体には追尾機能は無い、だが弾幕を発射する陣は常に相手に弾幕を放つ。
「カハッ！」
弾幕が数発被弾する、四肢に、頭部、腹部にも一発。
「弾幕ごっこでは一瞬の気の緩みが勝敗を分ける、覚えておきなさい」
口から零れ出る血を手の甲で拭い、スペルカードを握る。
「刀符『伝家の宝刀』」
刀から漏れだす炎、周囲の温度を高め、晴輝を燃やす。
炎は刀の刀身に、とぐろを巻く蛇の様に伸びて刀身を巨大化させる。
「禁忌『レーヴァテイン』」
フランは武器を握り、笑う、彼女はただ純粋に戦いを楽しんでいる、その心は生水の様に澄みきっていた。
妖刀と魔剣、似て非なる武器は炎を出し、ぶつかり合う、刃が重なるごとに斬撃は早く、重くなっていく、だが体力の消耗して行く晴輝に対し、フランは余裕の表情、フランより早く一撃を入れないと確実に上半身と下半身で半分になってしまう。
『死にたくない』、そう念じている晴輝に背後から槍を構えてレミリアが構える。
「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」
背後からの攻撃、晴輝に防ぐ武器も術もない、死を覚悟した。
ガキン、と言う金属がぶつかり合う音、その音に晴輝は救われたのだ。

漆黒の翼、金髪の少女、幼い体にふくよかな胸、頭の上に赤い天使の輪をつけ、右手には黒い刀身の大剣、見覚えの姿だが何か、懐かしさを感じる、そう妹の様に思っていた晴輝の友人。

「ルー……ミア？」

ルーミアらしき存在はコクリと頷き、グングニルを弾き飛ばす。

「今宵の晩餐は吸血鬼なり、さぁ食事を始めよう！　晴輝、仕置きは後だ」

75 ー弾幕ごっこ【レミリア・スカーレット】（後書き）

主「ちょっと厨二臭いるーみぁだな……そうだ、エロくしよう」
晴「自重してください」

76 一人喰い妖怪の晩餐

ルーミアらしき存在と晴輝は共闘していた、性格が変わり、明らかルーミアとは異なる人物だ、だが晴輝はあのマイペースだったルーミアと今のルーミアが同じに見える。

「ストームブリンガー！」

大剣を軽々と片手で振り回し、レミリアを蹴散らす、ルーミアは確かに強い、だがここまでの実力は無い。

「ＥＸ化……そう考えるべきか」

存在の強化、例えば地上で戦っている咲夜、自我も理性も失い、本能のままにナイフを投げる。アレも一種のＥＸ化と言える、と言うかあの人の場合リミッターがオフされただけだが。

「ルーミア、レミリアを頼む、俺はフランと戦う」

「了解した」

「人を喰う事にしか脳に無い妖怪が私と対等に戦えるかしら？」

「私は救われた、晴輝は私の人間の友達」

「何言ってるの？」

「あの時から晴輝の事を思っていたのかもしれない」

「妖怪が人間に恋い焦がれた！　面白いわね、文にでも売ってあげようかしら」

「本当はお前もだろ？　自分を負かした時の事より、自分の事を忘れられていた事の恨みが強いんだろ？」

「人喰い妖怪風情が何を言うと思ったら……」

「自分を倒し、妹との仲を再び結んでくれた晴輝を自分は好きなんだろ？　でも忘れていたから腹が建った、そうでしょ？」

「戯言に付き合うのは飽きたわ、ねえ、貴方は自分が食べてきた人間の数を覚えているの？」

「……物心付く前から食べてたでも、今はそれより美味しい物がある、満たしてくれる人が居るわ」
「馬鹿馬鹿しい、良いわよ、遊んであげる」
黒い刀身を突き付け、書かれている赤い字を指でなぞる。
「それはこっちのセリフだ、吸血鬼！」

「お兄ちゃん、中々壊れないね」
「いや、アバラ、腕、足、色々とボロボロですよ」
「でも壊れてないよね」
「ああ、壊れない限りは遊んであげるからな」
晴輝は既に虫の息、フランは無傷、弾幕が数発は当たっている、だがそれはレーヴァテインにである。
弾幕も全てレーヴァテインで弾かれている。
「お晴、応援に来たよ！」
「たっく、こんな子供相手に手を焼いてんじゃないわよ」
「咲夜は？」
天子とお空は揃って指を指す、その先には何故か大乱闘を繰り拡げている、チルノ美鈴ペアと咲夜が居た。
「仲間割れ？」
「どちらかと言うとあの絶壁女の暴走よ、それにしても肩が凝……」
「……」
サクッとスナック菓子をかじった様な音が天子の頭部から響く、体が頑丈で有名な天人の額にナイフが刺さる。
「いい加減にしないと殺されるぞ、てんこ」
「……うん」
刺さったナイフを抜き、止血する。
「お空は俺と、てんこはルーミアと一緒に戦ってくれ、レミリアは気絶させて、フランちゃんは……満足するまで遊んでやるぞ、各自の判断で限界だと思ったら離脱してくれ」

「分かったわ」
「うにゅ」
天子は激戦をしているレミリアとルーミアの元へ、お空は俺と一緒にスペルカードをひらひらとさせているフランを相手にする。
「沢山、遊ビマショ？」
「一撃で倒す技はダメだ、必殺は相手の気分が紅潮した時だけ、スペルカードは俺は後一枚、そっちは？」
「まだ沢山あるよ」
「俺も増やしたいけど、無理かな、お空は援護射撃、俺は前線で刀振って来るから」
「うん、けんとーを祈る！」
再び刀を強く握り、フランの前へ飛び出す。
「オ兄チャン、モット、もっと遊ボ」

「人喰い妖怪が！　私と対等と戦うなんて」
「ここで登場、天子さんスラッシュ！」
緋想の剣をレミリアに振りかざす天子、その顔は自信と勇気に満ち溢れていた。
「天人……初めまして、晴輝の女です」
「初めまして人喰い妖怪、晴輝の物です」
「……」
「……」
睨みあう両者、目の前の強敵よりも隣の恋敵が気になり、両者とも仲間の顔をマジマジと見て動かなかった。
「ここまで侮辱されたのは初めてだわ、そうね、串刺しにして頂こうかしら！」
手に持つ紅い光の槍グングニル、共に持つのは晴輝の探し求めている槍、二つの槍を構え、突撃するレミリア。
戦いは激戦と化した。

76 一人喰い妖怪の晩餐（後書き）

主「皆さん『裸Yシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』に入りませんか？」

晴「どんな教団ですか」

主「どちらも物を愛す教団」

77 ― 紅魔の館最終章　鬼畜

分厚い壁の向こうには私の知らない世界が在る、私はそんな物に興味は無かった。
新しい人間（オモチャ）が欲しい、こんな動かない死体（オモチャ）はもう要らない。

ねぇ、門番さん相手してくれる？
そう、壊れないでね！

如何したの、何を怖がってるの？
包帯にグルグルにされて何の遊び？
今日も遊びましょ、昨日みたいに。

ねえねえ、そこの紫の人、赤い人も一緒に遊ばない？
そう、遊ばないの……。

ねぇ、新しいメイドの人、ナイフ投げとか見せてくれない？
危ないから出来ないの？
……。

お、お姉さま、お話しよ
しないの……そう。
フランね、遊びたいだけなんだよ、それだけなんだよ。

魔法使い、遊ぼう！
えっ、遊んでくれるの！
それじゃあねぇ、弾幕ごっこ！

お姉さま、私、外の世界を見てみたい。
五〇〇年近くも外に出られなかったから、ね？
良いじゃない、お外でたいもん。私、お外に出たい。
たった一回位の我儘くらい、聞いてくれたって……。
お姉さまのバカァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！

お、お兄ちゃん大丈夫！？
血が沢山流れて……咲夜に頼んで包帯して貰おう！
え？　楽しかったよ、またやりたいかって？　やりたいけど、壊れるの嫌だな。
私、意識がねどっかに行っちゃうの、それで気がついたら私は帰り血に溺れてて……。
また遊んでくれるの？　本気で！
そしたら約束、指切りせんまん嘘吐いたらレーヴァテイン飲―ます、指切った。
えへへ、約束だよお兄ちゃん。

「禁忌『フォーオブアカインド』」
フランが四人に分身し、それぞれに弾幕を放つ、四人の連携が取れた攻撃に晴輝とお空は攻撃の隙どころか、体を落ち着かせる暇も無く呼吸すらも苦しい。

「禁忌『カゴメカゴメ』」
「禁忌『レーヴァテイン』」
「禁忌『禁じられた遊び』」
「禁断『カタディオップトリック』」
連続スペル、この絶体絶命の危機に晴輝は笑っていた、ここで苦しい顔を見せてはならない、笑顔を見せ、弾幕を避ける、被弾した場所から大量の血が流れようと、骨に罅が入る音が耳に入ろうと、筋肉が千切れた感覚が分からなくても、ただひたすらに攻撃を避ける事と、楽しんで避ける事を忘れない。
ここで晴輝が苦しめばそれは虐め、晴輝が狂気すればそれは戦いとなる。
子供との約束も守れないのなら死んだ方がマシ、とさえも考えていた。
「（あの子は笑えてる、笑えない環境があの子を捕らえてただけなんだ、なら不肖マスク・ザ・ドラゴンは、フランちゃんと全力で遊ぶ！　筋肉が千切れようと、脊髄に亀裂が入ろうと、頭蓋骨が砕け、灰が潰れ、体中の血管が切れても、フランちゃんと遊んでみせる！）」
お空とアイコンタクトを交わすと晴輝はスペルカードを取り出し、お空は体を丸くしていく。
「龍撃『諸刃の剣』」
「『アビスノヴァ』」
晴輝の翼から飛んで行く追尾機能付きのレーザー、それは辺りの弾幕を蹴散らし、二人のフランに命中した。
お空の広範囲の攻撃は弾幕を喰らう様に飲み込み、一人のフランをも光の中へと消し飛んだ。
だが本体はまだ残っていた。
「流石にお空はダウン、てか元人間がここまでやれるって凄くね？」
お空はゆっくりと下へ降りて行き、気に凭れていた。
手足の至る所から血が出て、眼は既に瞳孔が開きかけていた。

「もう止めよ」
「何で？」
「お兄ちゃん死にそうだよ、それにわたしもう満足だよ」
「大丈夫、まだいける」
「本当？」
「ああ、嘘吐かない」
「なら、最後の一枚、私満足だから」
「分かった」
フランちゃんの取りだした最後の一枚、だが晴輝にはもうスペルカードなど残っていなかった。
「（ああ……痛ぇ。そう言えば、まだアレ試してなかったな）」
ボロボロの右腕を出し、構える。
「秘弾『そして誰もいなくなるか？』」
フランは身を消し、無数の弾幕が放たれる、晴輝は朦朧とする意識を何とか留めさせ、右手を構え、左手で出血する脇腹を押さえる。
微笑む様に頬を緩ませ、右手を開く、血が流れる事を、筋肉が千切れている事も、骨に罅が入っている事も忘れ、右手に薄れ行く意識を集中する。
「マス……」
晴輝の右腕の骨が砕けた、折れたのではなく、『粉砕』。腕が変な方向へ曲がり、肩から腕が脱臼し、晴輝本体も吹っ飛んだ。
だが本人の断末魔も、お空の叫び声も、天子とルーミアとレミリアの激戦の爆轟音も、全て掻き消された、たった一本の光線に、黄色く輝く一本の柱に。

77 ― 紅魔の館最終章　鬼畜（後書き）

主「『裸Yシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』……どっちを立ち上げればいいと思う？」

晴「違う作品でも言ってましたね……どっちでもいいです」

78ー　花果子念報

『花果子念報』、妖怪の山で『文々。新聞』と共に発行されている新聞だが、購読者は少なく、姫海堂はたても特大ネタを求め、幻想郷を飛び回っていた。

「『紅魔館の半壊、紅魔の姉妹喧嘩が再度勃発』、何か引っかかるわね」

手帳を眺めすがら空を飛ぶ、時たま頭を掻き、思いつめた様な顔をする。

今回の一件は明らかにスカーレット姉妹の仕業ではないとはたては考えている、館全体に突き刺さった無数のナイフ、溶けた様な館の一部、ナイフまみれの門番、なのに主であるレミリアは「ちょっとフランと喧嘩しただけよ」と一点張り、妹のフランは悲しい顔で「楽しかった」と言っていた。

「今回の一件は文にも聞いてみましょう」

「文、何時まで引き籠ってんの？」

文の家、返事も待たずズカズカと部屋へ入って行くはたてを誰も止める者は居ない為、恐ろしく重い空気に満ちた一室の前へと着いた。

「ちょっと、暗いわよ」

部屋の中は暗く、何故か部屋の隅で何かが蹲っていた。

「あやや？　はたて如何しました？　アウトドアになりませんよ、インドアで良いんです、あややややややややや」

地霊殿のイケメンマッサージの男が地上で和菓子屋を始め出した頃、文は部屋に籠ってしまっていた。

持ち前の幻想郷最速で瞬時にネタを探し、今の今まで新聞を作ってきたのだ。

「ふふふ、私の初恋は終わったのですよ、あんなムードも考えないで告白して……半裸で告白だなんて」
「良いんじゃない？　もっかい脱げばその男もイチコロだって」
半裸どころか全裸で性交を行っている晴輝からすればどんな誘惑さえも軽く見えてしまう現状況を二人は知る筈は無かった。
「だ、ダメ！　私は『清く正しく美しく』の射命丸文だから！」
「何か付け加えられてない？　まぁ良いわ、私だけで今回の一件調べるから、ダブルスボイラーでやりたかったんだけどね」
「あやや？　はたてが私と組みたいだなんて……明日は白狼の太刀でも振るのかしら？」
「弾幕の雨なら紅魔館に降ったけどね」
はたては文に自分のメモ帳を渡した。
「今回の一件、あんたの思い人の仕業かもって、元祖泥棒（霧雨魔理沙）と金欲の塊（博霊霊夢）が調べてるわ。次狙われるとしたら博霊神社の『龍の爪』、まぁ鉤爪だけど……それで私は早期解決の為にあの二人に力を添えてるのよ」
文はメモ帳のページをどんどんと捲って行く、時には表情を強くしたりしながら。
読み終わったメモ帳を閉じ、はたてへと投げ返し、立ちあがった。
「力を貸しましょう、しかしネタは供給しあう事、何かあったらはたてのが全面的に責任を取ってください、これが呑めるのであれば手伝います」
「良いわよ、その代わり別々に探すわよ、互いに情報を交換しながら行きましょ」
「ええ、では行きましょうか。私達、ダブルスボイラーから逃げられると思わないでくださいね、晴輝さん」

迷いの竹林の奥深くの永遠亭。
「ん？　晴輝、どうかした？」

優曇華の前に車椅子を動かしながら近づいて来るドラゴンが居た。
両足と右腕に太く巻かれた包帯、頭にも包帯を巻き、
「いやね、何か嫌な気がするんだ。何かヤバいのが近付いている様な」
「大丈夫、何かあったら全力で助けるから」
「ありがとう」
二人の会話に横から輝夜が乱入してくる、某携帯ゲーム機を持ち、画面には凄く硬そうな武装をした女性が映っていた。
「ちょっと、こんな所に居ないで手伝ってよ、砕けた天角が手に入らないのよ、私は太刀、てゐはガンナーで行くから」
「分かりました、じゃあ自分はスラッシュアックスで行きますね」
「中々良いチョイスね、でも巻き込まないでよ?」
「大丈夫です、太刀もランスも双剣もスラッシュアックスも使いなれているので」
「心強いわね、それじゃあ行きましょ」
永遠亭は日に沈んでいく、そこでてゐが晴輝の持っている携帯電話を握っていた。
「ありゃ? 光った」
神の気紛れか、はたまた幸せ兎の力なのか、形態の電源が息を吹き返した。
勝手に携帯電話を触っているうちに、カシャと言う音が携帯電話からする。
画面には晴輝の顔が映っていた、どうやら偶発的にカメラ機能をてゐが選択し、晴輝の横顔を撮ったのだ。
そのまま携帯電話をしまい、てゐは携帯ゲーム片手に晴輝や輝夜の元へ走って行った。

７８－　花果子念報（後書き）

辻虎脳内会議室から出て三分の焼き肉や『おりんりんランド』。
主「今日ここ来てもらたのは他でもない」ＣＶ若本さん風
晴「いや、知らないんですが……何ですか？　てか何でそんなボイス……」
主「エロスが足りないいいいいいいいいい！」
晴「何口走ってんだぁぁぁぁぁぁぁ！」
主「この小説は作者の自己満足であり、文章力強化の作品でもある、そしてＲ－１７．９９が売りなんだよぉ、でも最近はニャンニャンできていない、１０月２４日は俺の誕生日、ならイベントの一つでも開かなきゃとオジちゃん思ったのよぉ」
晴「オイお前まだ中学生だろうが！」
主「なめるなぁ、机の引き出しの一番下にはエロゲタワー（建設予定）があるのだぁ」
晴「何そのカミングアウト！」
主「黙れぇい！　『俺の妹がこんなに可愛いはずが』的なシリーズも妹はエロゲやってるだろうが、何だよあれ、妹系のラノベかと思って買ったらタイトル詐欺だったぶるぁぁぁぁぁぁあ！　手か最近エロゲ関係なくねぇ？」
晴「まぁ、言い分はわかりますが……」
主「あ、お譲ちゃん、カルビと生よろしく」
晴「オイ、話聞け！」
　ゴスッ、バタ。
主「寝たか……俺は１０月２５日から修学旅行に行ってきやすぅ、感想とかバンバンよろしくね、エロいお話はもう少し後、心配するなぁ、ちゃんと自重は『しない』から安心してくれぇ、これからも俺の作品をよろしくお願いしますぅ！」

１０月２４日楽しみにしていてください。

７９ー永遠亭入院録　三日目（前書き）

今回は豪華二本立てです、十五歳になりました。

79 ― 永遠亭入院録　三日目

どれだけ寝ていたのだろうか、体を動かす感覚が懐かしい、そう思った。

布団の隣ではルーミアが寝ていた、可愛らしい落ち着いた寝息を聞くと晴輝は安心してルーミアの頭を撫でる。

晴輝は手足、頭を包帯で巻かれ、布団で寝かされていた、今回ほど生命の危機を感じた事は幻想郷に来て初めてだった。

もしも魔理沙とかが本気になったら俺は消炭になっているかもしれない。

「気が付いたかしら？」

戸を開けて入ってきたのは救急箱を持って来たうどんげだった。

眼の下に隈が溜まっており、いかにも睡眠不足みたいな顔をしていた。

「大丈夫？　丸三日も寝てたのよ」

「丸三日も寝たっきりで久々に体を動かした時の感想は一つ、疲れが取れた気がする」

「それだけ言えれば退院しても良いじゃない？　まぁ、師匠が言うには後四日は安静にする事が一番の特効薬らしいけど」

と言う事は店を一週間ほど閉める事になる、そうなったら里の皆が心配するかもしれない。

「そう言えば、お空と天子は？」

「あの地獄鴉と天人なら別室で寝てるわよ、その子と共に三日三晩泣き通しだったんだから謝っておいた方が良いわよ」

それを聞くと晴輝は立ちあがる、一瞬倒れそうになったがうどんげが体を支えてくれたので倒れる事は無かったが、病み上がりの体に鞭を打って足を動かす。

その前にルーミアを横へ退かす。

だが三日の間動かさなかった脚は鉛の様に重く感じてしまえるほ

どに鈍っている、危なっかしい歩きをしている晴輝にうどんげは車椅子を用意した。
「使う？」
「有り難く使わせてもらうよ」
車椅子に腰を下ろし、うどんげに押して貰い部屋を移動する。
月明かりが晴輝を優しく照らすが、この光も眩しいと感じてしまう。
着いたのはお空と天子の寝ている部屋、一つの布団に二人で入っている。
「この二人の怪我は完治したのか？」
「治ったわ、でも見るのが痛々しかったわ」
「……そうか」
思いつめた顔で二人の顔を見る、今は閉じているあの目蓋の下は瞳が真っ赤になっていると思うと罪悪感が心を埋める、それどころか怪我までさせた、これなら一人で乗り込んだ方がマシだったのかもしれない。
「ねぇ、月でも見て愚痴らない？」
「え？」

「まだ満月じゃないけど綺麗だな」
「そうね」
永遠亭から見る月は綺麗だった、だが二人とも月を見て顔を暗くするばかりだった。
「私はね、月の兎なの」
「月の？」
「ええ、これでも戦場に立ってたわ、でも怖くなって逃げ出した。自分の弱さが悔しかった、自分の無力が憎たらしかった、今でも仲間が私の事を恨んでないかがすっごく怖い」
「恨んでるだろうな」

「そうね」
「俺も同じだよ」
「え？」
「目の前の事しか考えてなかった、誰かを守ろうとしたら誰かに批判される、そんな選択肢を前に俺は逃げ出した、だから神田晴輝は死んだ、今は『お晴』『晴輝』『マスク・ザ・ドラゴン』のどれかだ。」
キスメ、ヤマメ、パルスィ、勇儀の四人の顔が浮かぶ。
俺はあの時迫られていた、男としての責任、如何いう理由であれ抱いた女を捨てる事が出来なかった。そうすれば彼女達の純潔を奪った悪人だ、だが堂々と四股をかけているのに今さら魔理沙の元に帰れなかった。
だから俺は魔理沙達、過去を捨てた。だが本当は会いたかったのかもしれない、如何すれば良いのか魔理沙に相談したかったのかも知れない。
でも、その思いはたった一人の魔理沙を愛す女性に砕かれた。
「いや俺はここに来る前から死んでるよ、他人の気持ちを理解せず、家を捨てて武器を持って逃げ出した家出男だよ、それがまた家出したんだ、魔理沙の家から」
ひっそりと暮らせればいいそう思いねあの家も買ったのかもしれない。
そして天子やお空と出会い、共に寝食を共にし、天子に言い寄られた俺は抱いてしまったのだ。お空もそんな感じだった。
「あはは、よく考えれば俺、既に男でもねぇ」
大量の涙が晴輝の頬に流れ、落ちて行く。
自分の不甲斐無さ、精神の弱さ、馬鹿がこの状況を生んだのだ、死にたくてしょうがなかった。
そんな晴輝にうどんげは感情移入した。
自分と似ている、まるで過去を見ている様な気がしたのだ。
「今なら間に合うわよ」

「……」

「私には勇気が無いから出来なかった、でも貴方には勇気はあるでしょ、自分の事なんだから自分で決めて自分で動けばいい、時間はあるのだから」

「そうだな、そうだ、自分の意志で動けばいい」

今はただ自分の体を直せば良い、そう思えば良い、未来の事など今の自分に知る予知も無く、賭け事の様に予測すればいいのだ。

投げたコインが表になるのか、それとも裏になるのかを。

79 ― 永遠亭入院録　三日目（後書き）

主「うどんげのフラグ取りに行くゼェェェェェェェェェェェェ！」

晴「また死亡フラグが建設された……」

修学旅行の為に感想返信は木曜日となります。

８０ー永遠亭入院録　四日目

日が沈む寸前の迷いの竹林。
「てゐ、本当にここにあるの？」
「うん、確かにここにあると思うよ」
二人の兎が地を警戒深く見渡す。
永遠亭の生計は里で振り払った薬によって成り立っている。
だがてゐが誤って、お金を落としてしまったらしく、無関係のうどんげと何故か怪我人である晴輝、てゐを巻き込んで捜索中で会った。
「ここにも無いな」
軽く一時間ほど経つが何処にもそれらしき物は見つからない。
見つかるはずもない、何故なら既にもうてゐが回収している、てゐの懐にある物を竹林で探しても見つかりはしない。
「（ふっふっふっ、今回はローションたっぷりのヌルヌル落とし穴ウサ、これをししょーに売って小遣いを儲けるウサ）」
等とあくどい事を考えてるが誰も気づいていなかった。
「あ、そう言えばそこ等辺で落とした様な、うどんちゃん、そこ行って」
てゐの指さす方にローション落とし穴がある、わざとそこへ誘導し、ローションの未知なるパワーで、厭らしい写真を撮り、売りつけるてゐの完璧の作戦。
だがそれはある男によって打ち壊された。
「おりゃ！」
晴輝が紅魔館の一件で取り返した槍をうどんげの向かうポイントへと投げつけた。
「あ、危なっ！　何するんですか！」
槍はうどんけの足元に深く刺さり、驚いたうどんげは腰を抜かしていた。

「ゴメンゴメン、でも……」
車椅子を自分で操作し、刺さった槍を抜き、今度は大斧をその場所に降り下ろした。
バキィと音がすると地面は深く抉られるが、まるで誰かが掘った様な穴が姿を現す。
「落とし穴、下は……とりもちとローションがあるな」
「て～ゐ！」
「（さ、作戦失敗！　如何する！）」
てゐは少し考えた後、手をポンと叩いた。どうやら打開策を考えたらしく、まるで自分が無関係の様な、被害者を演じ始めた。
「ち、違うウサ、それは……そこのお兄さんがやれって……動けなくなったうどんちゃんを獣の様に貪り、挙げ句の果てには自分のペットの様に……」
「悪いが俺は既にペットだ、地霊殿で一週間近くペットやってたし、それに俺が犯人だったとして、態々作った落とし穴を知らせなきゃいけないんだ？」
「それは『ここは助けて俺のポイントを上げとくか』」とか思ったウサよ！」
「そうか、まぁ良いや、うどんげ、とりあえず『てゐ』がお金落とした事でたっぷりと叱って貰おう」
「え？」
「そうですね、師匠にも『てゐ』を厳しく叱って貰えるように私も口添えします」
晴輝にはてゐの考えが分かっていた。
幸せ兎と言われる半面、てゐには悪戯好きな性格がある、なら本当は金を回収し、何かよからぬ事を考えていたのではと思ったのだ。
「まぁ、落としたお金が在れば別だけどな」
「そうですね、お金が在れば……」
てゐは降参した、ポケットからピンクの財布を取り出し、降参の白旗を示してるのか、両手を挙げていた。

「これで一件落着っと」
財布を渡し、晴輝は車椅子をうどんげと共に帰って行った。
「これで勝ったと思うなウサ……」

「助かりました、それとごめんなさい、てゐは昔っからあんな子で」
竹林を二人並んで帰る、悪戯の犯人にされかけたと言うのに、てゐの行動に憎めない晴輝は笑う。
「元気で良いじゃん、無邪気で純粋」
「純粋ですかね？」
「構ってほしいんだよ、兎って寂しいと死ぬらしいし」
「私も、少しは構ってほしい……かな？」
「それは好きな男にでも良いな、俺は確かにフリーだが、家族が沢山いるし」
「そ、そうですよね」
「こんな女ったらしで良いのなら抱いてあげましょうか？」
不意の一言、夕日に照らされている効果もあるのか晴輝の笑顔はうどんげの心を射抜いた。
「抱……く？　え！　そ、その、いきなりと言うのは、まずは手を繋ぐとかそう言う所から……」
「それじゃあ」
そう言って強引に手を引っ張り、車椅子に座った状態でお姫様だっこをして見せた。
「こう言うのはいかがでしょうか？」
「……はい」
うどんげの頬が赤くなっていたのは何故か、それは本人ですら分からなかった。

永遠亭、永琳の薬品研究室。

「……」

永琳はフラスコの中で光る赤色の液体を見ながら、研究を一枚の紙へとまとめていた。

だが、ボキッと何故か手に力が入り握っていたペンが粉々になった。

「うどんげを盗られる、少し灸を据えるのも良いわね、でも私は手を汚したくない」

実験中の薬品の入ったフラスコを持ち、ビーカーに入った青色の薬品と調合する。

調合は成功、フラスコは気味の悪い紫色の液体で満ちていた。

「てゐ、良い作戦は無いかしら？」

「あるウサよ、私達は手を汚さず、尚且つ、確実に仕留められる物が」

今日も一日が終わりかけていた。

輝夜とゲームをして数時間、すでに日付が変わりそうな時間なので晴輝は離脱したが、輝夜は『ＧＥの続編が出るから久々にプレイするわ』とか言って現在もゲーム中である。

「まったく、敵わないな」

少し呆れて言うが、自分も久々のゲームにハマっていたりもするので、深くは言えなかった。

「晴輝君、入るわよ」

「あ、はい」

ドアを二、三度ノックし、永琳が薬と水を持って入って来た。

「これが今日の分の薬よ」

そう言って渡される薬が三錠、一錠目は骨を治す効果、二錠目は肉を治す効果があると永琳本人から聞いたので間違いは無いが、三錠目のこのやたらと紫な要人不明の錠剤が紛れ込んでいた。

「これは何ですか？」

「これはね、まぁ精神的な治癒の薬、ハーブとか色々と調合してるから多少不気味な色がするけど、心配しないで」
「ああ、そうですかお気遣いありがとうございます」
三つの錠剤を一つずつ飲み、布団へと入る。
「おやすみなさいね」
「はい、ありがとうございま……くかー」
寝付きの早さ、まるで一服盛った様な……。
「……計画通り」
盛った様です。
「後は明日を待つだけね、ふふふ、楽しみだわ」
不気味に笑う永琳、怒りと嫉妬が混ざった様なオーラ、正確にはどこぞの橋姫が背後に居る様に感じられた。
何も知らず薬品でぐっすりな晴輝、自然に髪が伸びている事は寝ている本人には分からなかった。

８０ー永遠亭入院録　四日目（後書き）

晴「俺が逃亡してもう一ヶ月近く経ちますね」
主「こっちの世界じゃ既に三カ月近くだがな」

81ー永遠亭入院禄　五日目前編

「いやぁ、何か昨日の記憶ないな」
気のせいか声が変だった、まるで女性の様な高い声、不思議と体も軽い。
「うどんげ、今日のご飯は……ありゃ？　輝夜さん早いですね、如何したんですか？」
「いや、何かいい具合に起きたから朝飯でも食べてまたゲームでもって……てかあんた誰よ」
まるで初めて見る様な反応、うどんげも赤い瞳を細めてまじまじと見る。
「誰って晴輝ですが……」
「いやいや、冗談は本当に容姿だけにしてほしいわ」
輝夜は箸を加えて懐から手鏡を取り出しうどんげに渡す。
うどんげから手鏡を受け取った晴輝は自分の顔を鏡に映した。
「……」
晴輝は言葉を失った。
本当は言葉はあるがどれを言えばいいのか解らない。
伸びた黒髪、膨らんだ胸、明らかに昨日とは違う顔の骨格、うどんげや輝夜とアイコンタクトを取るが三人とも如何いう事かは理解できていない。
「はっ！」
晴輝は咄嗟に股を押さえ、男性器の有無を確認した。
「なん……だと！」
本来なら生えているそれは無くなっていた。
「如何した事でしょう、まさかそこまで在ったそれは丸々と消えゆとりのあるスペースが……」
「何劇的ビフォーアフター的な解説入れてんの！　確かに無いけどでもあんまりだ！」

「でも、何やら可愛い様な気がしてきました」
うどんげは手をワキワキとさせ、一歩一歩近づいて来る。
「私の服でも着させてみようかしら？」
輝夜もお椀と箸を置き、立ちあがり手をワキワキとさせて近づいて来る。
「ちょっ！　待て俺は男だ、女物の服に興味なんて……」
だが咄嗟に考えてしまう、こういう滅多にない経験は逆に楽しまなければ損なのでは、そう思い一度は踏みとどまるが、
「そうね、うどんげ、貴方の下着そうね、緑と白の縞柄の奴が良いわ」
「姫様、出来ればこの服お借りしたいのですか」
時すでに遅し、輝夜はうどんげのタンスを漁り、うどんげは女性である俺に最適な服を選んでいた。
「サイズ的にうどんげよね、胸も大きいし……ならこの白い純白のレースを……」
「わぁぁぁぁ！　それ私の勝負下着！　ダメです！　これはダメです！」
「ああそれ！　五百年前永琳が買ってくれた私のドレス！　でも結局サイズが合う事は無かった」
「ちょっ！　待て、自重しろ！」
「残念だけどそれは無理な相談です」
「私達の近くに自重しない変態が居るのだから」
「い、嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「我ながら」
「やり過ぎたと思いました」
うどんげと輝夜、二人は頭を下げる。
学生服を剥がされ、素っ裸になった晴輝を女物の衣類やら髪飾り

でコーディネートし、里の人間百人に聞いたら全員が女性だと言うであろう姿がそこにあった。
「騒がしいわね、少しは静か……に……」
艶やかな長髪をポニーテールにし、白い女物の和服を着こなし、着物の帯から溢れるほどの大きな胸、さらに顔は少し紅潮し、服の袖で隠していた。
「どう永琳？　綺麗でしょ」
輝夜は女である晴輝の頬に自分の頬を擦り付ける。
晴輝は恥ずかしいのか、顔を赤らめ細い腕で離そうとしていた。
その時、ブハッと永琳の鼻から血が噴き出す。
「ちょっ、永琳さん！　大丈夫ですか？」
「え、ええ……不覚にも可愛いと思ってしまった、このカップリングも……」
晴輝は懐から取り出したハンカチで永琳の鼻を拭く。
「本当に大丈夫ですか？」
その仕草が不意に輝夜と重なり、永琳は縁側の方を向いた。
「（私の求めた幻想郷はここに在ったのね……我が人生に一遍の悔い無し）」
永琳は多量の鼻血を噴出し、そのまま良い笑顔で倒れた。
「ぎゃぁぁぁぁぁ！　医者が鼻血を出して倒れるとか無茶苦茶ですよ！」
「師匠！」
「え、永琳！？」
この三人の行動は道徳的には合っていた、だが相手は忠誠心を鼻から噴き出す猛者、猫に鰹節を与えればすかさず飛びかかるであろう。
この状況で三人に囲まれた永琳は鼻血の量が増し、他の三人とは早くに小町へと会いに行った。

「いやぁ、危うく死ぬところだったわ」
鼻に丸めたティッシュを詰め込み止血をする永琳、本当にこの人は医者なのかと戸惑ってしまう。
「この姿は明らかに永琳さんの所為ですよね」
「間違って違うお薬渡しちゃったわ、テヘ☆」
「お空に頼んで竹林を消炭にして貰うか……」
「じょ、冗談よ、まぁ半日経てば元に戻るわ」
「まぁ、それまでリハビリついでで歩きますか」
「あ、一緒に行きます」
うどんげが率先して申し出る、永琳は行ってらっしゃいと言い、晴輝達が見えなくなるまで歩いた後、指をパチンと鳴らす。
「てゐ、準備は出来てるわよね」
てゐはコウモリの様に逆さで現れた。
「あの姿なら焼鳥屋も騙されるウサ」
そのまま足から着地し、てゐも指を鳴らす。
その瞬間無数の白兎が永遠亭を囲む様に現れた。
「計画実行、さぁ、叩きのめすウサ」

８１ー永遠亭入院禄　五日目前編（後書き）

最近、パソコンばかり触っていて親に「受験大丈夫か？」と言われました。
心にぐさりと刺さる物がありました。
自分は得意科目『妄想』『計算』の二つしかないので心配です。
今週の金曜にテスト（明日だぜ☆）がありますので必死に勉強しようと思います。
とりあえず目標の点数を目指すために（ストックがないので）土曜日は休日にしたいと思います。
皆さんも勉強頑張りください、努力すればいつか神はほほ笑むと信じて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7667t/

幻想郷と家出男

2011年11月10日08時07分発行